
アイロンより熱く、シャツより爽やかに

井口亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイロンより熱く、シャツより爽やかに

【Nコード】

N7740Y

【作者名】

井口亮

【あらすじ】

青春って何だろう？他愛ない日常に不満と、不安を抱くどこにでもいる高校生、遠藤真一は新任の英語教師に勧められるまま部活動をはじめることにする。だが、その部活は『危険な場所でアイロンをかけるスポーツ』、『エクストリームアイロン』を行う部活だった。友情、恋愛、青春……どれもがアイロンより熱く、シャツより爽やかに。

第12回電撃大賞第三次選考通過作品

プロローグ』という名の但し書き（前書き）

読みやすいように台詞の前には改行してあります。

……プロローグを入れ忘れてたので追加しますた。

ブローグ』という名の但し書き』

まず、はじめに言っておかなければならない。

よく、勘違いされる方が多数居る。

これから僕こと遠藤真一、十七歳が体験するこのスポーツは決して架空のスポーツではない。

競技人口こそ少ないものの、サッカーや野球と同様に愛されているスポーツだ。

だけど、少なからず僕らがこのスポーツにかけた情熱に共感頂けるだろう。

一緒に感じてください。洗濯し終わった清潔なシャツのような爽やかで、熱したアイロンのような熱い、青春の日々を。

ブローグ』という名の但し書き（後書き）

投稿を考えてる方の参考になれば幸いです。

この年の『狼と香辛料』は受賞後に読んで『うわー、面白えー』と唸っただけあって、数年後ヒットしましたねえ。

そっぴや扉の外の土橋先生は今何やってるんだろう。
あの人も面白かったんだけどぬう。

第一章 『アイロンと僕』

「真一、せっかくの土曜日だし今日帰りどつか寄っていき！」

ホームルームが終わり帰ろうとしたところで声をかけられた。

「遠慮しとくよ、金井こそバスケ部の試合近いんだろう？練習に行けよ」

僕は同級生である金井みかの誘いをぞんざいに断ると、薄っぺらい鞆を手に取り席を立った。

僕こと遠藤真一と違い、金井みかは勉強もスポーツもできる絵に描いたようなクラスのアイドルみたいな奴である。

肩のラインで揃えた校則に引っかからない程度の茶髪のショートカット。活発な性格を象徴するような大きな目と、いまだき珍しいヘアバンドが特徴的と言えば特徴的か。

小さい頃からの腐れ縁であり、たまにこうやって声を掛けてくる。

しかし、みかは来月にあるバスケの地区予選にもレギュラーに出されており、今は僕のようなつまらない人間と関わっている暇は無いはずだ。

「たまにはいいんだって。真一最近元気ないじゃん？だから一緒に遊びに行こうっていつてるの」

形のいい眉を潜め、不機嫌な顔をあらわにしながらみかは言う。

「ん、ありがとう。でも今日は忙しいんだ」

それはウソだ。

今日の午後は何も予定はないし、何もする気は無い。

「何にもやる事なんか無いのに？」

みかもその程度の僕の予定はわかる。

しかし、僕はあえて取り合わない事にした。

僕は答えずに鞆を持って教室を出る。

正直、何をしてもやる気がおきない。

私立北星学園で一年過ごし、今では二年生になるが、僕はこの学園生活を含む全てのものに嫌気がさしていた。

校門を出て、通いなれた道を歩く。

まだ少し寒い春の風を頬に受ながら、学校の周りをランニングする野球部員とすれ違う。

その野球部員は僕も知っている奴で、去年の春から真面目にクラブで練習し、今年晴れてレギュラーになった奴だ。

僕に目くれる事もなく、息を弾ませて走り去っていく。

奴の頭の中はきっと、地区予選で一杯なんだろう。

僕はその後ろ姿を目を細めながら眺めると小さくため息をついた。僕は家につくと、居間で自分の茶飲み友達と電話している母親に、ただいまと一方的に伝えたと二階にある自室へ入った。

カーテンを締め切った暗い部屋の床に鞆を放り投げると、ベッドに倒れこむ。

僕はブレザーを脱ぎ、ジーンズとトレーナーを着ると、その上からパーカーを羽織った。

下でまだ、友達と電話で話している母親に出掛けてくる旨を告げるとそのまま外に出た。

コンビニでサンドイッチを買うと、家の近くの公園に赴く。

土曜日の公園は子連れの主婦が多く集まり、小さな子供が遊具で遊ぶ横でおしゃべりをしていた。

僕はそれを横目で見ながらベンチに腰掛ける。

先ほどコンビニにで買ってきたサンドイッチを開きそれを齧る。

隣のベンチでは灰色のコートを着た三十歳くらいのサラリーマン風の男が自分と同じようにサンドイッチを膝の上に開きながら、携帯電話で仕事の話をしていた。

落ち着かない様子でサラリーマンは会社となにやら話し合っている。

僕も来年は受験勉強をし、大学に進み、そしてこの人みたく仕事をやるのだろう。

まあ、うまく合格した場合の話であるが。

僕はしばらくその人の様子を見ていた。その男の人は電話を終えた途端、大きいため息をつくとサンドイッチを齧りながら立ち上がった。

それから、不機嫌そうな声で何かを呟きながら立ち去っていく。何か仕事でトラブルでもあったのだろう。大人になれば色々と抱えるものがあるのだろう。

その姿に遠い将来の自分を重ねながら、僕もため息をついた。どれくらいそこに居たのだろうか。

ふと、僕の携帯電話が鳴った。

僕は着信がみかである事を確認し、舌打ちすると一応出る事にした。

「もしもし」

「真一。今どこに居るの？」

「ああ、さくら公園に居るよ」

「あんた、机の中に宿題忘れてってるよ？今から持っていくから」
「バスケの練習しなくていいのか？」

「今日はいいんだって言ってるでしょ！少しそこで待ってなさい」

怒気をはらんだ声で一方的にまくしたてると、みかは電話を切っ

た。

僕は顔をしかめると、小さくため息をついて携帯電話をポケットにしまった。

それから程なく、みかが公園に入ってきた。

学校帰りのままなのだろう、まだ制服のままだった。

みかの表情は誰が見ても怒っていた。

「真一、やっぱり暇なんじゃない」

「まあ、そうなんだろうな」

僕はみかの棘のある言葉を適当に流すと、そっぽを向く。

みかは鞆から宿題のプリントを出すと、僕に突き出してくる。

僕はそれを受け取ると、折りたたんでポケットにねじ込んだ。

「ありがとう」

「最近、真一、ぱつとしないね？」

みかはため息をつくと僕の隣に腰掛けた。

僕はサンドイッチを齧りながら、みかを眺める。みかは僕の膝の上にあるサンドイッチを取ると齧った。

「こら」

「これでいいでしょ？」

みかは鞆の中から缶コーヒーを出すと僕に押し付けた。微糖のそのコーヒーは買ったばかりなのだろう、まだ熱かった。

「できれば無糖がよかった」

「文句言える立場じゃないでしょう」

みかはもう一本缶コーヒーを取り出し、それを開ける。
みかのコーヒーはしっかりと無糖ブラックである。
僕はコーヒーのプルタブを押し込むと、口をつける。

「そうそう、真一？バスケット部の二ノ宮遥って知ってる？」

「一年生のだろう？お前の後ろにしょっちゅう居るじゃないか」

「今度、真一と遊びたいんだってさ？」

「なんで？」

「真一って疎いのねえ」

「疎いんじゃないかって面白くないだろう。僕と居たって」

僕の口調は少し怒ったものになっていた。

何故だろう。凄くイライラする。

僕はぐつとコーヒーを喉の奥に流すと、遠くのゴミ箱に空になった缶を放り込む。

からんと乾いた音をたててくるとゴミ箱の中で缶が回る。

みかはそんな僕の様子に気づく事もなくけらけらと笑っている。

「いいんじゃない？本人さえ楽しければ。そんなもんでしょ？」

「いいねえ、羨ましいよ。楽しいと思えるものがあるのは」

「私は真一の方が羨ましいよ。一日中こうやってのほほんとして何も悩みもなさそうにぼけーと暇にしていれるなんて」

「そうなの？」

「だって、今、みんな中間試験やクラブの試合だとかで忙しいじゃない。真一くらいだよやってたらだらしてるの」

僕は言われようの無い苛立ちを感じつつも、それを胸の奥にしま
いこんだ。

「そうかぁ……」

僕は吐き出すようにそう呟いた。

しばらく、僕とみかはベンチに座ったまま、黙って公園で遊ぶ子供達を見ていた。

サンドイッチも食べつくし、コーヒーも無くなる。

そういえば昔、みかとここで遊んだ事もあったつけ。

かくれんぼで、鬼だったみかを置いてそのままみんなで帰った事もあるし、今は撤去された回転遊具で遊んでいて、みかに足を掛けられて転ばされ、病院に行った事もある。

「そういえば昔、ここでよく遊んだよね。かくれんぼで鬼のとき真一や博之達、私置いて帰ったよね？」

「次の日、地球儀で遊んでた僕の足かけてちゃんとやり返されたじゃないか。病院で四針も縫ったんだぞ」

「おかげで地球儀なくなっただんだつけ」

みかはくすくすと笑う。

僕はため息をつくともみかに聞いてみた。

「みか、自分の将来って考えたことある？」

「うーん、まあ、大学行つてそれからまあ、なんとかなるだろうくらいには考えた事はあるけど……」

みかはそう言つて一度言葉を切った。

「でも、今はそんな事考えてる暇ないかな？だって、バスケとか恋とかで忙しいもん」

「誰か好きな人でも居るのか？」

「居ないよ。これから誰かを好きになるの」

「はあ？」

みかの返答に僕は少々面食らう。

「だって、高校二年のこの時期は一生の間で一度だって戻ってこないんだよ。だったらやれるだけの事やりたいじゃん？真一はそういうのって何かないの？」

何か言葉が胸の奥にのしかかってくるような感じがした。

「無いよ。あればこんな事してねえだろうに」

「まあ、そうでしょうねえ」

答えて僕はまた、イライラしてきた。

イライラの原因は多分自分でもわかってる。

だけど、僕は認めたくないだけだ。

「真一は部活に入らないの？バスケ部とか入れば遥が喜ぶんだけど」

「今更入ったって練習してる奴に迷惑だろう？レギュラーになれる訳でもないし。多分ずっと帰宅部してるんじゃないかな」

「真一だったらそんなものか」

みかはくすくすと笑って立ち上がった。

「行くのか？」

「うん、何か話したらバスケの練習したくなった」

「試合、近いしな。頑張れ」

「真一も頑張ってね」

「……何も頑張る物がないけどな」

「遥と付き合えば？恋愛も青春のうちだぞ」

「考えるだけ考えておく」

僕は適当にそう答えると、手を振って立ち去っていくみかの背中を見送った。

僕はその後、公園を後にすると商店街のゲームセンターに足を伸ばした。

帰宅途中の学校の後輩だろう、ゲームの筐体に群がり、がやがやとやっている。

僕も携帯で友人と呼べる友人に連絡してみたが、あいにくどういっても出ないか部活で忙しいとの返答だった。

いつもは一人くらいは誘いに乗るのだが、今日は珍しく皆無だった。

僕はため息をつくと一人でゲームをして時間を潰すと、家に帰る事にした。

家に帰ろうとする頃にはあたりも暗くなっていて、家に着いたら既に夕食の準備ができていた。

そのまま食卓につく。

珍しく夕食前に親父が仕事から帰ってきており、妹の麻奈を含め、家族四人で食卓を囲む事になった。

「最近、学校どうなの？」

「何も無いよ」

以前にもした事のある受け答えをして僕はいつもと大して変わらない夕食を胃に収める。

「麻奈はどうなの？」

「部活で妙子ちゃんが足りなくて今日病院に運ばれたよ」

「あら……」

下らない会話を耳の端に留め、僕は食事を終えようとした。
その時、親父が唐突に問いかけてきた。

「真一は今何かやりたい事はないのか？」

「なんでそんな事聞くんだ？」

「お前部活も何もしてないだろう。かといって友達とつるむ訳でもないし。高校二年だってのに色っぽい話すらないだろう？なら別に何かやりたい事があるんじゃないのかって思ったただけだ」

「別にそんなの無いよ」

僕はそう答えるのが少し、腹立たしかった。

僕はさっさと自分の部屋に戻るとテレビをつけてゲーム機の電源をつけた。

しばらくはそれで時間を潰し、飽きるとベッドに横になった。

わかってる。

そう、わかってるんだ。

みかも親父の言うことも。

僕のこの時間は昼間見た子供達の時間と一緒にあり、過ぎ去れば戻る事のできない時間で、いずれはあのサラリーマンのような世の中の煩雑さの中に入らなきゃならない。

その前に、時間のある今のうちにやりたい事や楽しい事をできるだけしろと言いたいのだろう。

それはわかっている。

だけど、何がやりたいのかわからない。

今更、みかの言うとおりバスケット部に入部したってずっと玉磨きで終わるだろうし、好きでもないバスケットに時間を費やすのもまたもつたない。

二ノ宮遥は確かに可愛い部類に入るのだろうが僕は彼女の事を知らないし、また好きでもない。

また、向こうだって僕を好きかどうか分からないし、浮かれて

その気になったら馬鹿をみるのは中学の時に味わっている。

恋愛に対して臆病になっているのもあるが、今は恋愛をしたいという気にはなれなかった。

そう、僕は決定的に何かしたいという衝動に欠けていた。

「くそつたれ」

だけど、世の中にどれ程、この時期に思うような何か打ち込めるものを見つけて青春らしい青春を謳歌できる奴がいるのだろう。

多分、僕のようにだらだらと過ごしてしまう奴の方がきつと多いはずだ。

きつと、あの時、もっと遊んでおけばよかったと将来後悔しながら、大半の人は大人の事情という奴にもみくちやにされるのだろう。僕は寝返りを打つと風呂に入らず寝ようと思った。

まどろんでゆく意識の中で、所詮人生なんてこんなものだと思ひ込み、納得しようとした。

漫画や小説みたいな青春なんて、人の作ったありもしない青春像で、こうなればいいなという理想の形なんだ。

それはあくまで理想であり実際に叶うものではない。

だから、僕はありふれた高校生活を送る標準的な高校生のままで終わるのだろうと、半ば諦めていた。

だけど、どこかでそんな青春に憧れて、そうありたいと思う自分も居る。

だから、こんなに腹が立つんだろうな。

僕はここで考えるのをやめた。

まどろみに落ちていく意識に身を任せ、その時、今日という何も生み出す事の無い一日が終わっていった。

「担任の柴田先生が家庭の事情で急遽辞める事になりました。今度からこのクラスを受け持つ事になった嶋本一彦です。専門は英語

です。よろしく願いします」

週を明けて登校したところ、担任の先生が変わっていた。

まあ、担任の柴田は両親の借金だとか何かと実家で色々あるという話を聞いていたのでややもすればこうなるとは感じてはいたが、まさか本当にこうなるとは思っていなかった。

新しく取って変わった担任の先生は教壇で教鞭を取るより、ベンチプレスでバーベルを持ち上げている方が絵になるようながっしりとした体格の男だった

年の頃なら二十台後半だろう、耳に残る大きな声で大雑把に出欠を取る。

「そしたら、悪いけど休み時間に出席番号一番から順に面接してくからな。俺まだみんなの事全然わからないからな」

嶋本先生はホームルームの締めでそう告げると、礼を済ませる。隣の席のみかが囁く。

「……何か熱そうな先生だね」
「かもしれないな」

僕はどうでもよさげにそう答えた。

だが、僕はこの男との出会いがこれからの学校生活を変える出会いだとはまだ、気がついてはいなかった。

僕の面接の順番が回ってきたのは昼休みの一番最初だった。

生徒指導室という名前だけの空き部屋に入り、机を挟まず嶋本先生と向き合って椅子に座る。

「ええと、遠藤真一だな？何だ部活動してないじゃないか。さみしい野郎だな」

「……先生失礼ですよ」

「お前こそ青春に対して失礼な奴じゃないか。どのみち、お前、彼女とかもいなさそうだしな」

嶋本先生はげらげらと笑いながら、僕の肩を叩いた。初対面で失礼極まり無い事を言われているが嫌いになれない爽やかさが嶋本先生にはあった。

「で、お前、これからどうする気よ」

「これからって？」

「高校生活だよ。何かやるのか？」

「高校三年になったら受験勉強して大学行こうと思います」

僕は正直にそう答えた。

嶋本先生は額を押さえながら難しい顔を見ると、一人頷いた。

「寂しい奴だなあ……」

「自覚はしてます」

嶋本先生はひとしきり僕の顔を眺めると、何かを納得したように頷く。

「じゃあ高校二年やってるうちは暇なんだな？」

僕は頷くしかなかった。

嶋本先生は生徒指導簿に何かを書き込むと、にやりと笑った。

「よし、お前、俺が今度顧問する部活に入れ」

「は？」

「丁度部員になれそうな奴探していたんだ。いいだろう？暇なんだから」

「確かに暇ですが、やりたくない事までやるのは嫌ですよ」

僕は顔をしかめる。

嶋本先生は笑顔のまま頷いた。

「確かにそうだな。だが、何もやる前から面白くないと決めつけるのもまた良くないだろう。とりあえず一度やってみてから決める」

「はあ」

僕は曖昧な生返事を返す。

嶋本先生はにやりと笑うと、僕の肩を叩き、告げる。

「お前、明日も暇だろう？だったら放課後俺と付き合え。さっそく、部活動だ」

何か一方的に流されているような気がしないでもないが、僕は頷いた。

「でよ？これだけは自分で準備してもらいたいものがあるんだ」

「はあ」

ジャージでも用意すればいいのだろうか？僕は明日、この新しい先生に何と言って入部を断ろうか考えていた。

嶋本先生は僕の予想を裏切ったものを用意しろと言った。

「アイロンとアイロン台は自分で用意してくれ」

ホームルームが終わり、帰宅準備をしている時に昼の出来事をみかに話したところ、みかが怪訝な顔をした。

「はあ？アイロンとアイロン台？何の部活なの？」

「……聞くの忘れてた」

僕は頭を掻いて難しい顔をする。

「あの体で真一と二人して、シャツにアイロンをかけてる姿ってあんまり想像できないんだけど」

「僕も想像したくないな」

「なら、なんで断らなかったの？」

「断る理由が無かったから……明日には断るよ」

僕が鞆に教科書を詰めながらそう答える才と、教室の入り口に知った女生徒が居た。

みかの後輩の二ノ宮遙で、遙は僕と目が合うと軽く頭を下げる。

僕も彼女に軽く頭を下げ返すと、目の前で唸るみかに顎で合図する。

「ふーん……あ、遙が来た。真一、バスケの練習行くね。もし暇だったら練習見に来る？遙も喜ぶよ？」

「いや遠慮しとく。今日は孝とゲーセン寄って帰る」

「そ、じゃあまたね」

僕は軽快に走りさるみかの後ろ姿を見送ると鞆を取り学校を後に

した。

ゲーセンで十分に時間を潰した後、家に帰った。

母親が洗濯物を干している横を通りすぎながら、僕はアイロン台を探す。

「母さん、アイロンとアイロン台ある？」

「自分でシャツの皺でも伸ばすの？」

「いや、明日部活動で使うんだと」

「あんた部活やるの？」

「体験だけだね、まあ、行くとて事になってるから一応持つてかないと」

「何、運動部員の洗ったシャツにアイロンかけるのかい？」

「わからないよ。それだったら何か嫌だから辞めてくる」

何か母親が言った事が本当になりそうで嫌な気がした。

他の運動部員の洗い終わったシャツをアイロンがけるなんて何か屈辱的だ。別に関係ない奴のシャツなんざ知ったこっちゃいない。僕は押入れのすみにあったアイロンとアイロン台を見つけると引っ張り出す。

「このアイロンコードついてないよ？」

「ああ、それ今流行りの充電式コードレスアイロン。充電されてるからスイッチ入れれば使えるわよ」

「いいや。借りる」

「ちゃんと返しなさいよ」

僕は少し焦げて茶けているアイロン台とアイロンを持って自室に

戻った。

次の日、僕はスポーツバックにアイロン台とアイロンを入れて登校した。

放課後、嶋本先生のところに行くところには先客でみかと二ノ宮が居た。

「あれ？なんでみかも居るんだ？」

「マネージャー兼務。今、風邪が流行って今日バスケ部の練習中止なんだって。だからこっち来てみたら嶋本先生と一緒に帰っていいって」

みかは楽しそうに笑う。

その横で控えめに二ノ宮が僕に頭を下げる。

「えっと、金井先輩に言われてついてきたんですけど、遠藤先輩何をするんですか？」

二ノ宮にそう言われて僕は嶋本先生を見る。

嶋本先生は足元に置いてあった、大きなザックを背負うと笑った。そのザックはまるでアフガンやイラクの戦場でも潜りぬけたかのようにほころんでおり、また、更なる戦場へ向かうのか大量の荷物が入っているようだった。

「じゃ、遠藤が来たから行くか」

「行くって、先生どこに行くんですか？」

僕が聞くと先生は僕の背中を外に押して行く。

「着けば分かるって」

嶋本先生に連れられ、嶋本先生の車に乗る。

「これから、鳥山八景にいくぞ」

鳥山八景は学校から三十分くらい車で行ったところにある観光客用に設けられた山道だ。

もともとこの地区は扇状地になっていて、山から川が流れている。川の上流は谷になったり、切り立った崖になっていたり、八つの絶景があることからそう呼ばれているところだ。

だが、実際は極めて認知度の低いローカルな観光名所であり、地元民でもあまり近づくことがない場所である。

嶋本先生の運転する緑色のジープのチェロキーに揺られながら、二ノ宮がみかに囁く。

「遠藤先輩これから何するんですか？」

「さあ？でもアイロン持ってきて来いって昨日言われたみたいだよ？」

「アイロン？何に使うんですか？」

「さあ」

それを今一番知りたいのは僕だ。

しばらくしてジープは鳥山八景の駐車場につく、僕らはジープを降りると各々の荷物を持つと先生の後についていった。

「さて、これから山登るからな」

先生はさらりとそう言って、巨大なザックを背負ったまま山道を登っていく。

「お、ギョウジャニンニクだ……採っていこう。多分まだ沢山あるんだろうな」

嶋本先生は足元に生えている山菜をむしり、ザックにねじ込む。

「先生、自然観察クラブが何かですか？」

僕が聞いてみると先生が眉の根を眉間に寄せて人を馬鹿にしたような顔をする。

「お前、アイロンとアイロン台持って自然観察するツモリか？もうちよっと考えろ」

なら、せめてアイロン台とアイロンを何に使うのか教えて欲しかったが先生はすたすたと山道を登っていく。

僕の後を二ノ宮とみかがゆっくりと上ってくる。

しばらく、山道を登ると先生は「危険入るな！この先崖あり」と書かれた古い看板が立てられ黄色いロープの張られた小道に逸れて、そのロープを越えて中に入っていく。

僕とみかと、二ノ宮はそれぞれお互いの顔を見合わせる。

「おーい、何してる。早く来ーい」

どこか楽しげな声で嶋本先生が僕らを呼ぶ。

僕らは何か釈然としない物を感じながら先生の後を追った。

まだ、春先とはいえ少し寒い。

歩く先で枯れた枝を踏み、靴の下ではきばきと音がする。

スネまで茂った草を掻き分けながら、先生の後を追う。

「枝がスカートに引っかかる……」

「……先輩、背中に虫ついてますよ」

みかや二ノ宮は虫を払ったり、スカートの裾を気にしながら嫌そうな顔をする。

「みか、二ノ宮と一緒に車で待ってたらいいんじゃないか？制服じゃ辛いだろ」

「でも、何するか気になるからついてく。遙ももちろん行くよね？」

みかに詰め寄られ二ノ宮は半ば強引に頷かされた。

「とりあえず俺、先に先生のところに行ってるから後からゆっくり追いつきな？」

僕は二人を気遣いながら、もはや森となった山道を進み、先生の後を追う。

しばらくして、道は急に途切れていた。

看板にあったとおり、崖になっていた。

崖の高さは五十メートルだろうか、下には川が流れており、その川を挟んで先程車で走った道路が走っていた。

道路の脇に立っていた看板からすれば今僕らがいる場所は鳥山八景の一つ、鳥山絶壁の上に居る事になる。

先生はザックの中からロープやらヘルメットやらを取り出しながら、何やら準備をしている。

その様子を一部始終眺めながら僕は嫌な予感がした。

「先生、これから崖を降りるツモリですか？」

「途中までな」

先生はそう言って僕にナイロン製のベルトを投げて渡した。僕も映画や、ニュースで見たことがある。これはハーネスという奴だ。

「ラペリング用のハーネスだ。それ、とりあえず着けてくれ。あ、制服が汚れるっていうんだったら、そこに作業服あるからそれに着替える。後、ロープで手を焼かないようにグローブもつけるよ」

「……ロッククライミング部ですか？」

「残念だ。これからするのはロッククライミングみたいなもんだが、それは目的を達するための一つの過程でしかない」

僕は嶋本先生の隣で、用意された作業服に着替えながら、僕は顔を難しくする。

いい加減、そろそろ何をするかはつきりさせた方がいい。

ロッククライミングは昔から一度やってみたいとは思ってたからやってみてもいいが、それでもないとなると何をするのか聞いたなさねばならない。

「先生、そろそろ教えてくださいよ！こんな崖まで来てロッククライミングまでして何をするんですか」

嶋本先生は目をぱちくりとさせながらまるで何でわからないのか不思議な顔をする。

「お前、自分の荷物で何もって来てるんだ？」

「アイロンとアイロン台です……」

僕はアイロンとアイロン台をバックから取り出すと嶋本先生に見せた。

「おお、西芝の新型、今流行りのコードレスアイロンじゃないか、
一番いいの持ってきてるじゃないか」

「これで何するんですか、断崖絶壁で崖に張り付きながらアイロ
ンでもかけるっていうんですか？」

嶋本先生は僕の肩を叩くと

「わかってるじゃねえか。なら聞くんじゃねえよ」

と笑って答えた。

断崖絶壁に張り付きながらアイロンをかける？

「冗談ですよ？」

僕が聞き返すが先生は至極真面目な顔で答える。

「冗談なものか。極端なアウトドア活動のスリルを健康なプレス
加工されたシャツの満足と結合する最新のデンジャラススポーツ…
…これが、今からお前のやるスポーツ『エクストリームアイロン』
だ。俺とお前はこれから誰も体験したことのないようなスリルのあ
る生活を体験するぜ？」

嶋本先生はそう言って親指を立てて不敵に笑う。

今、分かった事がある。

こいつは多分、馬鹿だ。

先生という職業だが、間違いなく馬鹿だ。

確かに誰も体験しはしないだろう。

誰もそこまでしてアイロンなどかけようとしない。

嶋本先生はハーネスをつけると、ザックの中からコイル状にまか

れたロープを二巻き取り出した。

それを慣れた手つきで手近な木の幹に巻いて固定する。

嶋本先生はロープの片方を崖の下に向かって投げる。ロープはコイルを解きながら緩やかな弧を描いて崖下へと落ちていく。

「先生、アイロンかけるにはこの崖めちやくちや高いですよ」

「エクストリームアイロンじゃこんなところ常識だって。まあ、一番最初のうちは人の多い通りだとか、家の庭で逆さづりになってアイロンが妥当なんだけど、それじゃお前も楽しくないだろう？」

楽しくなくてもいい。とりあえず身の安全を保障してもらいたい。僕が作業着に着替え、ハーネスをつけて木偶人形のように立つ立っていると嶋本先生はザツクの中にあつたヘルメットを僕の頭に被せる。

「まあ、落ちたらこんなの役に立たないが、ヘルメットは上からの小石とか落下物に対しては有効だからな。準備ができればハーネスの金具にロープを通せ……って言ってもやり方わかんねえよな。いい、俺がやる」

嶋本先生は僕の腕を引っ張り、木の幹に固定されたロープの場所まで来ると腰のハーネスの金具にロープを通した。

「うっし、準備はこれでOKだ。アイロン台とアイロン持て。シヤツは……さっきまで着てた学校のシャツあるだろ。それも一緒に持って降りるぞ」

嶋本先生は僕の準備が終わると、自分のハーネスにロープを通しながらそう言った。

僕は一応、先生に言われるままアイロンとアイロン台、さっきま

で着ていたシャツを手を持つ。

先生は準備ができると、ザックの中からカメラを取り出し、首にぶら下げる。

「よっし、じゃあ、行くぞ」

向こうも準備が整ったのだろう。

もう顔が断崖絶壁をロープでラペリングして降りるツモリでいる。僕はもう一度、嶋本先生が降りるツモリでいる絶壁を眺めた。

地質についてはよくわからないが、花崗岩とかそんな名前がついてそうな灰色の岩肌がむき出しになった崖で、高層ビルの屋上から地面を見下ろすくらい高さ、やはり最初の目測どおり、五十メートルくらいはあるのだろう。

崖の下を覗きこむと程よく恐怖心を煽る爽やかな風が吹き上げてる。

足元にあった小石を蹴って崖に蹴り落としてみるが、下に落ちるまでにかかなりの時間がかかっている。石が地面を叩く音は無論、聞こえない。

僕は軽い眩暈を覚えて先生に言った。

「先生。危ないです」

酷く、端的な言葉で現状を表せたと思う。僕が国語の先生なら間違いない満点をつける回答だ。だが、彼は英語の先生だった。

「大丈夫だって。降り方とか俺が教えてやつから」

「そういう問題じゃなくて、落ちたら死にますよ」

「だろっな……なんだ、遠藤ビビッてるのか？」

正直、ビビッている。

もし、この場所に僕と嶋本先生しかいないのであれば僕はここで素直に頷いて、辞退したかもしれない。

そうすれば、僕は今まで通りの安穩とした生活をだらだらと送る事ができたかもしれないかった。

だけど、運命というのは時に残酷なもので、その登場がもう少し、遅ければ別の結果を招いていたのかもしれないかった。

丁度、その時にみかと二ノ宮が僕に追いついてしまったのだ。男の尊厳という物がある以上、二人の前で醜態をさらす訳にはいかない。

二人は息を切らしながら、作業服にヘルメット、腰にはハーネスをつけてアイロンとアイロン台、それにシャツを抱える僕を見ている。

当然、その姿は僕から見ても滑稽なのだから二人にとっても滑稽なものに映るだろう。

二ノ宮が口元を押さえて笑いをこらえている横で、みかが目をしばたかせて僕に尋ねる。

「あんた何するの？」

「これから崖の途中でアイロンがけするらしい」

「崖の途中でアイロン崖？体張った新手のギャグ？」

「お前からも先生に言つてやつてくれよ。こんなの無意味だって」

僕はみかを巻き込んでなんとかこの場をしのぐと思った。

「確かにねえ……はたから見たビジュアル的には馬鹿で面白そうだけど……ちよつと危険すぎる気がするわ」

「落ちたら死んじゃいますよ」

みかと二ノ宮が崖を見下ろしながら恐る恐る口に出す。

先生は二人の肩を叩くと

「刺激的だろ？」

と笑い飛ばした。

確かに刺激的だが、こんな刺激は要りません。

嶋本先生はみかと二ノ宮を面白そうに眺める。

どこか自信のある、そして、いたずらめいた笑みだった。

「金井と二ノ宮はバスケ部だよな？」

「はい」

「ところで、バスケットボールってのは高いところにあるゴールにボールをシュートして相手チームより多く点数を取るのを競うゲームだよな？」

「ですね」

「それに何か意味なんてあるのか？」

「はあ」

嶋本先生の質問にみかが曖昧に答える。

だが、明らかに納得のいかない顔をしている。そりゃそうだろう、一生懸命やってきているバスケに何か意味なんてあるのかなんて言われれば僕がみかの立場でも納得がいかない。

みかは少し慚然とした態度で答えた。

「確かにボールをゴールに入れるだけだったら何の意味も無いかもしれないですけどそんな事言ったらスポーツなんてみんな意味が無いじゃないですか？スポーツってある意味ゲームみたいなものですから楽しめる事に意味があると思います」

嶋本先生がにやりと笑うのが見えた。

「そうだ、スポーツは楽しむ事に意義がある。このアイロンがけも一緒だ。アイロンをかけてシャツの皺を伸ばすのが目的じゃない。要はいま、金井が言ったとおり、皺を伸ばすまでの過程を楽しむのが目的だ」

何か言ってる事がわかるようでわからない。
わかつてはいけないような気もする。

みかはまだ難しい顔をしているし、二ノ宮も半分納得したような納得しないようなわからない顔をしている。

「ま、いいや。とりあえず行くぞ。いつまでもこんなところでビビっていても仕方ないだろう」

ビビってという言葉に反応して僕はむっとした。
二ノ宮やみかが居る前では僕は男としての尊厳を保たねばならぬ。
い。

命の危険と男の尊厳であれば間違いなく命の方をとるべきなのだろうが、女子二名を前にしてそれができる程僕は人間として成熟されてなかった。

「真一、危ないよ。やめな？」

「先輩、やめた方が絶対いいです！」

僕は俯き、二人に目を合わせる事なく。

「いや、やる」

と答えた。

本当はやりたくはないのだが、そう言わざるを得ない。

だってそうだろう。やっぱり崖を降りるのが怖いからやめさせてくださいなんてみつともない事、言えるわけがない。

僕は先生に簡単にロープの持ち方や降りるときの足運びを教えてもらつと、背中にアイロン台を背負つて崖を降りる事にした。

まるで地面が九十度傾いたかのような絶壁をゆつくりと交互に足を変えながら降りる。

「遠藤、もうちょっと体を起こせ！ロープを抱きかかえるように降りろ！でないと疲れるぞ」

先生が上から叫ぶ。

まだ先生は降りないみたいだ。

僕は先生の言うとおりで体を起こして、垂直に立っている地面に対し、体を九十度曲げて、まるで腰の悪い老人みたいな格好でゆつくりと降りた。

「いいぞ！初めてにしては上出来じゃないか」

僕はそれに答える余裕がなかった。

どのくらいの時間がたったのだろう。

多分、まだ、五分も経っていないのだろう。

だが、僕にとっては一時間以上たっている気がした。

その時には十五メートルくらいは降りていた。

ロープを握る手がじつとりと汗ばむ。

背筋も嫌な汗が伝わり、僕は心細くなってロープを抱き寄せる。

吹き上げる風はどんどん強くなるし、下をみると、吸い込まれそうなくらいに地面は遠い。

眼下を流れる川は白い水しぶきをあげ、激しい勢いで流れている。僕が両手を僅かに開けば、僕は全ての物が支配されている自由落下の法則に基づいてそこに落ちる事になるのだろう。

落ちたら時は多分、もの凄く痛いのだろう。

前にバイクの交通事故現場を見た事があるが、そのときはバイクの運転手の太ももの骨が皮ズボンから肉を裂いて剥き出しになっていた。

ここから落ちればそんなものでは済まされないのだろう。

僕はそう思うと、そこから動けなくなった。

怖くなったのだ。

しばらくそこで糞虫のようにロープにしがみつき、風に揺られていた。

「遠藤ー！どうしたー！」

上で先生が叫ぶ。

「真一ー！」

みかの声だ。

見上げると、三人が心配そうに僕を見つめていた。

さっきまで、僕の心を奮い立たせていた男の尊厳とやはらは完全に折れ、今は恥でも何でもいい、とにかく助かりたい気持ちで一杯だった。

「センサーー！」

自分でもみつともないと思う。

でも、それでも僕は助かりたかった。

「やっぱり怖いです！助けてください！」

みかや二ノ宮に後でなんと思われようが僕はその時、自分の命の

方が大切だった。

二ノ宮やみかは、そんな僕の情けない姿を見てどう思うだろうか。僕は叫んだ後に恥ずかしく途端に恥ずかしくなった。

「待つてろ！今行くから！」

上から嶋本先生がまるでテレビでみるレスキュー隊員のように軽快に崖を降りてくる。

それに比べて僕はなんてみっともないのだろう。

先生は僕の横まで降りると、片手で僕の肩を揺さぶった。

「大丈夫か？遠藤」

心配そうに顔を覗き込んでくるが、僕は恥ずかしくて顔をあげられなかった。

「怖いのか？」

僕は黙って頷いた。多分、今日の前に鏡があれば僕の顔は真っ青で今にも泣き出してしまいそうな顔だろう。

僕は心底後悔した。

先生が何をするのかわかんなくて、のこのことアイロンなんか持つてついてきたが、こんな事になるとは思わなかった。

僕は所詮普通の人間であり、決してドラマや小説みたいな青春は送れない。

何か特別な事なんて何も無い青春を送ってたらと大人になればよく、それがどれだけ素晴らしいものか、こうなるまでわからなかった。

これだったら、今日も授業が終わって家に帰ってゲームでもしていた方がまだ、マシだった。

僕は目の端に涙を溜めながら、ずっと俯いていた。
そうしたら、隣で、先生が急に叫び出した。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

僕ははっとして、隣に居る先生を見つめる。

「先生？」

先生は僕の顔を覗き込むと、爽やかに笑う。

「なんか、こう、生きてる感じがするな？」

こんな時に何を言ってるのかわからなかった。嶋本先生は楽しそうに続ける。

「俺も最初は怖かった。けど、そのときは叫んだ。すると怖くなくなった。遠藤、お前も叫んでみる」

僕がきょんとしていると、先生は僕にむけてもう一度叫んだ。

「オオオオオオオオオオオオオオ！」

僕は目を細めながら、それを聞いていた。

先生が叫び終わる。

僕は叫び返した。

「アアアアアアアアアアアアアア！」

上で二ノ宮とみかが、まるで僕らが気が触れてしまったのではな

いかと、心配そうな顔をして、僕らを見つめていた。

「オオオオオオオオオオオオ！」

「アアアアアアアアアア！」

僕と先生は交互に何回か叫びを交わした。

「っしやあ、その気合だ！」

不思議と先ほどまであった怖さは消えていた。

「遠藤、イチ、二、イチ、二で降りるぞ！」

「はい！」

自分でも驚くぐらいの大きな声で先生に答えた。

「エクストリム！アイロオン！イチ、二！イチ、二！」

「イチ、二！イチ、二！」

先生がかかる号令にあわせて、僕は足を交互に降ろす。

先ほどまでとは違い、自分の中に見えないエネルギーが流れ込んでくるような気がした。

僕と先生はそのまま、ゆっくりと交互に足を下ろしながら崖の半ばまで降りる。

さっきまでうるさかった風の音が今では何も聞こえない。

崖から遠くに見える僕が住んでいる町がなんだかとても小さく見えるし、そんなのにも目を向けるだけの余裕もあった。

崖の半ばまで来ると、僕らはそれ以上降りるのをやめた。

「エンドオー！」

「はい！」

「アイロン台、準備！」

「アイロン台！準備よし！」

もう、何か吹っ切れた。

僕はやけくそになりながら叫ぶ。

右手で尻にロープを押し付け付けブレーキをかけると、左手で背中に背負ったアイロン台を膝の上に乗せる。

「シャツ！アイロン用意！」

「シャツ！アイロン準備よし！」

ハーネスに引っ掛けていたアイロンとシャツをアイロン台の上に力強く乗つける。

「スイッチオン！」

先生が叫ぶ。

「スイッチオン！」

僕の指がアイロンのスイッチを捻る。

アイロンの鉄が徐々に熱を帯びてくる。

僅かにこぼれたスチームがアイロンの鉄の上で弾け、蒸気となる。鉄が、熱くなった。

「エクストリウム！アイロン！」

「アイロン！」

僕は熱くなったアイロンをシャツに押し付けた。

膝に力を居れ、アイロン台一杯に広がった薄く黄色いシャツにア

アイロンを当てる。

僕がアイロンを押す度に、シャツの皺が一つ、また一つと消えていく。

僕は吹き上げる風を受けながら奇妙な感覚にとらわれていた。

僕がもし、右手のロープを放せば落ちて死ぬのだろう。

死と隣り合わせの状況で僕は今何をしている？

両親に遺言を書くわけでもない、恋人に別れを言っている訳でもない。

シャツにアイロンをかけて皺を取っているのだ。

僕は急におかしくなった。

だって、考えてみる。落ちたら死ぬかもしれない崖に張り付いてアイロンがけをしているんだぞ。

多分、日本中のどこを探しても今、この時点でこんな酔狂をしているのは僕しかないんだ！

体の腹の奥底から、今まで感じた事の無いような熱い感じが溢れてくるのがわかった。

多分、これが生きている事を感じているって事なんだろう。

僕がアイロンをかける横で先生がカメラのファインダーを覗いている。

カメラのレンズは額に汗を浮かべ、必死にアイロンをかけている僕に向けられ、小気味のいい音を立ててシャッターが切られる。

僕は腹の奥から湧き上がってくる衝動を抑えられず、気がつけば叫んでいた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！」

僕の叫びが世界を包んだ。

目の前が真っ白になっていくような錯覚を覚えながら僕は叫んだ。

第一章 『アイロンと僕』（後書き）

昔の自分が書いたものを見ると、苦笑しながらも「こんなのど
うやって書けるんだ？」と不思議になることも、しばしば。

第二章 『アイロンと風』

「ええ！辞めるの！もったいない」

「当たり前だろう。あんな部活、命がいくつあっても足りやしない。それに、あんな場所でアイロンかけても意味ないし」

あれから三日が過ぎ、登校し嶋本先生が作ろうとしていた部活を辞める旨をみかに伝えたところ、大仰に驚かれた。

「なんで？結構楽しそうだったじゃん」

「実際やってみてからそう言ってくれ」

みかは何か不思議なものでも見るように僕を見つめていた。

「真一に絶対合ってるよあのスポーツ」

アイロンがけがあっているというのも心底馬鹿にされているようで腹が立つ。

「冗談じゃねえよ。あんなんで死んでみる。葬式でみんなに別の意味で泣かれるよ」

「あー、それはあるかも、なんであんなアイロンがけで命かけたんだろう。馬鹿馬鹿しくて泣きたくなってるって。うん、約束する。私が一番泣いてあげるよ。笑いながら」

みかは面白そうに笑う。

「でも、今までみたくダラダラしてるよっかはマシなんじゃない？」

「それでも嫌だ」

僕は不機嫌な顔を隠すことなく、そう突っぱねた。

今日は授業も終わったことだから、これから家に帰ってダラダラする事に決めた。

あんな体験をした後でわかる事だが、安穩とした日常に甘んじるのもまたひとつの人生の形である。

僕は鞆を持って学校を後にした。

「そんな事言って、絶対あんたはアイロンしだすわよ」

僕は背中のみかの言葉を受け流しながら、学校を後にした。

僕は家につくとそのまま自分の部屋に引き籠もり、ゲーム機のスイッチをつける。

同級生に借りた、最近出たばかりのロールプレイングゲームで噂の超大作だ。

これで少なくとも三時間は潰せる。

だが、どうしてだろうか三十分もしないうちに僕は飽きてしまった。

なんだろう、やっぱり満足しない。

前みたいなの、何か胸の奥に蓋をしたような、そんな感覚だ。

僕は小腹が空いたので、居間に降り、テーブルの上のみかんを食べる。

その時、たまたま、そう、たまたま和室にあるアイロンとアイロン台が目に入った。

親父のシャツだろう。

純白のシャツがアイロン台に放り投げられており、その横にアイロンが立てられている。

僕はそのアイロンに手をとってみる。

スイッチを入れてシャツの上に押し当てる。

アイロンの下のシャツに刻まれた皺が、アイロンを滑らすとまるで魔法にかかったみたいく消えてゆく。

「あんた何やってんの？」

後ろから突如母親に声をかけられ、僕はびっくりしてその場を飛びのいた。

「真ーアイロンかけてくれたの？珍しいね」

「いや、やりかけだっただろ？ちよつと気になって」

「ふーん、変なの」

僕は適当に言い繕い、その場を離れた。

どうかしてる。外に出よう。

僕はジャージに着替え、ランニングシューズを履くと外に出た。なんだか無性に走りたくなった。

体を思いっきり動かしたい。

最初は早歩きくらいのペースで走り出す。

徐々にペースを上げていく。

そのうち息が苦しくなり、肺が激しく酸素を求めて喘ぐ。

僕は公園まで走りきる。

公園につく頃には僕はぜいぜいと息を切らし、そのまま砂場に倒れるように寝転んだ。

しばらくは砂場に寝転んだまま、ぜいぜいと息を切らし、空を見上げていた。

空は憎たらしいまでに遠く、青い。

吸い込まれそうなくらい遠い空を見上げていると僕と空との間に、子供の顔が入った。

自分の縄張りで寝転んでいる変な大人を見て不思議に思っているのだろう。

「なにしてるの？」

「なにしてるんだろうな」

僕は息も切れ切れにそう答えた。

「へんなの」

「へんだな」

そうだ、まったくおかしい。

この三日間、家に帰るところなる。

何か、こう、頭の芯から熱くなり、泣きたくなる。

子供はしばらく僕を眺め、僕が砂場からどく事が無いのをわかり、走って立ち去った。

僕は何をしているのだろう。

こんなところで大の字になってたって仕方ないのに。

その時、空からバスケットボールが降ってきた。

それは僕の鼻の上にまっすぐに落ちると、僕の目の中に星を降らせた。

遅れて感じる鈍い痛み。

「……いつてえ」

ジンジンと痛む鼻を押さえてよろよろと立ち上がる。

僕は転がるバスケットボールの持ち主を探し辺りを見回すと、制服を着たみかが立っていた。

学校帰りなんだらう。

みかは地面を転がっているバスケットボールを拾い上げるとため息をつく。

「ナイツシューだ。かなり痛かった」
「そりゃどうも」

みかは僕をみて呆れ果てたような顔をしていた。

「何してんの？」
「アイロンかけてるように見えるかよ」
「見えないわよ」

僕はよろよろと立ち上がる。
丁度いい。

僕はみかに言った。

「みか、丁度いい。つきあえよ」

みかは驚いたように目を見開き、顔を赤らめると少し俯く。

「真一の気持ちは嬉しいけど遙に悪いよ」
「馬鹿野郎。違うつて、運動すつからちよつと付き合えよつて意味だ」

「……あつそ!」

僕がそう言うときみかはバスケットボールを僕に思いっきり投げつける。

僕はそれをかろうじてキャッチするが、思いっきり手が痺れた。腕に走る痛みで顔を歪めるが、僕はそれを地面に叩きつけ、ドリブルを始める。

そして、公園の端に設けられているバスケットボールのハーフコートにドリブルしながら駆け込むと、僕はゴールに向かってシュートする。

ドリブルシュートだ。

ボールはゴール板の上でバウンドし、ゴールのリングに弾かれて地面に落ちた。

だが、そのボールはすぐにみかに拾われ、弧を描いてリングの中に吸い込まれるように落ちる。

さん、と網を揺らしボールが落ちる。

僕がみかを見やるとみかは得意そうに笑っていた。

「ナイツシュューでしょ？」

その顔がとても、眩しく、また、僕を苛立たせた。

僕は鼻の頭を親指でこすると、ボールを拾い上げるとみかに投げた。

みかはそれを胸の前で受け止めると、地面にタムタムと叩きつけ、ドリブルを始める。

そして、挑戦的に僕を見る。

僕にボールを奪えと言っているようだった。

僕はそのままみかに一直線に走る。

みかは僕の前で体を左右に振り、僕が一瞬怯んだその隙に僕の脇を通り抜け、ゴールに走る。

僕が振り向いた時には、みかはゴールに向かってジャンプしていた。

みかの手を離れたボールが綺麗にゴールに収まる。

そして、風の中に舞う羽のように軽やかにコートに降りたみかは憎らしいほどに眩しかった。

みかがコートを転がるボールを僕に投げてよこす。

僕はそれを受け止めると同じようにドリブルを始める。

みかが次の瞬間には僕の前に立っていた。

僕は体を半歩さげ、自分の後ろにボールをかばうようにしてみかの横を抜けようとする。

みかは巧みに体をさばいて僕の前に立ちはだかる。

僕が必死にみかを抜こうとするが、みかはそれを余裕でそれを阻む。

その表情には余裕の笑みがあり、僕はそれが無性に腹立たしかった。

「……つくそ！」

僕はみかを押しのけるようにして抜く。

だが、その時にバランスを崩し地面に倒れそうになる。

僕は地面に倒れこみながら、やけくそ気味にシュートを放つが、ボールはゴール板の上で弾むと、そのままコートの上に落ちた。

僕は地面に転がると、得意げな笑みを浮かべるみかを見上げた。

「真一がバスケットで私に勝てるわけないじゃん」

「うるせえ」

僕は立ち上がると、再び、みかに挑んだ。

その後、何度も僕はみかに挑んだがごとく負けさせられた。どれくらい僕は負け続けただろう。

もう、気がつけばあたりは暗くなっていた。

みかはもういい加減呆れたのだろうか、コートの上で倒れている僕を眺めながらボールを地面にタムタムとついている。

「真一、もう帰ろうよ」

公園の街灯が淡く輝く。

蛾がどこからかやってきて、街灯にたかる。

僕は鉛のように重たい体をひきずるように持ち上げ、立ち上がるとバスケットのゴールに支柱にしがみつく。

靴を脱ぎ、靴下を脱ぐ。

「真一？」

みかが心配そうに僕を見るが、僕は構わずバスケットのゴールの支柱にしがみつくと、それをよじ登り始めた。

「真一！危ないよ」

僕はそれに構わずゴールの上によじ登る。

僕はゴールの頂上まで上りきると、ゴール板の上に腰かけ、リングの上に足を乗せた。

そして、僕はそのまま腰を上げる。

直径2センチにも満たない鉄のリングの上に立ち、軋むゴール板に僕は何か落ち着きを感じている。

「真一！降りなつて！壊れたら危ないよ！」

「……そうだな」

僕は地面で心配そうに僕を見上げるみかから目を逸らし、空を見上げた。

今にも壊れそうなゴールの上で空を見上げるとそこには僅かに星が浮かんでいた。

僕はとりあえず、叫んで見た。

「ウオオオオオオオオオオオオオ！」

みかがびつくりして何かを言っているが僕には聞こえなかった。
僕は何かどうしようもない、憤りを叫ぶ事でしか表す事ができなかった。

「どうしよう……みか」

呟く僕に、みかが心配そうな顔を向ける。

「俺……どうしようもなく、アイロンかけたい」

ふと、こぼれた言葉はどうしようもないまでの僕の本音だった。そう、遠藤真一は、ただ、今、この瞬間において生きている証が欲しかったんだ。

僕は次の日の放課後、嶋本先生のところに足を運んでいた。

どうしようもない思いが胸の中で渦巻いていた。それを止める術は僕には無かった。

夕日の差し込む誰も居ない教室。

嶋本先生は一人、明日の授業の用意をしていた。

嶋本先生は何かを決意した僕の目を見て、開いていた教科書を閉じた。

先生は僕の方を見て、全てをわかったような、そんな目で優しく聞いてきた。

「遠藤、アイロン……好きか？」

僕は泣きそうになりながらも答えた。

「先生、俺、アイロンかけたいっす……」

差し込む夕日の中、先生は優しく笑っていた。

僕には迷いはもう、なかった。
先生はがっしりと僕の手を握る。
僕はその手を握り返した。

次の日以降、僕の生活は一変した。

「っしやあっ！」

まず、朝早く起きると早朝のランニングに出る。
一時間、大体十キロ前後走ると今度は公園で筋力トレーニングを始める。

腕立てを五十回、腹筋背筋を五十回、そして、インディアンジャンプを四十回、これを三セット繰り返す。

「真一……もう駄目」

トレーニングと一緒についてくるみかはいつも途中でギブアップする。

そして、家に帰り体が暖かいうちにプロテインで朝食を採る。
軽くシャワーで汗を流すと、登校する。

僕のトレーニングに付き合うみかは、もうこの時点でふらふらしているが、僕も最初の頃は結構疲れた。

そして、授業中に少し休み、放課後、今度は嶋本先生と特別メニューをこなす。

グラウンドの隅にあったプレハブ小屋を改修し、そこを部室として使用し、先生から色々な講義を受ける。

まだ、正式な部として認可されていないアイロン部には立派な部屋等無い。

「いいか、遠藤、エクストリームアイロンは危険な場所でやるから意味がある。そして、危険になれば危険になるほど死の可能性が高くなる。だが、正しい技術と体力、そして、万全の計画をもってすればその危険はコントロールできる」

それが嶋本先生の口癖だった。

嶋本先生は聞くところによると先生になる前は消防のレスキュー隊員だったらしく、ロープを使ったラペリング技術や、スキューバダイビングの技術に習熟しており、僕は先生といるときはもっぱらロープの結び方や、ダイビング機材の扱い方を学んだ。

先生が居ないときは、みかが持つてくるバスケット部のユニフォームでアイロンがけの練習をしたりもした。

そして、夕方、帰宅するとバイクの免許を取るため、教習所に通った。

親を説得するのは大変だったが、親父と殴りあった結果、僕の真摯さを認めて通うことを許してくれた。

僕がへとへとになって家に帰り着くのは、いつも夜九時を過ぎてからだ。

そのまま泥のように眠り、次の日の朝を向かえ、また、同じ事を繰り返す。

それはとても辛かったが、逆にそれが誇らしかった。

それだけの事をできている自分が、また、着実に体ができていく自分が物凄く充実しているように思えた。

僕が嶋本先生の下でアイロン部として活動するようになって二週間が過ぎた頃、僕はバイクの免許を取得し、先生が昔乗っていたCB400を貸してもらい、エクストリームアイロン部となって初のエクストリームアイロンを実施する事になった。

誰もいない教室で先生が黒板にバイクと車の絵を書いて説明する。

「いいか遠藤、今回のエクストリームアイロンは走る車の上にアイロン台を置き、そこにシャツを固定する。そして、バイクで併走するアイロナーがアイロンをかける。この時、気をつけなければならないのがスピードの調整だ。今回は時速四十キロで固定する。時速四十キロで進行すると秒速約一二メートルになる」

先生が黒板の上に数字を並べる。

僕はその数字を眺めながら答えた。

「となると、この実施予定地にある五百メートルの直線道路ではアイロンをかけれる時間は四一秒しかない」

「そうだ、だが、実際には加速や写真撮影も含めるとアイロンを当てられる時間は二十秒あればいい方だと考えた方がいい」

「しかし、先生、僕がアイロナーを担当するとして車の運転は先生が実施する事になりますよね？そうすると、写真撮影は誰がする事になるんですか？」

「うむ、非常に頼みづらいのだが……」

僕と先生の視線がたまたま廊下を通りすぎたみかに向けられた。僕に教室の中に引きずり込まれ、事情を説明されたみかは驚く。

「えええ！私があ？」

「大丈夫だ。オートフォーカス式のデジタルカメラだ。横の緑色のランプが点滅したらシャッターを落とせばいい」

「でもバスケット部で忙しいし」

なんとか断ろうとするみかに対して僕が食い下がる。

「みか、お前アイロン部のマネージャーだろう？いつも僕がバスケット部のユニフォーム洗濯してアイロンかけてやってるじゃないか」

「もう辞めます！」

叫んで、みかが困ったような顔をする。

「あんたもどうかしてるわよ！何で急にこんな馬鹿な事に夢中になつてんの。信じられない。バカじゃん！」

「馬鹿な事なもんか。みかもやってみればアイロンの素晴らしさに気づく」

「ほんつとくに信じられない」

みかは首を左右に振り、必死に断ろうとしたが、僕がしつこく頼み込んだら折れた。

「……ただ、カメラのシャッターを押すだけだからね」

惘然とするみかを放って置き僕は先生と計画を煮詰める。

「……先生、シャツは何色を用意したらいいですか？」

「一般的には白のシャツが多いが茶色系のカラーシャツの方が実は写真映りはいいんだ。できればカラーシャツの方がいいが、無い場合は白で大丈夫だ」

僕と先生は再び、細部の調整にまつわる話を再開する。

そうして、今現状で万端といえる準備をして、初のエクストリームアイロンに望む事になった。

決行の前の日、僕は和室にあったアイロンを充電にかけるとアイロン台を撫ぜる。

多分、嬉しそうな顔をしていたのだろう。
それを後ろで見ていた母親が首を傾げる。

「真一何やってんの。あんた気持ち悪いよ」

うるさい。構うものか。

僕はその日の夜、興奮してあまり眠れなかった。
遠足に向かう前の日のあの期待に膨らむ胸の高鳴りがアイロン台
を抱えて眠る僕の胸を締め上げる。

殆ど一睡もできないまま、僕は朝を迎える事になった。
だが、しっかりと意識は落ちていたらしい。

「真一、起きてよ！もうすぐ先生との約束の時間だよ！」

いつ、眠ってしまったのだろう。

ふと気がつけばみかがパジャマ姿の僕の襟首を掴んでがくがく
と揺さぶっている。

時計を眺めていると既に十一時を回っている。

冷や水を頭からかけられたように意識が鮮明になり、僕は叫ぶ。

「やつべえ！」

「何やってんの真一！早く着替えて！」

僕はそこにみかが居るのにも関わらず着替え始める。

「ばか！私が出てから服脱いでよ！」

みかは顔を赤らめながら部屋を出る。

僕はそんなことに構わずジーンズを履くと、この間先生から貰った皮ジャンに袖を通した。

溜めていたお年玉をはたいて買ったフルフェイスのバイクのヘルメットを二つ持ち、外で待っていたみかに片方を渡す。

「真一！アイロンは？」

「あ、忘れてた」

「何やってるのよもお！」

苛立たしいみかの声を聞きながら僕はベッドの下に転がっていたアイロン台を掴む。

そして、急いで下に下りるとシャツとアイロンを手に右往左往している母親がアイロン台を抱えている僕をみつける。

「真一、あんたがアイロン台持ってたの？お父さんのシャツにアイロンかけるからアイロン台返しなさい」

僕は親父のシャツとアイロンを母親の手から奪うと

「母さんがアイロン持ってたのかよ！今日使うのに昨日充電していたんだから返せよ！親父のシャツも俺が使っからいいよ！」

と、はたから聞いていたら訳の分からない日本語を言い残してそのまま家を飛び出した。

「ちよつと真一、待ちなさい」

「ごめんなさいおばさん。説明はまた今度です！」

みかが母親に頭を下げながらもたもたしているのを急かすと僕は家の横に止めていたCB400のエンジンをかける。

一発で小気味良く吹き上がったエンジンだが、軽くアクセルを開き勢いをつける。

アイロンとシャツを皮ジャンの中に収めると、アイロン台を背負う。

ヘルメットを被り、後ろにみかが乗ったのを確認すると僕はキャスターを上げてクラッチを繋いだ。

アクセルを開き、バイクを加速させる。

みかが僕の背中から腕を回してしがみついてくるが、背中を圧迫するのはアイロン台の硬い感触だ。

アイロン台がなければ絵になるのだろうが、それが間に挟まっているかぎり、その絵は少し滑稽だ。

僕はアクセルを開き、ギアを徐々に上げていき先生の待っている約束の場所まで一気に駆け抜けた。

僕は軽く法定速度を超えて加速する。

「真一！ちよ、早い早い！」

「大丈夫だつて。これからもっと危ない事するんだから」

「きゃー！怖い怖い！」

後ろで悲鳴をあげるが僕はそれに構わずアクセルを入れた。

「死ぬ死ぬ死ぬ。怖い死ぬ！」

その悲鳴も、そろそろ風の音で消えそうだった。

そこはあまり車通りの少ない山道だった。

なだらかな登りになっている山道は今回の舞台にはうってつけだった。

車もすくなくれば多少対向車線にはみ出しても事故の危険はそれだけ少ない。

それに、なだらかな登りは多少アクセルワークを間違えても速度を出しすぎる事は無く、速度の調節をするには最適だった。

山道に設けられた休憩所に先生は居た。

約束の場所に着いた時、既に先生は既に準備が完了していた。

真っ黒なスカイラインGT0に頬杖をつきながら僕が来るのを待っていたのだろう。

僕がつくと先生は軽く手をあげる。

僕はそれに対して中指と人差し指を立て、敬礼する。

バイクを車の横に止めると、みかはよろよろとバイクから降りる。

「真一、帰りは安全運転で帰ろう？でないと命がいくつあっても足りないよお」

情けない声をあげ、みかは地面に座り込む。

ヘルメットを脱いだみかに嶋本先生はカメラを渡す。

「使い方はこの間教えたとおりだ。所定のポイントで俺と遠藤が走ってくるのを見て写真を撮ってくれ」

「どんな写真を撮ればいいんですか？」

「アイロンとシャツと遠藤が格好よく撮れてればいい」

えらく端的な説明にみかは不承不承納得しながらよろよろと歩いていく。

みかが遠く歩いていき、手を振った。

撮影ポイントに到着したのだ。

僕と先生はお互いを見合わせると、お互いが頷いた。
先生が号令をかける。

「これより！エクストリームアイロンを実施する！」

「っ了解ッ！」

鋭い気迫でそれに答える。

「アイロン台、シャツ用意！」

先生の号令を受け、僕はアイロン台を先生のスカイラインのルーフの上に固定する。

ご丁寧にスキーキャリアを改造したものが取り付けられており、それがアイロン台をがっしりと固定した。

そして、更にそのキャリアに親父の茶色のカラーワイシャツを挟み、固定する。

「アイロン台、シャツ、準備よしッ！」

「ヘルメット装着！」

「ヘルメット装着っ！よしッ！」

僕がヘルメットを装着すると先生は車に乗り込む。

「エンジン点火あッ！」

先生のGT0のエンジンが唸る。

「エンジン点火あッ！準備よしッ！」

僕のCB400がそれに答えた。

「アイロン、用意ッ！」

「アイロン、準備よしッ！」

僕の手の中でアイロンが静かに僕の手の中で熱を持つ。

ゆらりと熱気がアイロンから滲み出る。

僕は今にもクラッチを繋ぎ、アクセルを解放したい衝動を必死に抑え、喉の奥から迸りそうな何かを堪えていた。

先生が僕に向けて拳を突き出し、親指を立てる。

僕も、親指を立ててにやりと笑った。

先生がサンバイザーからサングラスを手に取り、それを目に被せると不敵に笑う。

「行くぞ遠藤……」

「遠藤真一準備よしっ！」

僕はアクセルを豪快に噴かして言葉無く答える。
そして、先生が咆えた。

「エクストリイム……」

確かにそれは僕の体の中で渦巻き、喉の奥までこみ上げていた。

「アイロオオオン！」

「つイヤアアアアアアアアアア！」

獣じみた咆哮が僕の喉から迸る。

まずは、先生のGTOが暴力的に加速する。

タイヤがトルクに耐えられず、発進の際、アスファルトを削り白煙を散らす。

タイヤが叫び声をあげながらアスファルトを蹴飛ばすとGTOは風を切って飛び出した。

その後を追う獣のようにCB400が咆える。

エンジンが獣のような唸り声をあげて咆える。

次の瞬間、首根っこから後ろに思い切り引き倒されそんな暴力的

な加速度が僕の体を引っ張る。

僕は必死にハンドルを握り、しっかりと股にタンクを挟み台風のような加速度をねじ伏せる。

先を走るGTOに僕のCB400は間を置かず追いつがった。

僕はブレーキを踏むことなく、体を左右に振り、バイクを右に、左にと揺さぶる。

あわせてタイヤが白煙を上げ、グリッド痕をアスファルトに刻みながら咆え叫び、スラロームを描く。

GTOが所定の速度になった後、僕はバイクをその左横につける。微妙なアクセルワークで一定の速度を保つ。

そして、GTOとCB400があと僅かで触れるところまで接近する。

僕はあの絶壁で感じた恐怖が背中を駆け抜けるのを感じた。

僕が次の瞬間、ハンドル操作を誤りGTOと接触したらまず間違いない僕は無事ではないだろう。

そして、先生だってその責任を負うだろう。

前に見たバイク事故の運転手のように膝の骨が肉を裂いて現れる。そんな恐怖を目の前を感じながら僕は最高の充実感を得ていた。

僕は右手に掴んだアイロンをGTOに伸ばした。

先生はちらりとサイドミラーで僕の様子を確認し、親指を立てた。

僕は口から迸るそれを留める術を知らなかった。

「エクストリイイイムアイロオオオオオン！」

熱くたぎった鉄の塊をシャツに押し付ける。

それは茶色のシャツの上で迸り、皺を伸ばす。

世の中の全ての不条理を消し去れるような凄まじいエネルギーの奔流を押し込んだアイロンがアイロン台の上で、シャツの上で迸る。

「アイロオン、ツイヤアアアア！」

僕は叫びながら、駆け抜け、ただその瞬間、自分が生きている証を、皺のなくなったシャツと、余熱の残るアイロンに見出していた。

次の日、僕が誰も居ない屋上で弁当箱を開いて遅い昼を食べているとそれはやってきた。

隣のクラスの水下学だ。

水下は屋上のドアを開けて一直線に僕のところへ駆け寄ってきた。

「遠藤！お前、凄い事になってるぞ！」

「あん？」

僕は弁当箱の裏についた海苔を箸ではがしながら素っ頓狂な声を上げた。

水下はずっと興奮したまんまだ。

「お前、アイロン部って作るんだって？今、中庭でバスケット部の金井と二ノ宮がビラ配ってるぞ？」

「うっそ！」

僕は全身の血がさつと引いていくのを感じながら立ち上がる。

屋上のフェンスに駆け寄り、中庭を見下ろす。

そこにはグループを作って昼飯を食べている生徒に、片っ端から声をかけながらビラを配っているみかと二ノ宮が居た。

というより、みかが無理矢理二ノ宮を引きずり回しているように見えた。

「あいつ……」

僕は舌打すると中庭に走る。

「アイロン部です！入部希望者募集してますー！」

「入部希望の方は二年A組の遠藤真一までお願いしますー」

みかは通りすぎる生徒にも片っ端から声をかけて回り、ビラを配っている。その後ろで二ノ宮がぺこぺこ頭を下げて回る。

僕は二人に近づくと不機嫌な顔を隠そうともしなかった。

「なにやってんだよ」

「なにつて……部員の勧誘してるんじゃない？マネージャーとして当然でしょ？」

「バスケ部の正部員だろうとお前は」

「でもアイロン部マネージャーも兼務してるもん。ねえ？遙？」

「はい！」

二ノ宮が嬉しそうに頷く。

僕はこめかみの辺りを押さえ、難しい顔をしながら二人が配っているビラを見る。

そこには一番最初に先生とやった断崖絶壁でアイロンをかけている僕の姿がプリントされており、そこにでっかく「さわやかな青春とシャツをあなたに」とロゴが斜めに入っていた。

そして、その同じくらいの大きさの字で「金井クリーニング」とあった。写真を撮るのを嫌がった昨日と態度が違う原因はこれか。

そう、みかの家はクリーニング屋だった。

「お前、何勝手に人の写真で広告作ってるんだよ」

「商店街のおばちゃんたちには凄い好評だよ。いい男だって」

みかは悪びれる風もなく、笑うとまた、近くを通りすがった男子生徒に声をかける。

「あ、すみませーん！」

僕は頭が痛くなるのを感じながら、これから起こるであろうトラブルを予想した。

「やっぱり……」

僕が放課後、ロープや資材の扱い方を練習する空きのプレハブ小屋に行くと、そこには山積みされた運動部の練習着が置いてあった。倒れてくればそのまま僕を飲み込むのではないかと思う程積み上げられたそれは、北星学園の生徒の青春の汗を吸って、酸っぱく香っていた。

せめて洗濯してからこっちに持って来いと言いたくもあつたが、みかが配ったビラが悪い。

これじゃあまるでクリーニング屋じゃないかと僕はうんざりした。僕に遅れて入ってきた嶋本先生も苦笑を浮かべた。

「これじゃクリーニング屋だな。正式に部として認められたらアイロンだけじゃなくて洗濯機も要求しないとな？」

冗談とも本気ともつかない事を言う。

僕はため息をつく、山になった洗濯物を眺める。

さて、どうしたものか。

僕が思案に暮れていると、そのプレハブ小屋に誰かが入ってきた。

「あの、アイロン部の部屋ってここでよかったですか？」
「うん、ああ？二ノ宮じゃないか」

そこには二ノ宮が居た。

いつもみかと一緒に居る二ノ宮が一人で居るのはシチュエーション的には珍しかった。

だが、僕はそれよりアイロンとアイロン台を抱えているのに気がついた。

「二ノ宮、それ？」

「はい！先輩、私、アイロン部に入部します！」

「はあ？二ノ宮はバスケット部だろう？」

「いえ、今日バスケット部は正式に退部してきました！私、アイロン部の正部員になります！」

二ノ宮は口早にそうまくしたてた。

なんだろう、二ノ宮ってこんな子だったわけ？

なんか、こう、もっとおとなしい子だと思っていたが、違ったみたいだ。

「嶋本先生……女子にはちょっと危ないんじゃないですかね……」

「いいんじゃないか？アイロンかけるのに男も女も関係ないだろう。今男女差別とかでうるさいけど絵的には女の子がアイロンをかけている方が絵にはなるからな？」

先生はあくまで楽天的だ。

僕は少々不安になりながらも、認めざるを得なかった。

「遠藤真一ファンクラブ第一号として、アイロン部に入らない訳

にはいかないですから！」

「はあ!？」

今度こそ僕は驚いた。

「知らないんですか？先輩、今年生の間で人気なんですよ？ホラ、毎朝こっそりランニングしてるじゃないですか？あの姿に憧れる人、多いみたいですよ」

確かにこっそりランニングはしているが、それを知っている人が居る事に驚いた。

「ま、私が言いふらしたんですけどね」

言って二ノ宮が笑う。

その直後だ。

部室のドアを開けて水下と、あと一人誰か知らない男子生徒が入ってきた。

「二ノ宮さん、洗濯機ここでいいのかな？」

「あ、伊藤先輩、水下先輩。それ、外に置いておいて下さい」

思い出した。水下と一緒に居る男子生徒は三年A組の伊藤新吉先輩だ。

確か、校内の学力テストで三年生で一番を取った人だ。新聞部で作った校内新聞「北星タイムス」で見たことがある。

小さな眼鏡が、その丁寧な口調とあいまって爽やかな印象を与える人で、うちのクラスの女子にも人気が高かった筈だ。

しかし、水下と一緒に居る事も不思議だった。校則で指摘されている茶髪に、ピアスが伊藤先輩と正反対なベクトルに位置する、典

型的な不良学生だ。確か、軽音楽部の部屋によく入り浸ってた筈なのだが。

「水下、お前どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも、入部するに決まってるだろう。アイロン部でお前だけ女子にモテモテになるなんて間違ってるじゃないか。何でお前のファンクラブが出来てるんだよ」

どうやら二ノ宮の言うとおり、本当に僕のファンクラブが出来ているみたいだ。

一体どのくらいの規模のものか気にはなるが、今はそれどころじゃない。やなかった。

「それで遙ちゃんに入部したいって言ったらとりあえず伊藤つちやんと一緒に洗濯機運んでくれて言われてよ？」

「どうも」

伊藤先輩は人のよさそうな笑みを浮かべて僕に対して頭を下げた。

「ええつと、伊藤先輩ですよな？」

「あ、今度アイロン部に入部する事になりました。遠藤部長。よろしく願いますね」

校内一の秀才にそう言われて何かむずがゆく感じたが、それよりも、伊藤先輩も入部する気にいるらしいという事がわかった。

昼にビラを配って、その放課後にこれだけの人数が集まった。部としては好調なのだろうが、みんな、アイロン部が何をするところかわかっているのだろうか？

二ノ宮はこの間、僕が絶壁でアイロンをかけているのを知っているからいいとして、他の二人は分からない。

「えっと、水下も伊藤先輩もアイロン部って何するところかわかってる？」

「あれだろ？クリーニング屋の真似事だろ？男の中にある母性。それが運動部の女子にウケるんだろ？」

と、水下。

「アイロンの歴史か何かを勉強する部活ですか？」

とは伊藤先輩。

僕は一応、二人に対しアイロン部がするのはクリーニング屋の真似事ではなく、また、アイロンの歴史を調べたりするものでもない事を告げ、そして、エクストリームアイロンについて簡単に説明した。

「はあ！そんなの聞いてねえよ！ばっかじゃねえの！」

「それは危ないですねえ」

水下と伊藤先輩は思ったとおりの驚きを顔に浮かべる。

水下あたりはもう帰り仕度をしている。

「そんなアブねえアイロンがけやるなんて遠藤お前馬鹿じゃねえの？俺は抜ける」

「水下君はやめるんですか？」

伊藤先輩は残念そうに水下を見る。説明を聞いても伊藤先輩は残る気ではない。

「女の子にモテると思って入ろうと思ったのに説明を聞いたらた

だの馬鹿じゃねえかよ、やってられつか」

水下はそう残してプレハブを出て行こうとした。
その時だ。

「真一い！遙こつちに来ていない？」

みかが勢い良く部室に走り込んできて、部室を出ようとした水下
と思いつきりぶつかった。

「……つたあ」

額をぶつけて水下は仰向けに倒される。

骨と骨のぶつかりあう、がつんという大きな音が鳴っていた。

みかは額を押さえながら涙目になりながら、僕を睨む。

「真一い！遙に何を吹き込んだの！今日部活に出てみたら遙が退
部してアイロン部に入ってたって言ってたよ！」

「僕もびつくりしてるよ」

当の本人である二ノ宮は僕の後ろに隠れるようにして、みかを見
る。

「あの、金井先輩怒ってます？」

「なんで私になんの相談も無いのよ！」

どうやらみかは怒っているようだ。

そりゃそうだろう、いっつも一緒に居たのだ。落ち着いていなけ
れば、裏切られた感覚もあるだろう。

「……でも、決めたんです」

二ノ宮はいつもの二ノ宮らしくおとなしく控えめな、しかし、それでもはつきりとそう言った。

みかは何かを二ノ宮に言おうと口を開く。

二ノ宮は肩をすくめ、その形相に怯えるが、しっかりとみかを見つめていた。

この二人の間に何かがあるのかはあんまりよくわからないが、みかはそこで何かを二ノ宮に感じたようだ。

「……わかったわ。納得はいかないけど納得するわよ。ただし、私もマネージャー兼務してるんだから遙に何かあったら、真一！あんな責任取ってもらうからね！」

みかは僕を睨んでくる。僕は釈然としないものを感じながらも、とりあえずはのろのろと起き上がる水下に手を貸した。

「水下、大丈夫か？」

「……ってえ……金井がマネージャーって本当かよ？」

「ああ、とりあえずはバスケット部と兼務らしいけど……」

水下は複雑な顔をする。

「金井って……二年女子ランキング二位の？俺、もうちょっとアイロン部に居てみよう」

そんなランキングがあるのは初耳だった。

僕は一抹の不安を感じながら、この面子を見渡す。

昼の騒動からほんの僅かで集まったこのメンバーが当面のアイロン部のメンバーなのだろう。

僕が嶋本先生を見ると、先生はテーブルの上に座ったまま満足そうな笑みを向けてきた。

「頑張れよ。部長」

「嶋本先生……」

いつの間にかアイロン部は形となり、僕はその部長の座にすっぽりと収まってしまっていた。

「じゃあ、部長、今日はまず、どうしますか？」

二ノ宮が僕に対し何をするかたずねてきた。

水下や伊藤先輩、みかが僕が何を言うのか待っていた。

僕は咳払いすると、とりあえず部室の隅に押しやった洗濯物を指差した。

「とりあえず、コレ、なんとかしよう。でないと臭くてどうしようもない」

青春の汗を吸った、洗濯物の山は酸っぱく黄色い匂いを徐々に部屋の中に広げていた。

第三章 『アイロンと仲間』

「エクストリームアイロンは一九九七年、イギリスのレスターという町で生まれた。趣味であるロッククライミングの最中に平凡でないアイデアとして、アイロンがけを取り入れた事で始まったスポーツだ。ウェブサイトで普及し、それが現在に至る」

アイロン部の面々は放課後、部室に集まると嶋本先生の軽い講義を聞くと次に、トレーニングを始める。

作業着に着替えると、嶋本先生を先頭にし、一列に縦隊を組む。スリングや、ハーネス、ヘルメットをつけ、更にフォースレスキューというレスキュー隊が使う、これ一本で車一台が壊せますという売り文句のハンマーやピックが一体になった工具を背負ってランニングを始める。

「ツチヨーツチヨーツチヨーットーレ！」

「「ツチヨーツチヨーツチヨーットーレ！」」

本当は歩調、歩調、歩調取れと言っているのだが、これを声の限り叫ぶとこのようになる。先生が叫んだ後にみんなが続いて叫び、歩調を合わせる。

「ツチニーサンシー！ツチニーサンシ！」

「「ツチニーサンシー！ツチニーサンシ！」」

「エクストリームっ！」

「「アイロン、イヤアッ！」」

ここまで掛け声をかけると一番最初に叫ぶいわゆる前半呼称者が

先生から僕になり、順に部員で回しながら三十分近く走る。

これは先生がレスキュー隊員時代にやっていたランニング方法で、装備を抱えたまま大声で叫びながら走ると相当疲れる。

だが、実際、断崖にぶら下がったりすると隊員同士で距離が離れたり、悪天候の為、声を通らなかつたりする場合を想定すると、普段から最悪の状態で声を出せる訓練をしておかないと、いざというときに危険を知らせあう事ができないからこのように訓練するらしい。

おかげで、はじめの頃はみな喉がつぶれ、二ノ宮が呼吸困難に陥ったり伊藤ちゃん……伊藤先輩はそう呼ばれる方がいいと言う……なんかがお昼を戻したりしていた。

それが終わると今度は補強運動をする。

補強運動といっても嶋本先生レベルの補強運動であり、普段から鍛えてる僕でも少々厳しい筋トレであり、他の部員に対しては酷としかいいようの無い内容だった。

腕立てをするときは部員の首の上に自分の足を乗せ、四人でスクウェアを組んで実施する。女子である二ノ宮あたりは目の端に涙を溜めていたが、泣き出さず、よくこんな厳しいトレーニングに耐えていると思う。

それが終わり、クタクタになると、今度はロープワークの練習になる。

「もやい結びラン！、はじめ」

これも酷いトレーニングで二人でペアになり、片方が50メートルをダッシュした後、鉄棒にもやい結びをして戻ってくる。

そこで交代した相方が、ダッシュでそれを解きに行き、急いで戻り、相方の胴体にもやいを結ぶ。

それで遅かった方がペナルティで腕立て伏せをする。

もちろん、結び方を間違えた場合も同じようにペナルティだ。

「アイロン部ってアイロンをかけるんじゃないくて、鉄の男を作る部活なんじゃねえの？」

水下がそうばやくのも無理はなかった。

僕らはあれから一度もアイロンに触ってないし、エクストリームアイロンをやっていない。

二ノ宮や伊藤っちゃんあたりは部活が終わる頃にはふらふらになっており、みかが迎えに来て僕に対し

「なんでちゃんと遙の面倒みないのよ！」

と拳を飛ばす事もしばあった。

僕もみんなも徐々に疲れてきており、ストレスを溜め始めていた。

このままではいけないと思いつながら何にもする事ができず、時間とストレスを積み上げていった。

そんな練習が二週間も続く頃、恐れていた事態が起こった。

「こんな部活やってらんねえよ」

ロープワークをやっているとき、水下がついに音を上げた。

水下はスリングを地面に叩きつけるとそれを蹴っ飛ばした。

僕は怒った。

「水下！スリングは丁寧に扱えよ！網目に砂でも噛んでみる！それ一本で一トンは支えられるものも、そのせいで弱って切れたりするんだぞ！いざって言うときに命を預ける相棒を粗末にすんなよ」

「俺はロープワークや体を鍛えるためにこんなところに入ったんじゃないえよ！アイロン部だったってアイロンかけた事もねえし、女に

モテる訳でもねえし。やってられつかよ！」

水下は僕の襟首を掴み、唾を飛ばしながら怒鳴った。

水下は女にモテたくてアイロン部に入った訳で決してエクストリームアイロンをしたくて入った訳じゃない。

むしろ、これだけのしごきがあつて、これまでついてきたのが不思議なくらいだった。

しかし、これとそれとは話が別である。

僕も最近、アイロンをかけれずにイライラしていたし、それより、不真面目に人生を生きている水下のような奴が嫌いだった。

何かとチャラチャラしてて鼻につく野郎だったし、こいつが未だに部活に残っている理由がみかがマネージャーで顔を出すからだった。

「これぐらいのシゴキで音をあげてんじゃねえよ。実際、絶壁でやろうがどこでやろうが危ないんだよエクストリームアイロンは。そこで僅かでもその危険を減らすためにこうやって訓練してんじゃねえか」

「俺は楽しんでモテれりやそれでいいんだよ」

水下が鼻で笑う。

ふざけた野郎だ。

かつとなつて、僕の口が水下を罵倒する。

「お前なんかモテる訳ねえだろ！何にでもすぐ飛びつくけどすぐ飽きて何でも乗り換えるじゃないか。軽音楽部だって、サッカー部だって結局長続きしないで辞めたんだろ？何か一つに本気で打ち込んだ事あんのかよ！根性なし！」

言ってから、しまったと思った。言い過ぎた。

水下が僕の顎に、拳を叩きつけ、がちんと火花が僕の目の前で弾けた。

「ありえねえ場所でアイロンかけてる馬鹿野郎にそんな事言われる筋合いねえよ！気色悪いんだよてめえわ！」

言われて僕もかっとなってきた。

僕も水下の腹に蹴りを入れる。

水下はグラウンドに倒れ、頭を打ち付けたようだ。目をしばたかせ、僕を見て怒鳴る。

「やりやがったな遠藤！」

僕と水下は取っ組み合いその場で殴りあいをはじめた。

「部長！水下君やめようよ！」

「先輩、やめてくださ……わあ！」

二ノ宮と伊藤ちゃんが慌てて止めに入るが二人の声は聞こえなかった。

たまたま通りかかったみかが仲裁に入らなければ僕らはいつまでも殴り続けていたかもしれなかった。

「居なくなりやがれ！この根性なし！」

僕は吐き捨てるように水下にそう叩きつけた。

……僕は自分が打ち込んでいるものを否定されて凄く、腹が立っていたのだ。

水下の方が喧嘩慣れしていたのだろう。

僕が少し手加減したのが原因かもしれないが、客観的に見て怪我が酷かったのは僕の方だったみたいだ。

僕には必要ないと言ったのだが、みかは無理矢理僕を保健室に引っ張り込み、簡易ベッドに座らせると消毒液とガーゼを持ってきた。

「ホントに真一は心配かけるんだから!」

無然とする僕の横にみかは腰掛けるとガーゼに消毒液を含ませると僕の右目の上に押し当てた。

熱を持っている右目の周りに冷たいガーゼが押し付けられ、鋭い痛みを感じて顔を引いた。

「真一、じつとしてなさい」

まるで母親みたく、みかは強く言うとかーゼで僕の目の周りを拭いていく。

どうやら、目の周りが切れていたようだ。白かったガーゼは血を吸って赤く滲む。

「どうして、水下君と喧嘩したの?」

「関係ないだろう」

「関係あります。一応、マネージャーだから」

「……バスケ部と兼務の癖に」

「真一って可愛くないねえ」

僕がむっとしているとみかは呆れたようにため息をついた。

「あんた一応、部長なんでしょ?なら部員の面倒みないと駄目じ

やない。遙だつて相当疲れてるじゃない」

「仕方ないよ。先生の話、聞けば聞くほど危険なスポーツだつてのがわかるし、そうなればあれだけの訓練を事前にしておかないと下手したら死んじゃうよ」

結局のところ、結論はそれなのだ。

危険だから、それ相応の訓練をする。危険すぎるから訓練もハードになるのだ。

「それはわかるけど……でも、エクストリームアイロンって何も断崖絶壁や車で走りながらするだけのものじゃないでしょ？人ごみの中でやったり、家の庭でアクロバティックにやってもエクストリームアイロンなんでしょ？」

みかは兼務のマネージャーの癖に勉強している。確かにその通りだ。

「勉強してるでしょ？兼務でも」

僕の表情を見てわかったのか、みかは得意げな顔をする。それがちよつと悔しかった。

そして、みかは更に痛いところをつく。

「真一がさ、最近アイロンかけてないからイライラするのはわかるけど、みんなが一定水準になるまで危ないから先生はきっとエクストリームアイロンをしないんじゃないかな？部長ならやっぱりその辺を理解してあげないと」

理解していた。

先生は僕一人であれば何かあった際に、サポートできるだけの技

術はあるが、二ノ宮や水下、伊藤ちゃんが加わって、それぞれがトラブルを起こした場合に処理できるだけのスーパーマンじゃない。だから、それぞれがトラブルを起こさない一定水準になるまで過激なエクストリームアイロンをしないのだ。

それを僕は頭の中では理解しているのだが、結局、考え方が子供で、どこかで納得していなかったのだ。

僕は水下に対し、それを説明し、納得させなければならなかったが、それができなかった。

部長としては失格だ。

また、それをみかに叱責された事についても腹が立つ。

腹が立つのは自分に対してだ。これをみかに腹が立つようであれば僕は人間として終わっている。

「……みか、悪かった」

「謝る相手が違うでしょ」

みかはため息をつきながら笑うと、傷テープを僕の額に貼り付けた。

「とりあえず、何とかして状況を良くしないとイケないかな？ 水下君は私が部室までなんとか引つ張るから、後はあんたが何とかしなさい」

みかはどんと胸を叩くと、にっこり笑う。

僕は情けない部長としての自分と、兼務とは言え、立派にマネージャーを果たしているみかを比べ、頑張らねばと思った。

「そんなし、こんどバナナクレープ奢ってもらうからね」

みかはぺろりと舌をだして笑うと勢い良く飛び出していった。

次の日、僕は嶋本先生に企画書を持っていった。
無論、エクストリームアイロンの実施計画書だ。

今ある人材と技術、そして装備を勘案し挑めるエクストリームアイロンだ。

嶋本先生はそれをしばらく難しい顔で眺めていた。

僕はごくりと唾を飲み込んだ。

先生は計画に対し厳しかった。命を懸けたスポーツをするからだ。それは重々承知していた。これまで何度か企画書を提出した事はあるが、ことごとく却下された。
どれもこれも

「お前は、この計画で失敗した時、死んだ人間の責任を取れるか？」

そう言われゴミ箱に投げられた。
だが、今回、先生はそれを僕につき返してきた。

「遠藤。お前、その計画に水下や二ノ宮の命、乗っける事できるか」

「はい」

僕は静かに答えた。

僕はその計画書には自信があつた。

嶋本先生はしばらく僕を眺めると、満足げに頷いた。

「よし、なら今日、ミーティングで発表しろ。それでお前が音頭を取ってエクストリームアイロンを実施してみろ」

僕は背中にずっしりと重たいものを感じて先生の前を立ち去った。

その日、部室に入ると、凄い重苦しい雰囲気と沈黙が辺りを支配していた。

小さな椅子に二ノ宮が座り、装備資器材のチェックをしている。

伊藤先輩は自分の訓練着にアイロンをかけていた。

そして、その向こうで水下がスリングを弄び外を眺めていた。

どうやらみかは約束をちゃんと守ってくれたようだ。

後は僕が頑張らねばならない。

だが、この雰囲気は少し重かった。

僕に水下のような器用さがあればこの雰囲気のを和らげる事ができたのだろうが、あいにくとそんな器用さは持ち合わせていない。

この間の一件のせいだろう、二ノ宮と伊藤っちゃんは僕と水下の顔を交互に見て、何かを言おうとしては口を閉じている。

僕は水下をちらりと見ると、部室の黒板に歩み寄った。

水下は僕と目を合わせる事なく、部室の小さな窓から外を眺めていた。

僕は咳払いをすると、みんなに告げた。

「えっと、これから重大な発表があるから聞いてもらえるかな？」

みんなが顔を向ける。

僕はもう一度咳払いすると告げた。

「来週の日曜日、エクストリームアイロンを実施する」

僕がそう告げると、みんな目を丸くした。

「先輩、でも……」

二ノ宮が心配そうに声を上げる。

二ノ宮が心配しているのはみんなの技術や体力の問題だろう。訓練すれば訓練するほど、自分の体力や技術を正確に把握でき、それに対してできる事とできない事が分かってくる。

だが僕は続けた。

「やるといったらやるんだ」

僕はきつぱりとそう告げると黒板に計画を書いていく。

「実施は日曜日十六時〇〇分、集合は駅前に十四時。実施場所は鳥山八景で二ノ宮は知ってるだろうけど、一番最初に実施した場所だ。」

僕は時間と場所をすらすらと書いていく。

「装備は登山装備を一式使う。ただ、長ロープは三つ……予備も含め四つ持っていく」

必要な装備も黒板に書き込み、それから一番大事な事を書き始めた。

「今回は断崖絶壁にアイロナーとテーブルの二人、それにピクサーの合わせて三人が降下する。まずはピクサーが降下し、その後を追ってアイロナーとテーブルが降下する」

テーブルとはアイロン台を持つ人の事で、ピクサーは写真撮影者。どちらも、僕が企画書を出すときに呼称しているコードネームのよ
うなものだ。

「先輩、あと一人はどうするんですか？」

二ノ宮が指折り数えながら聞いてきた。

僕を含め、部員は四人、それだと一人余る事になる。

僕は頷くと答えた。

「不測の事態に備えて上で先生と一緒にサポートに回ってもらう。
このサポート役には二ノ宮にお願いしたい。いざという時はレスキ
ューの経験がある先生の指揮下に入ってもらおう。だから、何かあっ
ても落ち着いて先生の指示に従ってくれ」

体力的に二ノ宮にはこのレベルの断崖絶壁を降りれるだけのもの
が無いのが正直なところだ。

僕は崖の絵を描き、その上に二ノ宮と嶋本と書いて丸で囲む。

「そして、ピクサーは伊藤っちゃんにお願いしたい。伊藤っちゃん
はカメラの経験があるんだよね？」

「ありますよ」

伊藤っちゃんは自前でミコンのデジタルカメラを持っている。

こういう荒場で使うのには少々不向きかもしれないが、そこは操
作に慣れた伊藤っちゃんに任せるしかない。

「アイロナーとテーブルは僕と水下でやりたい。アイロナーを…
…水下、いいか？」

僕はもうちよつとマシな言葉が出ないものかと自分がもどかしくなった。

水下は面倒くさそうに僕の方を見ると、ため息をつきながら頷いた。

「テーブルは僕がやる。テーブルが下になって、アイロナーがその上に位置する。このとき、ピクサー、アイロナー、テーブルのお互いのロープが絡まらないようにしばらくは互いの間隔は三メートルは保持するように心がける事。そして、所定の位置にいたら、合図するから、そこからこうやってフォーメーションを組む」

僕が黒板にフォーメーションを描く。

水下の下に僕が入り、その横にピクサーである伊藤ちゃんを書く。

「撮影は逆光を利用したいから、東側から伊藤ちゃんに撮影してもらおう。で、肝心なのが水下だ。水下は所定の位置についたらそこから体の上下を反転してもらおう。この際、ロープに足を絡めたり、他の人のロープに絡まったりするとトラブルになる恐れがあるから、気をつけてくれ。水下がもし、落下した場合、テーブルとして下に位置している僕も危なくなる」

水下がはじめて口を開いた。

「遠藤、それだったら技術も体力もあるお前がアイロナーをやった方がいいんじゃないか？」

それは正直僕も悩んだ。

何時間も悩んだ。

水下の体力は正直、僕よりあると思う。

ただ、性格が災いして、伊藤っちゃんや二ノ宮と違い、ロープワークやペリング技術は僕らの中では一番下手だった。

だから、成功率としてはテーブルを水下に担当してもらった方が高くなる。

水下が更に攻める。

「いつも先生やお前が言ってるじゃないか、エクストリームアイロンは危険なスポーツだって。生還率は98パーセントじゃだめだ。限りなく100パーセントに近くないといけないって。それだったら俺がアイロナーになるよりテーブルの方がいいじゃねえか」

みんなの顔を見ると、二ノ宮や伊藤っちゃんも表情でそう訴えている。

だが、僕は迷わず言った。

「僕は水下を信じている。アイロナーは水下でテーブルは僕だ」

シンと空気が重くなった。

僕はみんなに告げた。

「今週一杯は体力トレーニングより部室の壁や校舎壁を使ったらペリング技術を中心にトレーニングする。以上」

学校の壁でトレーニングした結果、どうしてもフォーメーションがうまくいかなかった。

移動の際にロープを絡めたり、水下が上下反転する際にロープを放したり。

正直、絶望的といってよかった。

三度目の失敗の時、水下はロープを放し、下に居た僕を巻き込み落下した。

嶋本先生の激が飛んだ。

「水下あ！これが本番ならお前は遠藤と一緒に死んでるぞ！」

僕の上で水下が唇を噛んでいた。

目の端に涙を溜めている。

「っはあい！」

なかばやけくそ気味な返事をして水下が立ち上がる。

その日、フォーメーションは一度も成功しなかった。

次の日、やはり、フォーメーションは綺麗に成功しない。落下はせず、一応アイロンは成功するが、ロープが絡まるようじゃ成功とは言えない。

先生の激が水下に飛び、今日は先生の手が水下に飛んだ。

「水下あ！もっと真面目にやれ！本気で取り組まないと死ぬぞ！」

心配して二ノ宮が部活の後、部室で着替えてい僕にこっそり相談してきた。

「先輩、アイロナーはやっぱり先輩がやった方がいいと思います。なんなら私がやりますよ」

「二ノ宮には体力的にちょっと厳しいだろう。気持ちは嬉しいけどこの配置は換えられない。」

僕はきっぱりと言い切った。

「でも」

食い下がる二ノ宮。そこに伊藤つちゃんが入ってきた。

「あら、揉めてたんですかね？」

「いや伊藤つちゃんどうしたの？」

「多分、二ノ宮さんと一緒です。水下君の技術では正直成功するとは思えません。厳しいでしょうが僕は配置変更を提言しますよ」

伊東つちゃんは物腰こそ柔らかだが、言葉は本気だった。

「……水下か」

僕はため息をついた。

「これじゃまるで先輩が水下さんを虐めてるようにしか見えないですよ。水下さんだって今日、先生に殴られてたし。正直、見られません」

「だけどなあ！」

僕は声を荒げた。

その時、丁度、水下が部室に入ってきた。
作業着を収めに来たんだろう。

僕は舌打した。

水下は疲れた体を引きずりながらロッカーに自分の作業着をロッカーに収めると鞆を持って帰っていた。

「聞かれたかな？」

「多分……聞かれましたね」

伊藤つちゃんと二ノ宮が顔を見合わせる。僕はすぐに水下を追いかけた。

外に出て、帰ろうとしていた水下の肩を掴む。

「水下あ！」

水下は僕を振り返ると今にも泣きそうな顔をしていた。

「俺はお前が言うように何やっても本気になれねえ人間だよ！つくそ！」

水下は吐き捨てるように言っただラウンドを走っていった。

今になってわかった。

水下はそれを誰よりも気にしていたんだ。

水下は本気になれた物が無い。前の僕と同じように本気になれる物が見つからなくて悩んでいたんだ。

だから、僕は、水下を見てイライラしていたんだ。

昔の僕とどこか似ていて。

だけど、僕は叫んだ。

「水下あ！俺は信じてるからな！」

僕は叫んでいた。

水下が一瞬止まる。だが、水下はそのまま走り去っていった。

「信じてるからなあっ！」

水下に聞こえると信じて、僕は叫んでいた。

僕は計画を入念に見直した後、やっぱりプランを変える事はしなかった。

僕は装備の点検を終えると部室の鍵を閉めて出る。

あたりはすっかり暗くなっていた。

僕は体をもてあましていたので、フォースレスキューを背負うと、ランニングしながら帰ろうと思った。

だが、部室を出るとそこにはみかが待っていた。

「よっ！」

「バスケ部、こんな遅かったのか？」

「真一を待ってたのよ。いろえんぴつのクレープ奢ってもらう約束でしょ？」

「もうこんな時間だろ？いろえんぴつ閉まってるよ」

みかは商店街にあるいろえんぴつというクレープ屋のバナナクレープが大好きなのだ。ことある事に奢らされてはいるが、一度も奢って貰った事は無い。

だが、時計の針を見ると八時を過ぎておりもう店は閉店している時間だ。

「しょうがないなあ。じゃあまた今度にしようか？」

「帰り、ランニングするから付き合うか？」

「ええー？制服が汗臭くなるから勘弁してよ」

それも可哀想だと思い、僕はフォースレスキューを部室に置いてきた。

僕とみかは久しぶりに二人で帰る事になった。

「真一、最近たくましくなったんじゃない？」

「そうかな？……そうだろうな。あんな訓練してればそうなるよ」

僕はダラダラと無目的に生きていた一ヶ月前と比べると、確かに逞しくなっている自分を見て、ちよつと感激した。
変われば変わるものだ。

「最近、遙はどうなの？」

「女の子だから、少し体力的には厳しいけど、それでも技術の飲み込みは早いよ」

「へえ……いの成せる技かあ」

「ん？」

みかがしんみりと何かを呟いたが初めの方は聞こえなかった。みかは首を左右に振るとそのまま歩き出した。

「みか、バスケ部の方はどうなんだ？」

「ん。地区予選ね、準優勝」

「あ……」

「試合、終わっちゃった」

そう言ったみかは少しさびしそうだった。

そうだ。エクストリームアイロンの実施計画が立ってからずっとそればかりに頭が働き、みかのバスケ部のことを考える暇がなかった。

「真一、なんか忙しそうだったから先週に終わっちゃったよ」

「ごめん」

「応援に来て欲しかったなあ……」

「え？」

「いや、何でもないよ！」

みかは急に走り出す。

僕はそれを追いかけた。

「真一、アイロン頑張つてね！」

みかはくると回るように振り向くと笑っていた。

僕はずしんと背中重いものをふと感じた。

みかは僕の横に並び、ゆっくりと歩調をあわせてくれる。

「真一、悩み。あるんでしょ？」

「何でだよ」

「あんた馬鹿だからすぐわかる」

昔っからみかはそうだった。

僕が何か考え事をしていたらそれが手に取るように分かってしま
う。

僕は言うべきかどうか迷った。

「言ってもいいのかな？」

「言つて楽になるなら聞いてあげるよ？」

僕はその誘惑に負けそうになった。

正直、あと数日しかないのに、このままでは命を落としてしま
い
そうで怖い。

僕は口を開こうとして、やっぱり閉じた。

これは水下の問題であつて、僕の問題じゃない。僕は信じると

言っただ。

「駄目だ。やっぱり言えないや」

「……そっか」

みかはそれ以上、聞いてこなかった。

僕は空を眺めて、明日こそいい風が吹くように祈った。

「ね、真一、少し、公園寄って行こう？」

「え、ああ、あ、いいよ」

急にそんな事を言われるもんだから、僕は少し返答するのに戸惑った。

まあ、少しくらい夜風に吹かれるのもいいかもしれない。僕とみかは二人でさくら公園に行くことにした。

さくら公園には昼のような子供の喧騒は無く、心地よく肌寒い風と静寂が漂っていた。

僕は自販機で暖かいコーヒーを買った、みかに一本渡した。

「無糖がよかった」

「奢ってやるから文句は言うなよ」

僕はしっかりと無糖のコーヒーを買った、それを持ってベンチに座る。

みかもならってベンチに座り、僕の顔を少し覗き込んだ後、俯いた。

「……最近、遙どお？」

「明るくなったんじゃないか？前はお前にべったりって感じだったからね。前より可愛くなった感じる気はするよ」

僕はコーヒーを啜りながら正直に答えていた。僕がもうちょっと大人であれば隣に座るみかの微妙な反応にも気づけたのであろうが、まだ、僕はそこまで精神的に成熟していなかった。

僕とみかはしばらく黙って椅子に座っていた。しばらく忙しかったから、こうやってのんびりできるのも心地いい。

みかが昔、ダラダラとしている僕を羨ましいといった気持ちが良く分かる。

「あのね……真一……ちょっといいかな？」

「ちよつとどころか好きなだけどうぞ」

僕は冗談めかして言う。心地よい夜風が僕の頬を撫ぜる。僕はこのまったりとした雰囲気にとっぷりと浸かり、みかの顔に浮かぶ表情なんてまったく目に入ってなかった。

「えつと、うん。あのね、私ね……」

みかが口の中でぶつぶつと呟いている。僕はそれにさりとて気をとめず、聞き流していた。

だが、突如、みかは大きな声で

「ひよつとしたら私、真一の事……」

その時、みかの声を遮るように物音がした。どすん。と、バスケットコートの方からあからさまにボールやそんなものと違う落下音がした。

僕はそっちの方が気になり立ち上がる。後ろではみかが複雑な表情をしていたのだろうが、僕はそれを見ることができなかったし、

見えたとしても大人ではないからその表情の意味するところがわからなかっただろう。

「何だろう」

僕がバスケットコートを見てみると、バスケットのゴールの支柱の首の部分にロープが結び付けられており、その下で人がゆっくりと起き上がるようにしていた。

「あれ、水下君じゃない？」

みかがその人影を見てそう呟いた。

街灯の下、浮かぶ姿は間違いなく水下だった。

水下は顔に擦り傷を作り、鼻血を流していた。

多分、顔から落ちたのだろう。水下は鼻血を着ている作業着の袖でぬぐうと、ロープを掴んだ。

ロープをハーネスに固定し直し、支柱を上ると、小さく何かを呟いていた。

「アイロン……準備よし！……フォーメーション……フォーメーションよし！ピクサーよし！テーブルよし！……アイロン準備！」

水下はくぐもった声で一つ一つの動作を確かめるように、呼称する。

そして、水下はロープにぶら下がったまま反転する。だが、もう腕の筋肉がついていけないのだろう。また、水下は頭から落ちてしまった。

「水し……」

飛び出していこうとしたみかを僕が引き止めた。

「……………くあ……………」

水下はまた噴出してきた鼻血を拭いながら立ち上がる。コートには落ちた鼻血が茶色い染みを作っており、水下はコートに座り込むと頭を振っていた。

多分、軽い脳震盪を起こしているのだろう。

だが、水下はそれでもまた、ロープを掴んだ。

「アイロン……………準備よし……………フォーメーション……………フォーメーションよし！ピクサーよし！テーブルよし！……………アイロン準備！」

水下が震える腕を必死に撓ませ、膝の間にロープを挟み、頭を下にロープにぶら下がる。

そして、腰につけていたアイロンに手を伸ばし、それを頭の下に掲げると最後の掛け声をかける。

「……………エクストリーム……………アイロン……………イヤアツ……………」

僕は目の奥が熱くなってきた。

僕はみかの腕を掴むと、その場に背を向けて立ち去った。

後ろをちらりと振り返ると、また、落ちた水下が再度ロープに手を伸ばしていた。

着ている作業着はぼろぼろに擦り切れてる、顔は血だか泥だかわかんないようになっていて凄い、汚い。

だけど、それでもロープに手を伸ばす水下はとても、格好よかった。

「みか……………」

「ん？」

「……水下は格好いいよな」

「……そうだね」

なんか、視界が歪んできた。

僕は目に浮かんだ汗を拭くと、とにかく、頑張ろうと心に決めた。

「……エクストリーム！アイロニヤアッ！」

うまくいった。

嶋本先生や、二ノ宮、伊藤っちゃんが見守る中、僕と水下のフォーメーションはうまくいった。

誰も文句は言わなかった。

水下の下でアイロン台を掲げ、僕は静かに頷いた。

水下の顔は青く腫れており、そして、伊藤っちゃんの号令を待つ。

「ピクサー！撮影よし！撤収準備！」

「撤収準備！」

水下がアイロンを腰に収め、反転し、フォーメーションを解いてシュミレーションは終了した。

「凄いです！今までで一番綺麗です！」

二ノ宮がぱちぱちと手を叩く。

先生は頷くと僕や水下のラペリングフォームについて若干の注意をして終わった。

「水下やったな！」

僕は嬉しそうに水下の肩を叩く。

「まあ、当然だな」

水下は青く腫れた顔で笑った。

精一杯の強がりだろう。でも僕はそれがまるで自分の事のように誇らしかった。伊東っちゃんも同じように喜んでくれている。後は本番まで僕らはそれを繰り返した。

本番の日、僕は例のごとく寝坊した。

「真一、いい加減にしなさいよ。あんたはいつも本番の日に遅れるよね？」

みかに叩き起こされ準備が整うと借りっ放しのCB400で駅前に向かう。

もう既にみんな集まっており僕とみかが一番最後だった。

「先輩おつそーい！罰払ジュース」

「部長、ご馳走様です」

二ノ宮が少し膨れて僕を攻め、伊藤っちゃんがそれに乗る。僕はみんなに謝ると罰払でジュースを買ってきた。

アイロン部として始めて計画したエクストリームアイロンだ。

危険だとはわかってはいたが、何かピクニックに行くようなそんな楽しさがあった。

嶋本先生は今日はチェロキーで来ており、僕以外の人はチェロキーに乗る事になると思ったが、二ノ宮が

「先輩のタンデムに乗ってみたいなー？ せっくも金井先輩は乗ってるんでしょ？ 私も乗せてください！」

と、せがまれ、山の駐車場まで二ノ宮を乗せる事になった。

みかが複雑な表情をしていたが、僕は別段構わずタンデムに二ノ宮を乗せた。

駐車場につく頃には精神的にへとへとになった二ノ宮を降ろすとみかが笑っていた。

「先輩、帰りは安全運転でお願いします」

みかとまったく同じ事を言われ僕は苦笑すると、装備を持って山に入った。

僕らは男子と女子に別れて着替えると、ハーネスを装着したり金具をチェックしたりした。

「水下、お前、ハーネスの金具大丈夫か？」

「大丈夫っす」

嶋本先生が水下のハーネスの金具を少し気にしていたが水下は大丈夫だと言いつつ切った。

ハーネスの金具には予備がなく、またハーネスに固定されているものだから変えようがない。

「最悪、スリングで座席作ってそれでやる方法も考えるよ？」

「ええ、でも、大丈夫っす」

そうなのだ。ハーネスが無くてもスリングでハーネスの代わり「座席」を作る方法がある。僕は一応、先生が作ってくれたロープワークの読本に目を通し確認しておく。

水下も気がつけば座席の作り方の確認をしていた。

まあ、何度も練習し、体が覚えていている事には間違いない。

伊藤っちゃんカメラの準備をしており、二ノ宮は間隔を取ってロープを木の幹に縛り付けていた。

先生が二ノ宮の張ったロープをチェックする。万が一結び方に間違いがあれば結び目にかかる力に変な掛かり方をして、結果、そのロープに命を預ける僕らの生死に関わるからだ。

嶋本先生は満足そうに二ノ宮のロープの結び目を見て頷いた。

「先輩、雑毛布敷いて来ますね」

「一応、命綱つけていけよ」

「はい」

二ノ宮は胴にもやい結びで輪を作ると近くの木に反対側のあまつた部分をもやいで固定した。

そして、ザックの中から汚れた毛布を取り出し、崖の淵に敷く。あれはロープを垂らしたとき、崖の角とロープの摩擦を柔らかくし、ロープが切れるのを防ぐものだ。

たかが、アイロンをかけると侮るなかれ。エクストリームアイロンの真髄はその周到な準備にある。

僕はヘルメットを装着すると、水下と装備の点検をお互い実施した。

確かに水下のハーネスは少し磨耗してるかもしれない。水下は僕らが帰った後、一人、さくら公園で練習していた。これはその時についた傷だろう。

僕はあえて気がつかない振りをした。

「ハーネスよし！スリングよし！」
「ハーネスよし！スリングよし！」

伊藤っちゃんが二ノ宮に装備を見てもらっている間、僕はシャツを固定したアイロン台を背負った。
何かあったときのスリングを肩からかけると、僕はみんなを集めた。

嶋本先生がみんな一人一人の顔を見ると告げた。

「お前たちの努力は、きつとお前たちに答える。努力はした奴にだけ、微笑む。大丈夫だ。頑張れ」

体の奥から、熱くなってきた。

みか以外の部員が一行に並ぶと僕は厳かに告げた。

「これより！エクストリームアイロンを実施する！」
「了解！」

皆が鋭く返答する。

「これより各人の任務を指定する！」

任務指定の号令は形式的なものだが、これが、僕らの動きにメリハリを与える。

「アイロナー、水下に指定する！」

「水下、了解！」

「ピクサー、伊藤に指定する！」

「伊藤、了解！」

「補助、二ノ宮に指定する！」

「二ノ宮、了解！」

それぞれに対し、指をさし、任務を分担する。
そして、みんなで円陣を組んだ。

僕が腹の底から、声の限り叫ぶ。

「北星学園ア・イ・ロ・ン・部ウウウウウ！」

「ツヤアアアアアアアアアア！」

びりびりと大気が震える。

多分、十二人の高校野球児が集まって円陣を組んでもここまでは
声は出まい。

いまここで声を出している連中はこれから死地に赴く連中だ。
気合の入れ方が違う。

「ハイッ！」

「オウッ！」

「ハイッ！」

「オウッ！」

「エクストリイイイイイイム！」

「アイロン！ツイヤアッ！」

周囲の木が風ぎ倒れそうな程の気合を炸裂させると僕らは走って
自分の所定の位置についた。

「アイロナー準備！」

「ピクサー準備！」

「テーブル準備！」

号令と共に皆がまるで精密機械のように同じ手順でハーネスの金

具にロープを通す。

皆が皆、ロープを通すと命綱を結ぶ。

今回は上にみかを含め、三人残る形になるので命綱を木の幹に繋いでいる。

もし、途中でトラブルがあっても、最悪落下して死亡する事は避けたかった。

そして、ロープ、命綱が準備できると、それに体重をかけてみる。その動作まで伊藤ちゃんと水下、僕はユニゾンしていた。

あの厳しい訓練を、それこそ気が狂いそうになるまで繰り返し続けた。これくらいの芸当は造作無い。

たった、数週間の訓練だがお互いがこの厳しい訓練の乗り越えた仲間として、数年ガラガラと友達をやっていた人間に比べ、遥かに厚い信頼関係が僕らにはあった。

「ロープよし！確保よし！アイロナー水下準備よしッ！」

「ロープよし！確保よし！ピクサー伊藤準備よしッ！」

「ロープよし！確保よし！テーブル遠藤準備よしッ！」

それぞれ、お互いが準備ができた事を確認しあうと、僕は皆に号令をかけた。

「降下アツ！」

「アイロナー降下！」

「ピクサー降下！」

「テーブル降下！」

僕らはそれぞれ落ちれば即死の断崖絶壁の降下を始める。

学校の外壁より高いが、僕らには積み上げられた訓練があった。

一番最初、先生に連れられて無理矢理降下したときは違う。

繰り返し積み上げた訓練は危険に対する余裕を僕に生んでいた。

危険の上に身を置いてその危険を自分の支配下に置いている充実感
はまた、今までの恐怖だけのエクストリームアイロンとは違う充
実感を僕に与えてくれた。

伊藤っちゃんも水 underwater も危なげなく、降下している。

「ツチ、ニイ！ツチ、ニイ！」

お互い、号令をかけながら降下スピードを合わせる。お互いが同
じ高度に居た方が装備にトラブルがあった場合に対処がしやすいか
らだ。

僕らはもういいだろうと思う高さまで降りると号令を止めた。

「降下やめえ！」

その号令を受け、水下と伊藤っちゃんは止まる。

「フォーメーション！用意ッ！」

「フォーメーション了解ッ！」

二人が了解すると、僕は高度を調整する。

アイロナーである水下を一番高い位置にし、ピクサーである伊藤
っちゃんを真ん中に、そしてテーブルである僕を一番下に置く。

「テーブル、準備よしっ！」

「ピクサー、準備よしっ！」

「アイロナー、準備よしっ！」

それぞれが位置につくと息を飲む。

「フォーメーションッ！」

僕が号令を飛ばす。

「フォーメーションッ！」

聞こえてはいるのだろうが復唱する事で聞こえている事を教えてくれる。また、聞こえていない人にその号令を伝えてくれる。

基本ではあるが、これが一番大事な事である。これからが本番である。

基本の繰り返しを本番でも繰り返す。

練習ではうまくいったが、本番でうまくいかなければそれは無意味である。

僕らのこなしてきた訓練を信じるしかなかった。

そして、僕らがお互いにしてきた訓練はこの死地においても揺るぐことのないお互いへの信頼をもたらした。

一人でやるエクストリームアイロンとは違う、皆でやるエクストリームアイロン。

僕は今までに無い感動と、胸の置くからこみ上げるエネルギーが口から迸りそうになるのを堪えながらフォーメーションを取る。

僕はアイロナーである水下の下に崖を蹴って慎重に移動する。

長いロープが絡まり合わないように最新の注意を払う。

そして、練習と同じようにフォーメーションが成功する。

「ピクサー、準備よし！」

伊藤っちゃんが親指を立てて僕に合図を送る。

僕はそれを受けて右手でロープにブレーキをかけると、左手でシヤツを固定したアイロン台を掲げた。

「テーブル、準備よし！」

そして、水下がそこで転回した。
その様子は危なげなく、水下が流した血と汗に裏打ちされた努力が、成功を導いたかのようにだった。

「アイロナー、準備よし！」

全部の準備が整った。

僕らの気持ちはこの瞬間、一体となった。

「エクストリイイイイム」

極限な状況における、アイロンがけ。

「アイロオオオオン！！！」

僕らの咆哮が大気を揺るがす。

吹きすさぶ風も、僕らのエネルギーの奔流がかき消していく。

「イヤアアアアアアアアッ！」

アイロン台の上に水下の熱くたぎった鉄の塊が押し付けられる！

「ッダアアアアアアアアアッ！」

僕はその熱いアイロンを受け止める！

熱い咆哮がぶつかりあい、アイロン台の上で暴れる！

シャツの上で進むアイロンの熱さはさながら水下の、僕の、伊藤
っちゃんの、そして、上で僕らのサポートをする二ノ宮の。

僕らのどこにも行き場の無いエネルギーを爆発させてるようだった

た。いや、爆発させていたんだ！

僕と水下の目が合う。

僕が不敵に笑うと、水下も口の端を吊り上げて答えた。
シャッターを切る音が、風の音より激しく僕らの耳を打つ。

「ピクサー！撮影完了！撤収ウ！」

「撤収っ！」

その号令がかかり、僕らはアイロンとアイロン台をしまった。
そして、撤収準備に取り掛かる。
だが、その時、それは起こった。

鈍い金属音がした。

「あ………！」

水下のハーネスが壊れた。

先生が指摘し、僕が見逃した金具が、壊れていた。

その光景は僕の目の前でスローモーションの様にゆっくりと、鮮烈に目に焼きついた。

「……っ！」

声にならない悲鳴を上げて、水下の体が宙に舞う。

僕は咄嗟にアイロン台を放し、両手で水下の体を受け止めていた。
僕の体も宙を舞う。

だが、僕はまだ、ハーネスに吊るされた命綱があった。
上で支えてくれるだろう二ノ宮を信じて叫ぶ。

「二ノ宮アっ！」

僕の体の落下が止まる。

二ノ宮が命綱を支えてくれたのだろう。

だが、命綱には僕と水下の二人分の体重がかかっていて、僕のハースの方がこのままでは先にやられてしまう。

僕は胸の上に水下を抱えるように抱くと、急いでロープを握り、ロープに体重をかける。

水下は僕の胸でゼイゼイと息を上げ、がくがくと震えていた。

「水下、大丈夫か！」

「あ、ああ？あ、ああ……」

水下はパクパクと金魚のように口を動かす。

「俺、生きてるのか？生きてる？ああ、生きてる……」

水下はかなりのパニックに陥っていた。

僕もつられてパニックになりそうだったが、僕は訓練どおりやるべきことをやることに勤めた。

人間、困ったときは繰り返し練習した事が自信になる。

「アイロナーのハーネスが破損したあ！」

僕が大声で上で待機する二ノ宮や先生にも報告する。

伊藤っちゃんが同じ高度まで降りて慎重に近づいてくる。

僕はパニックにならないように落ち着きながら次すべき事を考えた。が、考えるより先に訓練された体が動いていた。

繰り返しした訓練は、僕の口を借りてすらすると次にすべき事を指示させる。。

「これよりアイロナーはスリングにて座席を作成！テーブルはそ

の補助に入る！ピクサーはカラビナの設置補助！」

「りよ、了解」

伊藤っちゃんはブレーキを駆りながらハーネスに吊るした予備のカラビナを外す。

「……くそう、結局、何やっても俺は中途半端なのかよ」

水下が悔しそうに泣いていた。

パニックに陥ったんじゃない。

こいつは自分の努力が、たった一つの事故で無駄になった事に泣いているのだ。

僕は知っている。

水下はいい加減な奴で、何事にも真面目になった事が無い奴だった。

それは水下自身もわかっていたのだろう。

だが、僕はそれでも知っていた。

あの夜のバスケットコートで水下はぼろぼろになりながらも一人で、何度も何度も這い上がった。

腕が震え、顔が血に染まり、泥だらけになりながら、それでも、頑張っていた。

それは水下の本気であり、水下はそれをこの一週間繰り返したのだ。

「水下あ！」

僕は叫んでいた。

「僕は言っただろう！水を信じてるって！お前の技術にはミスは無かったし！手順、スキルにもミスは無い！今のは事故だ！単なる

事故だ！まだ誰も死んでない事故だ！」

僕の口から出てくる言葉は思考で編み上げられたものじゃない。
ゆえにそれは僕の本心だった。

「僕は信じてるからな！こんな事故にあっても、なお、僕らにはそれをどうにかできるだけの訓練をしてきた！それだけの技術を身につけたんじゃないか！お前は誰よりも頑張ってたじゃないか！絶対生きて帰る！」

水下が泣きながら咆えた。

「ウアアアアアアアアアアアアアア！」

水下は叫びながらも、自分の肩にかけたスリングを解き、自分の腰に巻きつける。

僕はスタンスを広く取り、水下が作業し易いようにしてやる。

水下は恐慌に陥りながらもハーネスを手早く外すと、座席を作り始めた。

何度も繰り返し編んだ座席はしっかりと水下の腰で固定される。

水下は全体重を僕の胸に預けて座席を編んだ。

水下は取り乱してもなお、正確に座席を編みきつたのだ。座席はロープワークの中では難しい部類に入る。水下は恐慌の中でそれを成功させる事ができたのは他ならぬ水下の努力の賜物としか言いようが無い。

しっかりと固定された座席に、伊藤っちゃんから受け取った代理金具であるカラビナを固定し、それにロープと命綱を固定する。

そして、ロープと命綱の固定をしっかりと確認すると僕から離れた。

「アイロナー！復歸！」

「アイロナー復歸了解！撤収ッ！」

「撤収ッ！」

今度こそ僕らは撤収した。

水下が流した涙は風に吹かれて消えていた。

常に死と隣り合わせであるエクストリームアイロンの本当の恐怖を皆は初めて感じただろう。

それでも、崖を上りながら水下がふと、僕らに言った。

「…ありがとう。俺、アイロンやってよかったよ」

それは僕らの心に、確かに響いた。

第4章 『アイロンと海』

「先輩い。辛いですう」

二ノ宮がもこもことした人形の中で悲鳴を上げていた。

「エクストリームアイロン…いえー」
「いえー！」

そう、熱い。僕も溶けそうな意識をなんとか繋げながら二ノ宮を励ます。が、その励ましにもいつもの覇気がなかった。

もうすぐ、七月を迎えようとしていた。

アイロンと出会ってから駆け抜けるように春を終え、僕とアイロン部は熱い夏を迎えようとしていた。

一学期の期末テストもなんのその、記憶の隅に押し込むと、まるでそんな事など無かった事にして僕はアイロン部の更なる発展の為に活動をしていた。

電気屋の家電販売コーナーで僕はアルバイトを兼ねてエクストリームアイロンをしていた。

象を模したイメージキャラクターのぬいぐるみを着てアイロンをかけていた。

人ごみのなかで注目を浴びアイロンをかける事は、酷い羞恥の中という極限の状況でのアイロンかけという事で、エクストリームアイロンの一つの形態として成していた。

逆に言えば普通じゃない場所でアイロンをかければそれがエクストリームアイロンになる。

まあ、いわゆる、店頭デモでかけるアイロンは初歩的なエクストリームアイロンである。しかも、部費も稼げて丁度いい。

アイロン部は正式な部では無いので当然部費等無い。だが、アイ

ロン部の総意として絶対に夏合宿はしたい。いや、しなければなら
ないという事で、皆でその費用を稼ぐ事にしたのだ。

僕はふらふらで倒れそうな二ノ宮の背中を軽く叩くと、新たに
部の装備として購入した無線機のマイクで励ます。

「二ノ宮、頑張れ。今日の汗は明日の糧になるんだ。一緒に夏
合宿行くぞ」

「……はい！一緒に、合宿了解ですっ！」

何故だろう。二ノ宮が急に元気を取り戻した。

無線機マイクから外部マイクに切り替え、くるとまわりなが
らコマーシャルを再開する。

「はい！これが、ナソナルの新製品！強力スチームミストのN
I232！ニクロムメッキの新ミラーマジで今までの二倍のすべり
に！コードレスで使い方簡単！綺麗なクリスタルグリーンと、可愛
いジュエルピンクの二つの色が選べるよぉ！」

演技がかった声で通りすぎる客を集める。

そして、アイロン台にシャツを載せ、その上で軽快に滑らせる。

「ほら、シャツの上でアイロンが踊りながら皺をとっていきます
よぉ！」

ぬいぐるみを着た二ノ宮の手の中でアイロンは踊り、荒れ地のよ
うなシャツの皺を純白の雪原のようにきらめきを伴う皺一つ無い生
地へと変える。

僕は通りすがりの子供に蹴飛ばされながら、二ノ宮の手腕に惚れ
惚れとする。

二ノ宮はアルバイトが始まる前に店の人にこう言っていた。

「このアイロン台でスチームアイロンの宣伝をするなんて間違ってます。これじゃあスチームがアイロン台を抜けずシャツに戻り皺ができます。私のアイロン台を使わせてください」

そう言っアイロン台を取り替えると店の人より上手にアイロンをかけてみせた。

アイロンを丁寧にかけるという点においては二ノ宮遙はうちの部員の中では群を抜いていた。

家が本職のクリーニング屋であり、その手伝いもしているみかだっアイロンを持たせれば目を見張るものがあるが、二ノ宮はその上を言っていた。

つまり、本職のクリーニング屋より上手にアイロンをかけているのだ。

右腕、左腕、右ヨーク、左ヨーク……ワイシャツの袖のポケットも流れるようにアイロンが滑っていく。

僕や伊藤っちゃんが半ば力任せにアイロンをかける中、やはり、女の子。シャツというスケートリンクの上を走るフィギアスケートのようアイロンが舞う。

程なくシャツには魔法がかけられ、皺がなくなると、綺麗に畳まれた。

その惚れ惚れするようなシャツはえてしてアイロンの性能ではなく、それを扱う者の日々の研鑽に裏打ちされた技術、そして、アイロンより熱い情熱が織り成す芸術である。

だが、二ノ宮の魔法を、魔法使い二ノ宮が手にした魔法のアイロンによるものと誤信したお客様は、その魔法のアイロンを手に入れようと財布を次々に開く。

あっという間にデモ台の上にあったアイロンの箱は飛ぶように売れてゆき、程なくして、僕らは交代に来た水下と伊東っちゃんに後を任せて倉庫に引っ込んだ。

「ふぁー、疲れましたね」

「ぬいぐるみって暑すぎるんだよな」

僕と二ノ宮は段ボール箱が山積みになされた倉庫の中に設けた仮設休憩所のパイプ椅子に座り、一息つく。

ぬいぐるみを脱ぐと僕は汗でシャツがグッショリと濡れているのに気がついた。

「先輩、タオルです！」

「ん、ありがとう」

二ノ宮が冷えた水を含んだタオルを手渡してくる。二ノ宮は凄気の良い子でこういう心配りも忘れない。

また、手渡してくれたときの笑顔もどきとする程可愛い笑顔で、無防備に近づいてくるもんだからどきまぎする。

バスケット部に居た時とは違い、凄い活発になった。それは二ノ宮に以前と違う魅力を与えていた。

「先輩、何か飲みます？」

「いや、いいよ。それより二ノ宮凄いな。僕や伊東っちゃんじゃあれだけ綺麗にシャツにアイロンをかけられないよ」

ちなみに、皺取りランキングをうちの部でつけるとするならば、二ノ宮の次に来るのは意外や意外、水下で、その次にみか、伊東っちゃん、残念ながら部長の僕は一番皺取りが下手である。

褒められて二ノ宮が嬉しそうに笑う。

「体力はやっぱ負けちゃうから他で頑張らないと悔しいですか
らね」

僕と二ノ宮は少し、その場で息をつき休む事にした。
ふと、二ノ宮が僕に聞いてくる。

「先輩、金井先輩の事、どう思います？」

僕はみかの話の思い出し、少し言葉を選ぶ事にした。

「うーんと、まあ、腐れ縁なのかなあ。ちっちゃい頃から一緒だし」

「でも仲、いいですよねえ」

「まあ、そう見えても仕方ないよ」

僕は当たり障り無いように答える。

二ノ宮がいたずらめいた笑みを浮かべて僕を見る。

「じゃ、私はどうですか？」

「え？……うーん」

流石に少し考える。

確かに二ノ宮は可愛いし、彼女にしたいと目論む二年生、三年生も多い。

現に二ノ宮目的で入部してきた学生も何人かは居たがとてつもなくハードな練習と、二ノ宮以下の体力であることで男としての自尊心を碎かれ次の日には来なくなる。

そんな子にまあ、曲がりなりにも好意を寄せられているというのはある意味、凄い僕は幸せ者なのだろう。

そういえば激しい練習と言えば伊東っちゃんはよく辞めないよなあとも思う。何か理由があるのだろうか、今度機会があれば聞いてみよう。

僕の思考が関係ないところに入り込むと、二ノ宮が痺れを切らして身を乗り出してきた。

「先輩？」

ふと、汗でシャツが張り付き女の子の生々しいラインが浮き出ている二ノ宮を目の前に来ており、女の子特有の清潔で、だけど、扇情的な匂いを嗅いで心臓が跳ね上がる。

「ああ、あ、可愛いんじゃないかな？」

「……本当にそう思ってます？」

二ノ宮は僕の返答に至るまでの長かった沈黙で、可愛いという表現を嘘と取ったのか顔を膨らまして身を引いた。だが、その仕草もまた、可愛い。

「最近筋肉ついてきたからなあ。やっぱり筋肉質の女の子って可愛くないかなあ」

「贅肉がついてるよりいいじゃないか。女の人の筋肉って逆に体が締まって見えるから僕は好きだけだなあ」

「本当ですか！」

二ノ宮はぱつと顔を輝かせる。

「大丈夫だって。二ノ宮は自信もって大丈夫だと思うよ」

「先輩にそう言われると自信持っちゃうなあ」

二ノ宮はそんな事を言って僕の隣に椅子を引き寄せる。

バスケットの時と違って二ノ宮は積極的になった。正直困るくらいに。

「あ、そろそろ交代の時間だ。行かなきゃ」

「えー。もうちょっと先輩と二人で居たかったのに」

「また、さっきのように頼むよ。今回のエクストリームアイロンじゃ二ノ宮だけが頼りだ」

「エクストリームりょーかいです……今度、先輩のシャツもかけたげますか？」

「機会があれば頼むよ」

「期待してますから」

気恥ずかしさを覚えるような事を言いながら二ノ宮はぬいぐるみを被る。

いつか、二ノ宮のアイロンをかけた皺の無いシャツを着る事があるのだろうか。

逆に、二ノ宮が僕以外の人と付き合つて皺の無いシャツを他の男に手渡す姿を想像すると、ちょっと悔しくも感じながら僕はぬいぐるみを被った。

まずは夏合宿だ。あのエクストリームアイロンは絶対に夏のうちにやらなければならない。

「エクストリイイム！アイロンッ！イヤアアア！」

波のしじまを、迸る咆哮が打ち消す。

サーフボードの上に固定されたアイロン台に乗った水浸しのシャツの上、水下はアイロンを押し当てて叫んでいた。

水下は去年の夏からサーフィンをはじめており、僕らの誰よりも早く波を捕らえ、波の上でアイロンをかけていた。

水下の横では、これでもう六度目になるが、伊藤っちゃんがサー

フボードの上から投げ出され、海中に沈む。

「遠藤お！」

「水下あ！」

僕は慣れない操作で水下のサーフボードの隣に位置づけると、アイロンを水下に伸ばす。

水下はシャツを乗せたアイロン台を僕の方に突き出し、僕のアイロンがシャツの上に押し当てられる。

「アイロン！イヤアアアア！」

「イヤアアアア！」

海岸では水着姿の二ノ宮がカメラのシャッターを切りながら僕らに手を振っている。

僕はそれに手を振って返そうとして、バランスを崩して海に落ちた。

僕が水面に顔を出すと、水下が僕の方を見て笑っていた。

そう。僕らは海に来ていた。

夏合宿と称し、あの、エクストリームアイロンをするために。

合宿初日、僕らは先生の車に必要な装備資器材を載せ、海に来た。資器材を宿泊先であるペンションに置くと、初日くらいは海で遊ぼうという事で海に遊びに出た。

そこで水下が

「せっかくだからサーフィンでやらねえか？アイロンを」

と言ったものだから、僕や伊藤っちゃんは二つ返事で頷くとサーフボードをペンションで借りた。

経験のある水下にサーフィンを教わると、僕らは早速それでエク

ストリームアイロンをやっていた。

一旦、昼を食べるのに陸に上がる。

僕はペンションのシャワー室から出ると、バスタオルで体を拭きながら部屋に戻ろうとする。明日のエクストリームアイロンの為、もう一度プランを見直さないとけない。

その時、たまたま伊藤っちゃんの部屋のドアが開いていたもんだから僕は中を覗いて見た。

さすが、北星学園一の秀才。ここに来てなお、参考書を開き、ノートにシャープペンシルを走らせていた。

「伊藤っちゃん、勉強？」

「あ、部長。お構いなく」

「いや、凄いなあ。やつぱこう普段からの努力が伊藤っちゃんが北星学園で一番という地位を築いているんだろうなあ」

「あはは、流石に一学期は九番に落ちましたけどね」

それは初耳だった。

「ちよつと親の方からも発破かけられて、少し勉強しとかないと危ないなあつてのが本音です。まあ、一応受験生ですから」

伊藤っちゃんは屈託無く笑う。

「でも、アイロン部だと勉強する時間ってあんまし取れないんじゃないですか？」

ちなみに、僕と水下の期末試験の結果は酷い事になっていた。

「そうですね。でも好き好んでやってる訳ですから。自分でやってることのツケくらいは自分で払わないと」

伊藤っちゃんが言うのと嫌味なところがまったく無い。勉強はできるがそれを鼻にかけるところがないから、僕は好きだった。

水下と正反対のような性格だが、実は意外に水下と伊藤っちゃんは凄いい仲がよかった。

「そういえば、伊藤っちゃんはアイロン部になんで入ろうと思ったん？」

伊藤っちゃんはシャープを止めて考える。

「そうですねえ……ぶっちゃけ、勧誘のチラシ貰ったとき、馬鹿だなーと思ったのがきっかけですね」

「馬鹿とは失礼な。正論過ぎて反論できないのが痛いけど」

あのチラシは今でも金井クリーニングの壁に貼られており、僕らが活動すればそれに伴い最近はそのバリエーションも増えた。

伊藤っちゃんは苦笑する。

「でも、楽しそうだったと思っただですよ。だってそうでしょう？あんな命懸けのありえない場所でアイロンをかけるんですよ？一度、自分もそんな馬鹿をやってみたいと思っただのが動機ですかね？」

「そうですかー」

僕は頷いた。その時、丁度水下が僕らに気づいて入ってきた。

「伊藤っちゃん？何勉強なんてしてるの？海だよ海。参考書間違ってるよ君？」

「いやいや、水っちゃんコレ僕の本業」

「いやいやいや、認めないよ。さ、水着娘ナンパしに行くよ水着

娘。今日くらいは楽しもう」

伊藤っちゃんを無理矢理引つ張っていきそうな水下に僕は苦笑しながら言う。

「伊藤っちゃんは僕らと違って受験生だから」

「あーなら尚更息抜きしなきゃ。遠藤も来る？ナンパ」

「僕は明日の調整を先生とすつから後で行くよ」

「そか！金井と二ノ宮が怖いもんな！」

水下は僕の肩をバンバンと叩くと伊藤っちゃんを引きずっていく。僕はその後姿を見ながら部屋に戻った。

僕は鞆の中から計画書を取り出すと先生の部屋を尋ねた。

先生は部屋の中で、学校の残務をしていた。

先生は僕を認めると机の上のファイルを片付ける。

「先生、明日のプランなんですけど……」

「おお、それで俺も話があった」

僕らはそこでしばらくプランについて話を煮詰める。

だが、もともと夏休み以前から立てたプランなのであまり変更するところも無くその話も終わった。

「しかし、遠藤も一気に成長したな」

嶋本先生はタバコを口に咥えると火をつけながらそう言った。

「俺と初めて会った時の駄目人間が今じゃこうしてアイロン部として部長してんだもんな」

「先生がエクストリームアイロンなんて馬鹿なスポーツを僕に教

えるからっスよ」

「俺もまさかお前がここまでのめりこむとは思わなかった」

「まさか、自分もここまでエクストリームアイロンにのめりこむと思わなかったスよ」

嶋本先生は苦笑した。

「アイロン楽しいか？」

「生きているって感じがしますね」

僕は照れずに答えた。

「どうしょうも無い危険な場所やありえない場所に居てアイロンかけてると、何でこんな事してんだろっていう馬鹿さ加減と、こんな馬鹿してるの自分達くらいなもんだろって考えると楽しいですね」

「馬鹿を一緒にやってくれる仲間もできたしな？」

僕と嶋本先生は目を合わせて苦笑する。

僕は嶋本先生に前から聞いてみたい事があった。

「嶋本先生はどうして僕にエクストリームアイロンを教えてくださいたんですか？」

先生は難しい顔をして少し考えた後に答えた。

「昔の俺に、似ていたからな？」

「昔の嶋本先生にですか？」

「俺、昔レスキューやってたって話、しただろっ？それ自体はとて誇りのある仕事だったんだけど親が先立って、自立してない兄

弟の面倒を見るのに里に帰らなきゃなんなくなつて辞める事になつたんだ」

先生は苦笑していた。

「大学に居た頃に教職免許だけは取つていたから教壇に立つて兄弟食わして、その兄弟がなんとかなつた頃には、もう、やる気がなくなつてたんだよな」

「レスキューを辞めたからですか？」

「お前もわかるだろうけど、苦楽を共にした仲間は下手な家族より信頼できる生涯の家族だ。それを全部捨ててきた後悔もあつたんだろう。先立つた両親を恨むのもどうかとは思うが、まあ、色々ごちゃごちゃした感情があつたのは事実だ」

嶋本先生はタバコを灰皿に押し付けると冷蔵庫からビールを取り出した。

僕にも一本渡して、蓋を開ける。

「嶋本先生」

「未成年だろうと構うものか。お前はそんじょそこらのレスキュー隊員よりも使える。その手の職業なら食つてける。だから大人だ」
「んな無茶苦茶な」

僕に構わず、先生はビールを煽ると話を続けた。

「それでよ。兄弟が自立した後、一旦、教壇を退いてだな。イギリスに留学したんだよ」

「イギリスですか」

「ああ。そこでよ。英語を勉強してたらよ。そつちでできた俺の友達が、一彦はガッツがないとか言つてきて俺にアイロンとアイロ

ン台を持たせやがった」

そう言って苦笑する。

「で、お前と一緒に崖の上から突き落とされた。それが俺とエクストリームアイロンの出会いだな」

「そうだったんですか……」

「だから俺もお前をみた瞬間、アイロンとアイロン台を持たせて崖から突き落としてやろうと思ったんだよ！」

嶋本先生が僕の首を太い腕で挟み込み、頭にビールの缶をぐりぐりと押し付ける。

そこにやってきたのはみかと二ノ宮だった。

二人とも妙に気合の入った水着を着ている。

「あー！真一はっけーん♪」

と申し立てるは扇情的な赤のビキニの金井みか嬢。

「せんぱーい！海行くよ！海！」

と申し立てるは清楚な白のハイレグの二ノ宮遙嬢。

二人は僕の腕を引っ張ると嶋本先生から引き離れた。

「先生真一借りますねー！」

「せっかく海に来たんだからエクストリームアイロン以外でも遊びましょー♪」

「おう、気をつけろよ」

先生が苦笑する。

僕は竜巻のような勢いの二人に引きずられるようにして海にまた行く事になった。

昼は海で散々遊びつくし、夜は砂浜でバーベキューと洒落込んだ。先生は昼間の酒が抜けてないのか皆にビールを振る舞い、二ノ宮に酒を買ってこさせる始末である。

皆、程よくアルコールが回ると、途端に馬鹿になる。アルコールが人生を駄目にするとの格言があるが、それは、飲んだその場で人間が駄目になるからだろう。

「私、二ノ宮遙わぁ！遠藤真一に一言物申す！」

「私、金井みかわぁ！遠藤真一に一言物申す！」

「私、伊藤新吉わぁ！遠藤真一に一言物申す！」

「私、水下学わぁ！遠藤真一に一言物申す！」

この後、ミーティングをしようと思った僕はアルコールをセーブしていた事からまだそんなに酔っておらず、彼らの格好の肴となっていた。

「部長のいいとこ見てみたいいい！」

二ノ宮が叫び、それにみかが続く。

「男遠藤頑張ります！」

次いで伊藤ちゃんと水下が続く。

「エクストリイイイイム！」

「イツキでイエEEEE！」

皆に羽交い絞めにされ、無理矢理ビールを口の中に流し込まれる。みんなとこうやって馬鹿な事ができるのもあとどれくらいなのだろうか。

「先輩愛してまーす！」

「部長愛してまーす！」

ごろごろに絡まりあい、もみくちゃにされながら僕の意識も酔いの中に落ちてゆく。

まどろんでいく意識の中、僕はふと、この連中といつまでもこうした馬鹿をしていたいと思い、それが叶わぬ事と思い少しさびしくなった。

遠くで先生が僕らを見て苦笑している。

いつかは僕らも大人になってこの時の事は、こんな馬鹿をしたなと笑う、思い出と変わるのだろう。

ただ、でも、今はこの瞬間を大事にしようと思った。

「水下あ！俺もお前を愛してるぞー！」

僕は飲んだ勢いで水下に口づけし、ビールを水下の口の中に流し込む。

「先輩私もあ！」

「遙は私があ！」

止む事の無い喧騒の中。

高校二年生の夏、アイロンと出会っていた僕は誰よりも充実した青春を送っていたに違いない。

僕が目覚めたのは自分の部屋のベッドの上だった。
頭が割れるように痛い。時計の針を見ると十時を過ぎたあたりを
指していた。

「お、気がついた」

ベッドの横にはみかが座っており、僕を笑っていた。

「あれ？みんなは？」

「先生が運んでったよ？今頃自分の部屋で寝てるんじゃないかな
？」

「お前は大丈夫なのか？」

「私は大丈夫なんだな。だから、真一に悪戯しに来た」

僕はそのそと起き上がる。

「あー、まだ、頭がぐらぐらする」

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ、ちつくら外でも散歩するか？」

「うん。そのツモリで来た」

僕はテーブルの上にあったパーカーをシャツの上から羽織るとみ
かと一緒に夜の浜辺を歩く事にした。

夜の浜辺は昼の喧騒がまるで幻だったかのような錯覚を覚えるほ
ど、静かだった。

闇色のキャンパスに散りばめられた宝石箱の中身のような星空が
投げかけるやわらかい光の中、潮騒の音が静かに響く。

みかは僕の後ろをゆつくりとついてくる。

「なんか、楽しいね」

「そうだな」

「こんな馬鹿やれるの今のうちだけなんだろうねえ」

「来年になったら僕らも伊藤っちゃんみたく受験だからねえ。こんな事もできなくなるよ」

「伊藤っちゃん、凄いいねえ。受験生なのにアイロン部の訓練してるんだもん」

「そうだよな。成績も下がってるみたいだし、大丈夫なのかなあ」

「でも、うちの学校推薦枠も強いから伊藤っちゃんは推薦で大学行くんじゃないかな？前にそう言ってたし」

「そうなん？」

知らなかった。

「真一は大学どうするの？」

「一応、親には進学するように言われてるからね。考えてはいるよ」

「まだどこに行くかは決まってないんだ？」

「まあ、そうなるね」

僕はばりばりと頭を掻く。

今が面白いから将来の事を全然考えていない。自分で言うのもなんだが、まずい兆候だ。

「ところでみかは大学どこに行くか決めたの？」

「ううん。まだ」

「そっか、みかは僕と違って頭はいいからどこにでも行けるだろう？」

「それが、最近アイロン部のせいで勉強してないから成績下がってばなしなのよ。どうしてくれるのさ、アイロン部部长」

「知らないよ。そんなの自分の責任じゃないか」

僕は苦笑する。

ふと、みかが僕の側に寄ってきた。

「ねえ、真一、遙の事、どう思う？」

「積極的だよな？可愛いし」

「そっか……じゃあ、私は？」

「珍しいな。お前がそんな事僕に聞くなんて」

「……そっかな？」

「今まで聞かれた事ないから考えた事ないなあ」

「……そっか」

みかは少し寂しそうにそう、呟いた。

みかは僕のパーカーの袖を引っ張ると砂浜に座ろうと小さく言った。

僕はそれに促されるまま、座った。

みかは星の海と交じり合った水平線を眺めながらポツリと呟いた。

「綺麗だね。なんだか、ドラマのワンシーンみたい」

みかは目を細める。

「なんだか、隣に居る真一が格好よく見えちゃうし」

「もとから格好いいだろうに」

「アイロンかけてる時は見てて面白いけどね」

「言っただけ」

僕はみかを軽く小突く。

みかは小さく舌を出して笑った。

僕は星の光に揺れては返す海を見ながら、その先に自分の行く道を見つけられず少し不安になった。

みかが僕の方を見つめて、形のいい唇を開いた。

「ねえ、真一……」

僕は、叫んでいた。

「ワアアアアアアアアアアアアア！」

みかが驚いて目をぱちくりさせている。

「何か、叫びたくなった」

みかは少し、残念そうな苦笑を浮かべたが、立ち上がって海に向かって叫んだ。

「真一の馬鹿やろおおおおおおお！」

僕も立ち上がり叫ぶ。

「みかのおんぼんたああああああん！」

「アイロン部さいこおおおおおおお！」

「エクストリムアイロニーエエエエエエ！」

「イエエエエエエエエエエ！」

僕らは見つめ合うと心の底から笑いあった。

少し気恥ずかしい気がしたが、それでも今はこんな時間を大切に

したかった。

僕らはペンションに戻る事にした。

みかがそつと僕の手を握る。

僕はみかのその手を握り返す。

やわらかく、気持ちのいい時間が過ぎていく。

ただ、そんな時間は長くは続かなかった。

ペンションに戻ると、水下が知らない男女二人に怒鳴っていた。

ペンションのロビーで二人の男女と水下、伊藤ちゃんが対峙して何か揉めているようだった。

「はあ！だからあんたら何言ってるの？」

四十台半ばだろうか、品のよさを感じさせる夫婦だろう。その夫婦が顔に少し怒りめいた色を浮かべ、完全に顔を怒らせている水下を睨んでいた。

水下の後ろには伊藤つちゃんが複雑な顔をして立っている。

僕とみかは状況がわからずばかんとしていると、水下が口早にまくしたてた。

「伊藤つちゃんの親だかなんだか知らないけど、何？部活やめて戻って来いってあんた一体何様なのさ？伊藤つちゃんは好きでここに居るんじゃないか。別にここの旅費だってあんたの金じゃねえんだから何も言われる筋合いねえぞ」

「水下君、いいよ。これは僕の問題だ」

「だけだよ！」

「ありがとう。でも、いいんだ」

伊藤っちゃんが水下の肩を掴み、静止した。

その夫婦は伊藤っちゃんが水下を止めると堰を切ったようにまくし立てはじめる。

「新吉。お前は今こんなところで遊んでる場合じゃないだろう？
今、自分がどんな時期にあるか考える。大学に行くんだから大学に行った先を見据えて勉強しなきゃならないだろう」

「そうよ。新吉。あなた聞けばとても危険な遊びをしてるみたいじゃない。怪我でもしたらどうするの？将来はうちの病院を継いで貰うんだからしっかりしてもらわないと。今からでも遅くないから夏期講習に行きなさい」

どうやら二人は伊藤っちゃんの両親みたいだ。

伊藤っちゃんは僕とみかを見つけると少し気まずそうに頬を掻いた。

「見苦しいところを見られましたね」

「どしたの？」

「うちの両親が今頃になって予備校の夏期講習に行けと言っんですよ。僕は前に断ったんですけどね」

伊藤っちゃんがそう言うと、伊藤っちゃんの父親が怒鳴る。

「私はそれを認めてない！」

伊藤っちゃんは苦笑する。

「父上。僕はずっとあなた達の言うとおりにしてきました。あなた方の望む結果を出すため、勉強し、大学も推薦で入学をできるだけの物を得ました。無論、大学に行った後もあなた方の望むように

医者になるための勉強をするツモリです」

伊藤っちゃんの母親が眉を吊り上げて怒鳴る。

「なら、なんで夏期講習に行かないの？言ってる事が無茶苦茶じゃない」

「でも、今はアイロン部としての活動を認めて下さい」

伊藤っちゃんはきっぱりと言った。

しかし、伊藤っちゃんの父親が黙っていなかった。

「そんなに遊びたければ家を出て行け！お前のような親不孝者は帰ってこなくていい！それでいいんだな！」

「あなた。新吉にそこまで辛く当たらなくても……」

流石にこれには母親の方が父親を諫めていた。だが、伊藤っちゃんは涼しい顔で言った。

「いいですよ。父上。僕もしばらくは戻りません。それでいいですか？」

「新吉！」

母親が伊藤っちゃんを諫めるが、父親の方が母親の腕を引っ張ってペンションを出て行く。

「行くぞ」

「あなた……」

立ち去っていく二人の後姿を眺めながら伊藤っちゃんはため息をついていた。

そして、両親が居なくなると僕らに対して苦笑した。

「すみませんね。少々過保護なところのある親ですから」

「伊藤っちゃんはこれでいいのかよ？」

水下が心配そうに伊藤っちゃんに尋ねる。

「まあ、仕方ないですよ。アイロン部でいくら頑張ったところであの人達が僕に求めているものとは全然違うんですからね」

「でもよお」

「僕はね、今までずっとあの人達の言いなりになってきた。勉強だつてずっと一番であり続けたし、望みの大学への進学も決めた。だから、ここに来て僕は自分でやりたい物をみつけようと思ったんですよ」

伊藤っちゃんはロビーにある椅子に僕らを座るよう指示し、また、自分も腰掛ける。ぽつりぽつり、と語り出す伊藤っちゃんの顔には何か吹っ切れたような爽やかさがあつた。

「はじめは親に対するささやかな反抗のツモリだったんですよ。辛い訓練も親への面当てと考えれば全然苦にはなりませんでした。ところが、やってるうちに段々面白くなってきましてね。みんなと馬鹿やってるのが凄く楽しくて仕方が無い」

だが、水下はあくまで伊藤っちゃんを心配する。

「でも家を勘当されて大丈夫なのか？」

「そういえば今まで一度も自分の親に対してわがままつてのを通した事無かったですね……こういうのも結構いいもんですね」

伊藤っちゃんはまだで人事のように笑う。

水下が頭を抑え、ため息をつくと呟く。

「ったく、伊藤っちゃんも無茶しやがんな。合宿終わったらどうすんのよ？」

「まあ、バイトで稼ぎながらサウナでもはしごしますよ」

「……そんなだったらウチに来な？うちはオフクロに捨てられたダメ親父しかいないからどうにでもなるし」

「いいんですか？」

「放つとけるかよ」

水下が照れくさそうにそっぽを向く。

こう見えて水下は仲間思いのいい奴だったりする。フォースレスキューを抱えたランニングで二ノ宮や伊藤っちゃんがドロップアウトしそうな時、真っ先にフォースレスキューを代わりに持ってやるのが水下だった。

水下が言わなければ僕が伊藤っちゃんを引き受けると言おうとしたが、大丈夫のようだ。

こういつとき本当に思う。

中途半端な友情より、一緒に苦渋を舐めた者同士の連帯は、何よりも強い。

「これから、今回のエクストリームアイロンのプランについて説明する」

次の日の朝、二日酔いで頭痛を訴える二ノ宮や嶋本先生を無理矢理僕の部屋に連れてくると、みか、水下、伊藤っちゃんを交えて今回のエクストリームアイロンのプランについて説明する事とした。

「今回のエクストリームアイロンは海中エクストリームアイロンだ」

「海中って……水の中？」

「そうだ」

みかが不思議そうに僕を見つめる。

「でも、海の中だとアイロンに熱がこもらないんじゃない？」

「うん。僕もその点を調べて回ったんだが、その場合、アイロンで力一杯プレスする事によってシャツの皺は伸びるんだ。自宅の風呂場で実施して確かめたから間違いない」

「間違いなく、もう一度洗濯が必要だね」

「問題はシャツの皺ではない。海中でアイロンをかけるという事だ」

僕はみかの突っ込みを軽く流すと、自宅から持ってきたホワイトボードに計画を書いた。

「今回はレンタルで借りたボートに装備を積み込み、エントリーポイントまで行く」

僕がこの付近の海岸図を描き、エントリーポイントをバツで示す。エントリーポイントとは海中にダイブする地点の事を言う。

「今回は水深二十五メートルのポイントで実施する。本来なら公式記録に挑戦するためにも四十メートル以下でチャレンジしたいところだが、僕らには十分な訓練を積めるだけの時間が無かった。正直、二十五メートルでも危険なチャレンジである事には変わらない」

僕はバツの横に二十五と書く。

「今回の活動域は二十五メートルでの活動となるから、減圧停止を要しない限界潜水時間は二十五分となる。今回は限界時間を使って実施する。それ以上の活動となった場合は水深五メートルの地点で減圧停止時間を五分設ける事とする」

「なら、潜行、浮上にかかる時間も勘案すると、約十八分の活動ですね」

「減圧停止はしないが、安全停止は一応しよう。安全停止時間を含めると十五分弱と考えた方がいい」

伊藤ちゃんが自分のダイブテーブルの中にスケジュールを鉛筆で書き込む。

「先輩、反復潜水は実施するんですか？」

「潜行から三時間の休憩後反復潜水を実施する。その時はそうだな……同じく二五メートル地点において二十分の活動にしよう」

「了解」

みんな自分のダイブテーブルにスケジュールを書き込む。

「アイロンとアイロン台は各自で把持していく。カメラはバディで一台持つて行けば交互に撮影できる。問題は……」

「誰と誰がバディを組むかだろ？」

嶋本先生が腕組みして考える。バディとはダイビング中におけるペアの事で、海中でトラブルがあった場合、このペアに助けを求めたりする。

「俺がダイブマスターだから俺が一番経験の少ない奴と組むとし

て……金井を除いて俺、遠藤、伊藤に水下、二ノ宮でバディを組むと一人余る。誰か一人にボートで残ってて貰わなきゃならない」

それが一番酷だった。みんなこの夏合宿恩このエクストリームアイロンのためにアルバイトし、過酷な訓練に耐えてきたのだ。それをボートで待ってるなんて酷くて僕はとても言い出せなかった。

僕はこの時まで、反復潜水時に誰かと代わろうと考えていた。

「それなら私が加わればいいんじゃないですか？」

その時、みかが手をあげた。

「馬鹿。水中は危ないんだぞ？水圧による身体への影響にしたって、正確な知識が無いと危ないし、スキューバの装備だって正確に扱えないといざというとき、誰も自分を助けてくれないぞ？」

「知ってるわよそれくらい。一応、ナウイのオープンウォーターの資格はあるんだから」

みかは胸を張って答える。

皆が驚く。ナウイとは、スキューバダイビングの資格認定機関の一つで世界的に認められている機関である。

オープンウォーターとは一番最初の段階の資格であるが、基本的な装備の扱いやプールでの講習、海洋講習を経なければ獲得できないものである。ちなみに嶋本先生はナウイのダイブマスターの資格を持っている。

「いつの間に取ったんだ？」

「あんた達が夏合宿って言うてるから次はダイビングだなーって思っで、こっそり資格取りに行っただの。一度、エクストリームアイ

ロンやってみたかったし。ちなみに、BCとかも全部一式、揃えて持ってきてるから大丈夫」

「用意周到だな……じゃあ誰が誰とバディを組むかな……」

みんなが顔を見合わせる。

二ノ宮が手をあげる。満面のどこか悪戯めいた笑みを浮かべている。

「えっと、水下先輩と伊藤先輩は体力的、技術的にも同レベルなのでペアで組んでもらって、技術的に余裕のある部長と先生に女子のサポートに回ってもらった方がいいと思います」

「なら、真一と組もつかないかな？……オープン取ってるから一応、技術的にも余裕あるし」

みかがそう言った時、二ノ宮が首を振った。

「金井先輩、ナウイでオープン取っているとはいえ、その他の連携とかでまだアイロン部とは余裕が無いと思うので先生と組んだ方がいいんじゃないですか？私が遠藤先輩と組みますよ」

ぴしりと空気が軋んだ気がした。

みかが笑顔を作る。それも、どこか怖い笑顔だ。二ノ宮も白々しい笑顔で応ずる。

「大丈夫よ。海洋での実施経験は遙よりかはあるから。遙こそ先生と組んだ方がいいんじゃない？」

二ノ宮も頑として譲らない。

「いえいえ、やっぱりアイロン部として先輩は譲れません」

もう、理屈にすらなっていなかった。そのやり取りを見て嶋本先生が苦笑する。

「よつし、じゃあ、遠藤、お前が選べ」
「ええ！」

僕は顔一杯に困惑の色を浮かべているのだろう。水下と伊藤っちやんがニヤニヤと笑いながら僕を見ている。

一方、二ノ宮は「もちろん私ですよ」と今にも言わんばかりの顔で僕を見てるし、みかは無然としながらも自分を選ぶように僕を睨んでいる。

僕は助けを求めるように水下に視線を送ったが、水下は相変わらずニヤニヤ笑いながら

「遠藤はモテるねえどっち選んでも苦しいんだから自分の好きなようにしろよ」

なんて言いやがった。
僕はどうしようか迷った挙句。

「じゃあ、二ノ宮が僕のバディだ」

と答えた。

「やったあ！」

と喜ぶ二ノ宮。一方、みかは表情に驚きを隠せないでいた。

「……水中はとても危険だ。だから、なるべくなら万全の状態で

望みたい。特に二ノ宮はハイパーベンチレーションの気が多いし、エアも多く使うからいざというときエアの使い方の上手な僕が近くに居る方がいい。それにみかは正直どのくらいの技術があるかわからないから先生の側に居る方がいい」

「……了解」

みかは納得いかないような表情で俯いてしまった。僕はちくりと心に痛みを感じた。

だが、それとこれとは話が別。命懸けのスポーツに私情は挟まない。

「……いいかな？じゃあ、出発は十時、それまで各自ウェットスーツ、BC、レギュレーター、ダイブコンピューターのチェックをしておく事。あと、体調が優れない、副鼻腔に異常を感じる者はすぐに申し出る事。でないと減圧時に鼻腔が破裂して血だらけになるからね」

「了解」

「よっし、解散」

僕は早速準備に取り掛かった。

ボートでエントリーポイントに到着すると僕らはお互いの装備をチェックしあった。

浮力調整装置であるジャケットタイプのBCを着てポンペを背負う。

レギュレーターの残圧計を確認し、お互いの装備に不備が無いか確かめる。

みんなの装備が整ったのを確認すると僕はみんなを集めた。

「集合！」

「了解！」

そして、僕は一同を集めると号令を飛ばす。

「これよりエクストリームアイロンを実施する」

「了解！」

もはや儀式のような物だが、これは号令する方も号令を受ける方も気が引き締まりまた、気分も高揚する。

「バディの確認！水下、伊藤！」

「水下了解！」

「伊藤了解！」

水下と伊藤ちゃんが鋭く答える。

「嶋本、金井！」

「嶋本了解！」

「金井、了解。でいいのかな……」

こういう号令に慣れていないのだろう、みかの返答だけ締りが無い。後で文句を言ってやる。

「遠藤、二ノ宮！」

「二ノ宮了解！」

「本エクストリームアイロンは水中での実施となる。各自エア残量、潜水速度、浮上速度に十分注意してくれ。各自、エキジットポイントの再確認を怠るなよ？水中ではお互いのバディから離れず

ぎないように留意、また、ダイブマスターは嶋本先生だ。バディ同士で解決できないトラブルがあればライトで知らせる事」

「了解」

「では時刻あわせ」

皆がダイブコンピューターの時計を合わせる。

「よし、各自エントリー準備！」

「了解」

皆がボートの舷側に腰掛ける。

「マスク準備！」

「マスク準備よしっ！」

皆がマスクをかける。

そして、僕が大声で叫ぶ。

「北星学園ア・イ・ロ・ン・部うう！」

「ファイっ！オウ！ファイ！オウ！」

皆が声を出し、通りすがりのヨットが好奇の目で僕らを見てくる。

「エキストリイイイイイム！」

「アイロン！イヤアアアアっ！！」

叫んで一番端に座っていた二ノ宮からドミノ倒しのように順次、エントリーしていく。

背中のタンクの重さを利用して後ろ向きに倒れるように海の中に落ちる。

海面が白い飛沫をあげて、僕らを飲み込む。

僕はレギュレーターから圧縮された酸素を大きく肺に吸い込みながら辺りを見回した。

エントリー時の気泡が僕の目の前を覆っており、その気泡が徐々に晴れていくと、そこに広がる光景に僕は目を奪われた。

海の中は物凄く綺麗だった。

空から差し込む光が、海の中を泳ぐ宝石の様な魚の体に反射し、まるで昼間の星空みたく輝き、その星の輝きが手を伸ばせば届くような位置にあった。

僕はバディである二ノ宮を見つけると、順に水下と伊藤ちゃん、みかと嶋本先生の姿を確認する。

嶋本先生が皆、居ることを確認すると親指を立て、それを下に向ける。潜行を示すゼスチャーだ。

僕らは同じゼスチャーで返し、潜行を開始する。

僕はBCのエアを抜き、浮きもしない、沈みもしない中性浮力となるように調整するとフィンのついた足で水を蹴った。

紐で繋がれた二ノ宮が僕の隣まで来て笑いかける。その笑顔が、陽光の差し込む海の中、まるで御伽噺の人魚が急に目の前に現れたようでドキツとする。

二ノ宮は紐で僕を引っ張るように海の底へ誘う。

二ノ宮は少し浮かれているのだろう。訓練の時より動きが多い。ダイビングの時はなるべくゆっくりとした動作を心がけなければならない。でなければタンクの中の圧縮酸素を多く吸わなければならない。エアの減りも早い。深く早い呼吸を繰り返す状態であるハイパーベンチレーションの状態になれば、体内二酸化炭素の量を誤り、呼吸のリズムが崩れ失神する事もある。

特に二ノ宮にはそういう悪い癖があったので僕は紐を引っ張り二ノ宮を引き寄せるとスレートにその旨を書いた物を見せ、諫めた。

二ノ宮は拳で自分の頭を軽く小突いて小首を傾げる。反省しているのかしていないのかわからないが、とりあえず理解はしてくれた

ようだ。

遠く、そんなやり取りを見ていたみかが複雑な表情をしていた。僕はみかと目が合ってしまった、同じように複雑な表情となる。

みかは僕から目を逸らすと、再び潜行を始める。僕も後を追うように潜行した。

水の中を潜って行くと、鼓膜が圧迫され、不快な痛みを感じる。専門用語で言うならスクイーズが僕を襲った。

水圧が僕らの生活するレベルの気圧を超えると体の各所に圧力がかかる。特に体の中の空洞である鼻腔、副鼻腔に圧力がかかりこれを放っておくと色々な疾病が起きる。

僕は鼻を押さえ、口をつぐむと息を強く吐く。ぷちつと耳の奥で何かが繋がるような音がした。すると耳の奥に残る不快感が消える。バルサルバ法と呼ばれる鼻腔内の圧平衡を保つ為の技術でダイビングの基礎技術である。

僕は潜行し、水圧が掛かるたび、こまめにバルサルバ法で圧平衡を保つと、ゆっくりと潜行していく。

先ほどまで綺麗な水色だった水の中は潜って行くほど鈍く暗くなっていく。日の光が届きづらくなるからだ。

そして、程なくしてそれは僕らの前に姿を現した。

一面、真っ白いどこまでも広がる砂漠のような砂の海底。小魚が白い絨毯の上で翻る。

泉に投げ込んだ銀貨が揺らめくように小魚が煌き、僕はその光景にしばらく目を奪われていた。

万物の生命が生まれた海。

その中はまるで沢山の神秘が詰められたおもちゃ箱のようだ。ひっくり返せば無限の神秘が目の前に飛び込んできて、僕らを飲み込んでいく。

ゆっくりと僕の前をウミガメが通過していく。まるで僕ら等そこに無いかのように悠然と通り過ぎる。

二ノ宮が僕の肩を叩く。僕がはっとして二ノ宮の方を向くと、二

ノ宮は防水ケースに入ったカメラを携え、僕の胸に括りつけられているアイロン台とアイロンを指差す。

そつだ。僕はエクストリームアイロンをやりに来ているのだ。

僕は海底に辿りつくと、アイロン台を設置する。

僕の周りに、みかと伊藤っちゃんが寄ってきて一列に並ぶようにアイロン台を設置すると皆がアイロン台の上にシャツを載せる。

その目の前を魚が通り、好奇の目で僕らを見て通り過ぎて行く。

僕はアイロンを手に取ると、それをシャツの上に押し当てた。

「エクストリーム……アイロン……」

緩やかな光が投げ込まれる海の底。

アイロン台に揺らめくシャツに冷え切ったアイロンを押し付け、僕は熱い感動に胸を震わせていた。

辛い訓練を経て、皆でアルバイトをして、そして、この許された者だけが踏み込む事のできる領域で僕は何をしているかというところ、アイロンをかけている。

ああ、アイロン……なぜ、こんなに僕を狂わせる……

揺らめくシャツの袖に、魚が入り込む。袖から入り込んだ魚は袖を通りぬけ、シャツの首から抜けて行く。

その様を見てシャツターを切る二ノ宮が笑う。

冷たく、鈍く光るアイロンが水の中で揺らめくシャツの上、ゆっくりと滑る。

生命の生まれたゆりかごの底でアイロンをかけるという背徳感を感じた感動が僕の胸の中で弾けていた。

僕は一通りシャツにアイロンをかけ終わると、二ノ宮と交替した。僕は海底に正座し、シャツに丁寧にアイロンをかけている二ノ宮をファインダーに収め、シャツターを切る。

二ノ宮が僕の方を見てピースをする。

僕が苦笑すると、僕の隣でみかが面白くなさそうな顔をしている。

僕はエアの残量を確認すると、先生の方を見た。先生は僕に対し頷くと浮上のサインを出した。

僕はそのサインを確認すると、皆にも同じように指示を出した。僕はアイロン台とアイロン、シャツを体にくくりつけると、若干、BCに空気を入れ浮力を得ると、早過ぎないペースで浮上を開始する。

高圧窒素が体内に残留している状態で急速浮上をすると、体の中で高圧窒素が弾け、血管の中に気泡を作る。

振ったコーラの二酸化炭素が蓋を開けた瞬間に泡を吹くのと同じ原理だ。

その気泡が血管を塞ぐと、血が頭に上らなくなり死に至るケースもある。

ゆっくりと浮上し、急に体の中で圧縮窒素が沸騰しないように留意する。

「……………?!」

皆が浮上する中、バディ同士を繋ぐ紐の先に感触が無く、僕の背中が一気に冷えた。

僕は浮上して辺りを見回す。

僅かに浮いてくる気泡を頼りに二ノ宮を探す。呼吸をしているのであれば必ず気泡が僅かであろうとも浮いてくれるからだ。

程なく、二ノ宮の姿を見つけたが、僕は心臓を鷲掴みにされたような心地になった。

二ノ宮はまるで糸の切れた人形のように水の中に漂っている。

近くによって顔を覗き込むと、目を閉じ、明らかに意識が無かった。

やばい。とてつもなく危険な状況だ。僕は早鐘のように鳴る心臓に落ち着くように命じると、落ち着いて状況を確認しようとした。マスクを外し呼吸を確認する。微弱ながら息はある。

残圧計を見てもまだエアはある。

最初はタンク異常によるエア枯渇かと思っただが違つようだ。

僕は二ノ宮のウェイトベルトからウェイトを外し、自分のウェイトも外す。

レギュレーターを二ノ宮の口に戻すと、僕は急速浮上にならない程度の、ぎりぎりの速さで浮上した。

水面に出て、二ノ宮を仰向けにし、マスクを外す。

「二ノ宮あ！」

マスクをはずし二ノ宮の頬を叩く。再度、二ノ宮の呼吸を確認するが、二ノ宮は呼吸していなかった。

すぐに脈を取る。

脈拍は確認できた。心臓は動いている。

先生や水下の姿は見えない。

遠くにボートが見える。僕はばしゃばしゃと水面を叩き、ボートに対し緊急事態があつた事を伝える。

上手に伝わっているかどうかはわからない。

だけど、今は二ノ宮を助ける事が先決だった。

マウストウマウスによる人工呼吸を訓練どおり実施しようとした。何はともあれ、呼吸が無い場合、酸素を供給してやらねばならない。

が、不覚にも二ノ宮の顔を見てしまった。

「……………」

一瞬ドキリとする。

目を閉じ、日の光を受ける水面に浮かぶ二ノ宮はまるで御伽噺のお姫様が眠っているような美しさがあった。

僕はこれから、この可憐な唇にこれから口づけするのだろうか？

二ノ宮の唇を奪ってしまっているのだろうか？

「やるしか、ねえよな」

僕は頭を振って雑念を振り払う。あくまでこれは救命行為だ。命が無ければ後で二ノ宮は怒る事もできない。

「気道確保……」

首を持ち上げ、気道を確保する。

僕は二ノ宮の鼻をつまむと、唇から空気が漏れないように、自分の唇を覆いかぶせるように二ノ宮の唇に押し当て、息をゆっくりと吹き込んだ。

二ノ宮の胸が僅かに隆起する事を視認。肺に空気が入っているのを確認し、唇を離す。

ゆっくりと胸が元に戻り、肺から空気が無くなるのを確認すると再び人工呼吸を実施する。

何度かその行為を繰り返していると、ボートが僕らの側にやってきた。

「遠藤！大丈夫か！」

舷側からロープを投げながら先生が叫ぶ。

「二ノ宮の意識が無い！脈はあるけど呼吸が無い！」

「そのまま人工呼吸を続ける！回収する！水下！近くの再圧チャンバー施設に連絡を入れる！最悪減圧症の恐れも考慮する！」

「了解！伊藤ちゃん、金井！先生のフォロー入ってくれ！」

「みかさんは酸素ボンベを用意して！僕と先生で二人を引き上げます！」

船の上がとたんに騒々しくなる。僕は先生の投げたロープに捕まり船の舷側まで来ると先生と伊藤っちゃんの助けを借りて、意識の無い二ノ宮をボートの上に引き上げた。

みかが酸素ポンベを持ってくるまでの間、僕は二ノ宮に人工呼吸を続けた。

みかが酸素ポンベを手にその様子を見て呆然としていた。

僕は呆然としているみかに語気荒く

「みか！酸素ポンベよこせ！早くしろ！」

と怒鳴る。

みかは慌てて僕に酸素ポンベを手渡す。僕は酸素ポンベを二ノ宮の口にあてがう。

BCをはずし、タンクを外すと、甲板に横たわらせ、楽な姿勢をとらせる。

程なく二ノ宮は薄く目を開くと僕の姿を見つける。

「二ノ宮！」

僕が呼びかけると二ノ宮はうわ言のように呟く。

「……先輩が居て……私にキスしてくれてた？……先輩……ここ、天国ですか？」

僕は全身の力がどっと抜けて、甲板に腰を落とした。
立ち上がれない。

緊張が解け、安堵を噛み締めると、腰が、砕けていた。

第5章『アイロンと文化祭 前編』

夏休みはあっという間に終わり、気がつけば二学期になっていた。あの海での一件依頼、二ノ宮は積極的になり、みかとは気まづくなった。

みかに声をかけても何か意図的に僕を避けるような気がし、二ノ宮はこれを好機と積極的に僕に言い寄ってくる。

僕は相談がてら昼食と一緒に食べるため、水下のクラスに来ていた。

水下の席には既に先客があり、伊藤っちゃんと珍しくみかが居た。みかは僕の姿を見るや、水下と伊藤っちゃんに手を振り

「ありがとうね。じゃ、私、行くね」

と逃げるように立ち去っていった。

「みか」

「真一、今日バスケット部あるからちよつと放課後アイロン部に行けそうにないから。ごめんね」

みかは申し訳なさそうに目の前で手を合わせるとそのまま走り去る。

僕が頭を掻いてそこで立ち尽くしていると水下が僕を座るように顎でしゃくった。

「何か僕、避けられてるのかな？」

「そこまでの自覚があるならまだ、見込みアリだな」

僕が呟くと水下がにやにやと笑う。

「何だよ。結構真剣に悩んでるんだぞ？」

伊藤っちゃんが肩をすくめる。

「どっちを選ぶかで悩める身分なんて羨ましいですねえ」
「ホントによ。何か腹立つ」

水下は僕の頭を小突く。僕は無然とした。

「だけど正直針のムシロに座ってるような気分だよ。だからこうして水に相談しに来たんじゃないか」

最近、伊藤っちゃんが水下の事を水っちゃんと呼ぶようになってから僕は水下の事を水と呼ぶようになっていた。

水下は腕を組んで得意げな顔をする と 答える。

「じゃあどっちか選べばいいじゃないか。二ノ宮か金井か。もしくは両方選んで納得させるか、両方捨てて納得させるかだ」
「それができれば苦労しないよ」

僕は椅子にもたれかかり天井を仰ぐとため息をついた。伊藤っちゃん が 笑う。

「ミズっちゃん。それじゃ部長は選んだりできないよ。もうちょっと判断しやすいような言い方してあげないと」
「そうか、じゃあ、どっちとやりたい？」
「はあっ？」

僕は素っ頓狂な声を上げる。水下が怪訝な顔をする。

「何も難しい話してる訳じゃねえだろう。遠藤はセックスするなら金井と二ノ宮のどっちと、または、両方が、どっちともやりたいのかって事で聞いているんだよ。まあ、まず間違いなく俺なら両方だけだね」

「そう来たか」

僕は眉間を押さえ考える。水下はニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる。

そして、伊藤っちゃんに抱きつく。伊藤っちゃんも伊藤っちゃん
で水下を抱きしめる。

「真一！ハジメテだから優しくしてね！」

「先輩！私をスキニシテ！」

気持ち悪い裏声をあげながら、僕が当惑するのを見て楽しんで居た。

その時丁度、二ノ宮が教室の戸をあけた。

「あ、遠藤先輩みつけ」

二ノ宮は僕の姿を見つけると満面の笑みを浮かべて僕の側に寄ってきた。手には大きめな弁当箱が提げられており、可愛いウサギのプリントがされたナプキンで包まれていた。

「水下先輩、伊藤先輩、遠藤先輩を借りていいですか？一緒にお昼食べたいんで」

「いいとも。二泊三日で三百円だ。毎月一のつく日は一週間で百円だ。だけど二ノ宮だからタダでレンタルしよう」

「どこのレンタルビデオだよ」

僕が水下に突っ込みを入れるが、それを待たずに僕の腕を二ノ宮が引つ張っていく。

「じゃ、屋上に行ってますので」

僕は二ノ宮に引きずられるように屋上へ運ばれる。

僕の後ろで水下と伊藤っちゃんが確かにこう囁き合っていた。

「でさ、この間ナンパした子がさー合コンしようって言ってるんだよね」

「じゃあ遠藤部長はハブにしましょう。なんか腹立つから」

僕はアイロン部の鉄の結束が存外もろかったのに気がついた。

秋の空は憎らしいほどに晴れ渡り、僕の胸を乾いた風が吹き抜ける。遠く見える赤く燃える山は僅かな秋の匂いと共に、駆け抜けた夏の終わりを僕の胸に運ぶ。

思えばアイロンと出会ってから僕の日常は万華鏡の様にめまぐるしく回り、あつという間に過ぎ去っていった。

アイロンに出会ってから僕は変わったのだろう。多分、それは僕だけでなく、水下や伊藤っちゃん、そして隣に座る小柄で愛らしいこの娘も変わったのだろう。

「はい、先輩。どうぞ」

二ノ宮は甲斐甲斐しく僕にお茶を汲む、

僕は困惑した表情を浮かべるが二ノ宮は一向に気にしていない。

「二ノ宮。あー……どうしてここまでしてくれるかな？」

「だって、先輩は命の恩人ですから」

言って二ノ宮ははにかみながら俯くと頬を桜色に染める。両手を胸の前に組みもじもじとする様は男の胸の中にある黒い欲望の鎌首をもたげさせるには十分な魅力を持っていた。

僕は目をそむけ、理性でもってそれを抑えると渡されたお茶を口に含んだ。

僕はなるべく二ノ宮を傷つけないように言葉を選んだ。

さつき、水下に相談して覚悟が決まった。

僕には二ノ宮の気持ちを受けるだけの覚悟がない。そんなの詭弁かもしれないが、僕にとって二ノ宮の気持ちは重い物だった。

「でも、もし、あれが水下でもみかでも僕は同じ事をしたよ？」

遠まわしに、僕は二ノ宮を他の部員やみかと同じ立場の人間である事を示唆する。

二ノ宮はちよつと傷ついたような表情をした。僕は良心がずきずきと痛む。

二ノ宮は可愛い。正直僕なんかじゃもったいないくらいだ。正直、僕の心に先客が居なければ、二ノ宮と付き合ってしまったいくらいだ。

先客？僕は自分の考えていた事にはたと気づく。だが、それより早く、二ノ宮が顔を上げた。

「私、バスケ部辞めてアイロン部に入っただの、遠藤先輩のせいですから！」

目じりに涙を僅かに浮かべ、頬を染ながら睨みつける。

「私、遠藤先輩の事、好きですから！」

もはや半分やけっぱちのように告白され、僕の胸にずしんと響いた。

「私、中学の頃からずっと金井先輩と笑ってる遠藤先輩が好きでした。金井先輩が憎くなるくらい……」

僕が呆気にと取られてると、二ノ宮は口早にまくし立てる。

「いつつも金井先輩の後ろに居て、全然自分の気持ちを伝えられなかったですけど……私、先輩がアイロン部作るっていう話聞いた時、自分を変えようと思いました。厳しい訓練だって、先輩と一緒に居れば耐える事ができました。正直、あの訓練は女子である私にとっては辛かったですよ。でも、訓練の度に私に声をかけてくれる先輩の優しさがあったからここまで来れたんです」

二ノ宮のどこにこんな勢いがあったのだろう。二ノ宮は泣きながら、それでも精一杯僕に思いをぶつけてきた。

「たとえ先輩が今、私だけを見てくれなくても私、いつかきっと先輩を振り向かせてみせますから！前までは金井先輩の後ろで先輩を見てるだけでしたけど、今は金井先輩と違って水下先輩達と同じ仲間のラインでアイロンかけてますし、次は先輩の隣に入ってみせますから！」

いじらしくもそう宣言する二ノ宮。僕はその思いを受け止め切れず、ただ、呆然とする事しかできなかった。

その時、屋上に思わぬ闖入者が現れた。
みかだ。

「真一！……え、あ、遙？」

血相を変えて屋上に駆け上がってきたみかは僕らの姿を認めるや、まるで金魚のようにパクパクと口を開ける。

二ノ宮は弁当箱を閉じると、僕の隣を立ち上がり、ずんずんとみかに詰め寄る。

「……私、金井先輩に負けませんから！」

みかに指をつきつけ、宣戦布告する二ノ宮。僕は正直、どうしてもいいのかわからずそこで事の成り行きを見ていた。

みかは目に涙を浮かべて、今にも泣き出しそうな二ノ宮を見て何かを言おうと口を開き、そしてそれを閉じる。そして、僕と二ノ宮を交互に見比べて、何かを言おうとした。

「わ、わたしだつて！……」

「おい！金井！遠藤は居たか！……遠藤居るじゃないか！まだ伝えてないのか！」

みかが何かを言うのを遮り、水下が駆け込んできた。先ほどのみかと同じように血相を変えてだ。

水下は対峙する二ノ宮とみかに構わず僕のところへ駆け寄ると、一気にまくし立てる。

「遠藤大変だ！生徒会がアイロン部を潰しに来たぞ！」

「……何だつて？」

僕は開いた口が塞がらなかった。

生徒会室の前には人だかりができていた。

アイロン部は一学期でこそ認知のされていない部であったが、
厳しすぎる訓練と、あまりにも常識はずれな活動、そして、商店街
の金井クリーニングの宣伝のおかげで今やこの学園では知らない者
の居ない部となっている。

アイロン部の活動は北星学園に居る者にとっては絶好のゴシッ
プだった。

「解散？アイロン部を？」

僕は人ごみを掻き分け、生徒会室の掲示板に掲示されたプリン
トを見て啞然とする。

生徒会室の掲示板にワープロで印字されたゴシック体の文字には
こう書かれていた。

「北星学園における同好会活動を実施中の『アイロン部』にあつ
ては、その活動の危険性から早急に活動の停止を求める。これに従
わず活動を継続した場合、活動に従事した生徒を退学処分とする所
存……」

そのプリントを眺め、僕は何がどうなっているのかさっぱり分か
らなくなった。

水下が説明する。

「……伊藤っちゃんの両親がうちの理事長に直接かけあったらし
い。で、生徒会を通じて解散命令が出たんだ」

「そういえば伊藤っちゃんは？」

「理事長室に一人で乗り込んだ」

「バ……」

馬鹿野郎と叫びそうになり、僕は言葉を飲み込んだ。僕が伊藤っちゃんの立場でも同じ事をするだろう。

僕は騒ぎ立てる生徒の波を掻き分け、追いつがる水下と一緒に、理事長室に向けて一目散に走っていった。

「こんな事納得できない！僕らの活動にどんな問題があるんだッ！」

理事長室に飛び込むと、そこには今まで見た事の無い、憤怒の形相を浮かべる伊藤っちゃんが嶋本先生に押しとめられながら、理事長に向かつて唾を吐いていた。

「ふざけんなよ！遊びでやってんじゃねえんだよ！命張って活動してんだよ！それを何で！」

「やめろ伊藤！お前、自分の立場がわかってんのか」

嶋本先生が必死に止める。

「……お前は推薦で大学に行くだろう。ここで問題を起こしたらお前の生涯に渡って大変な事になるぞ！」

嶋本先生の言う通りだ。伊藤っちゃんは優秀な成績で推薦入学を決めている。ここで問題を起こせば間違いなくそれは取り消しとなってしまう。

だが、伊藤っちゃんは咆えた。

「だけど！僕はここで逃げたら一生逃げ続ける事になる！」

「アイロンは大学に行ってからでも、いつでもできる！今やる必

要は無いだろー!」

「いつでもできると思つてやらないでいれば、いつまで経つてもやれる訳ないでしょう!先生、あんたが一番わかつてるんじゃないですか?あんたが一番アイロンやりたくて!それでもいつでもできるからといって誤魔化してきたんじゃないんですか!」

嶋本先生が唇を噛む。そのやり取りを見ていた理事長が咳払いをする。

榎本理事長。北星学園を総括する人物で生徒には理解のある人だ。アイロン部も当初は問題視されていたが、この人の鵜の一声で放置する事が決まったと、ちらりと耳にしていた。

「あー、嶋本先生、いいかな?」

嶋本先生は暴れる伊藤ちゃんを理事長室のソファに無理矢理座らせると、榎本理事長に向き直った。

「確かに彼の言うところは分らないでもないが、アイロン部の活動は少々危険すぎる。一学期中に鳥山八景でロッククライミングをしたり、夏休み中にはスキューバダイビングもしたみたいじゃないか。ダイビング中に一年生の女子が事故を起こしたとも聞いている。幸い、大事に至らなかったからよかったものの、もし生徒の身に何かあれば君は責任を取れるかね?」

「……理事長のおっしゃられる事は良くわかります。ですから、私は部の責任者として彼らに適切な訓練……本物のレスキュー隊員が実施しているような訓練を施し、事故の無いように万全を努めております」

「それは私も認めよう。だが、事故はいつでも起こるものだ。野球やバスケットボールとは訳が違う。ともすれば人の命に関わる事になりますよ。私も君の過去を少し調べさせて貰ったが……どうだ

ね、彼らにも同じ事が起こりえた場合、君は責任を取れるかね」

嶋本先生は黙っていた。

伊藤っちゃんが毒づく。

「どうせ、うちの親に何か言われたんだろう？じゃなきゃ、急に部を無くせだなんて言うはずが無いじゃないか」

「伊藤！」

嶋本先生が短く叫び、それを制した。

理事長室に飛び込んだまま、呆然と立ち尽くす僕らを見つけ、榎本理事長がため息をついた。

「君が部長の遠藤真一君だね？」

「はい」

僕は惘然とした面持ちで答えた。

「まあ、聞いての通りだ。北星学園としてアイロン部の解散は決定事項だ。これ以上の活動は他の生徒に対する煽動行為としてこちらも強制力を行使せざるを得ない。私は構わないが君達が懸命な判断をしてくれる事を祈るよ」

榎本理事長ははっきりとそう言い放った。

それは、アイロン部として活動を続けるなら学校を去らせる。手心や慈悲は全く加えないという宣告だった。

嶋本先生は軽く頭を下げると、僕らを理事長室から追い出した。

「……遠藤。俺はもう少し、理事長を説得してみる。お前たちは先に部室に行ってる」

先生は苦虫を噛み潰したような表情で僕にそう言った。その表情から、説得が難しいという事を悟った。

「……大丈夫なんですか？」

「頑張ってみる」

弱々しく頷き、理事長室に戻る嶋本先生の後姿を見送り、僕は肩を震わせている伊藤ちゃんを連れて、部室へと足を向けた。

部室につくと、伊藤ちゃんは落ち着きを取り戻し、僕らに頭を下げた。

部室には僕をはじめ、アイロン部の部員、それとみかを入れた全員が集まり、伊藤ちゃんを囲むようにして机や椅子に思い思いに腰かけていた。

「ウチの親が迷惑をかけます」

そして、ぼつりぼつりと話し始める。

「夏合宿の時から水っちゃんのところで世話になってたけど……
どうやら限界みたいですね」

昼間の弁当が同じビ二弁なので少し気にはなっていたが、あれからずっと伊藤ちゃんとは水下的ところで暮らしていたみたいだ。

「この間、携帯に母親から連絡がありました。僕がこのままの生活続けるのであれば親父が学校に掛け合ってアイロン部を無くし

てしまうと。まさか本当にやるとは思いませんでしたけど、こうな
ってしまつたら僕も腹をくくるしかないですね」

伊藤っちゃんは優しく笑うと、僕の方を見つめてきた。

伊藤っちゃんは部を自ら辞めるツモリだ。せめて、僕らに迷惑を
かけないようにする為に。

「んなの俺が認めないぞ？」

伊藤っちゃんの肩を掴んで、水下が怒気を孕んだ声で言う。

「伊藤っちゃんだつてさっき理事長室で言つてたじゃないか。今
やらないで諦めていればこれから先、ずつとはじめる事なんて無い
んだつて。それは本気でエクストリームアイロンをしてきたから言
える事だろう？俺が伊藤っちゃんと逆の立場だつたら俺だつてあの
場面でそう言うさ。俺も本気でエクストリームアイロンをしてきた
から！」

「だからこそ、本気でやってる水っちゃんに続けて欲しいから僕
は自分で部を辞めるツモリだ。そうすれば最悪、活動は認められる。」

「なら、逆の立場で俺や遠藤がそれを本心から願うかと思うか？
一緒に反吐吐いて苦しんで、エクストリームアイロンをしてきた伊
藤っちゃんだけをハイサヨナラで済ますと思うか？」

「それはわかりますよ……でも、僕にとつてもアイロン部は大切
ですから」

伊藤っちゃんは天井を見て、大きく息を吸い込むと、目の端に涙
を浮かべた。

「前にも言つたとおり、僕は高校生活の思い出が勉強しか無かつ

たんです。それで推薦入学を決めてから、思い出の一つと思って部活をはじめようとしたんです。本当は、アイロン部でなくてもよかった。囲碁将棋クラブでもパソコン部でもよかったんだ。ただ、アイロン部って名前が文化系のクラブだと思って間違えて入部したんですよ」

伊藤っちゃんがぼつりぼつりと語りだす。

伊藤っちゃんは目の端の涙を拭くと辛そうな笑みを浮かべる。

「実際は、運動部が裸足で逃げ出すような過酷な訓練ばかりで辞めようとも思いましたけど、また、勉強だけの空っぽの生活に戻るくらいなら死んだ方がマシと思って死ぬ気で頑張りました。その苦労の先にあるエクストリームアイロンの達成感を知った時、正直涙が出ましたね。覚えてますか？一番最初。鳥山八景で部長と水っちゃんがやったエクストリームアイロン。シャッターを切りながら僕はこの世でもっともありえなく、馬鹿で、美しい光景があるとしたらあの瞬間だと思いましたよ。アイロンをかける為に血反吐を吐く訓練をして、命を懸けるんですからね」

伊藤っちゃんが自嘲気味に笑う。

「だけど、それを僕は誇りに思ってしまった。結果はただ、シャツにアイロンをかける事だったけど、その過程はまぎれも無く、本物の努力と研鑽で、その結果があの瞬間ですから」

伊藤っちゃんは最後に、吐き出すように言った。

「……でも、もう十分です。高校時代の思い出には十分な程、色々な物をいただきましたから」

それはどこか悲しげで、切なく震えている声だった。

だが、その伊藤っちゃんの横面に、水下の拳が飛ぶ。

盛大な音を立てて伊藤っちゃんが床に倒れ、水下が伊藤っちゃんの胸倉を掴み、今にも鼻先に噛み付きそうな勢いでまくしたてた。

「何デメエで自己完結してんだよ！んな自分勝手許されっと思っ
てんのかよ！アア？オメエ本気でエクストリームアイロンやってた
んじゃねえのかよ？こんな形で取り上げられてお前納得できんのか
よ！」

水下の目じりにも、僅かに涙が浮いていた。

「俺は正直、エクストリームアイロンやるまで本気で何かに打ち
込んだ事なんてなかった。でもよ！そんな自分が許せなくて俺はマ
ジにエクストリームアイロンをやってきたんだよ！そこまでマジに
なった物をこんな形で簡単に諦めれんのかよ！オメエはッ！」

「僕だつて諦めたくないよッ！でもしょうがないじゃないかッ！」

今にも殴りあいそうな二人。目の端に浮かぶ涙を見て、僕は胸が
張り裂けそうになった。

「二人ともヤメロッ！」

僕は叫んでいた。

「アイロンはアイロンだけじゃ掛けられないんだ。台とシャツが
ないとアイロンはただの熱い鉄でしかないんだ……だから、伊藤っ
ちゃんの居ないアイロン部はアイロン部じゃない」

伊藤っちゃんが俯く。

水下が何かを僕に言いかけたが、僕はそれを制し、先に口を開く。

「絶対に廃部になんてさせない。こんな状況、崖や海の中でアイロンをかけるのに比べれば全然たいした事の無い状況だ」

僕は精一杯の強がりを書いてみせる。だが、そんなものは水下や伊藤っちゃんにはわかってしまっている。

「だから、せめてもう少し時間を僕にくれ。絶対に何とかする方法を考えるから……それまで、各自、自主トレだけは欠かさずやっておいでくれ……今日は、解散だ」

僕はそれだけ言うと、泣き出しそうになるのを堪えて駆け出すように部室を後にした。

誰も居なくなつた自分のクラスに戻ると、嶋本先生が教壇の上に座つて外を眺めていた。

僕はその様子から榎本理事長の説得がうまくいかなかったものと判断した。案の定先生は僕の姿を認めると、疲れた顔をした。

「ダメだった」

「そうですか……」

僕は短くそう答えると、嶋本先生の前の机に向かい合うように腰掛けた。

「すまん。俺の力不足だ」

「いえ、そんな事無いです……」

僕は嶋本先生に何か声をかけるべきだと考えたが、いくら考えても何も声をかける事ができなかった。

しばらく、教室を沈黙が支配していた。

遠く、運動部の生徒の喧騒が聞こえる。ただ、それよりも壁の時計が時を刻む音の方がはつきりと聞こえていた。

「なあ、遠藤」

「はい」

「これは俺の独り言だ。流して聞いてくれ」

嶋本先生は膝の上に肘を乗せ、組んだ手に額を押し付け俯きながらぼつりぼつりと呟き始めた。

「俺も一時期、エクストリームアイロンを辞めた時期があった。丁度、これと同じ理由で辞めさせられたんだ」

僕はただ、黙って聞いていた。

「その時は、エクストリームアイロンはいつでもできると思っていたんだ。だけど、そんな時間は二度と戻ってこなかった」

嶋本先生はため息をつく。

「俺はお前たちをそんな目にあわせたくはないが……どうにも、それだけの力が無い」

嶋本先生は顔を上げて僕を見ると呟いた。

「こんな事なら、興味本位でお前をエクストリームアイロンなん

かに連れて行かなきゃよかったのかもな」

「僕は先生を恨みませんよ」

「だけど、遠藤、覚えておけ。あるとき、お前は突如としてエクストリームアイロンを恨む事に遭遇する可能性も」

僕は先生が何を言おうとしているのかがわからなかった。

「それは、エクストリームアイロンを辞めろという事ですか？」

「そうじゃない……いずれ、そうだな、いずれわかる時が来る。でも、その時には遅い事だってあるんだ」

嶋本先生が何を言わんとしているのかが僕には良くわからなかった。

「嶋本先生、何を言おうとしているのかが良くわかりません」

「……そうだよな。わからねえよな。俺だってわかんねえんだ。わかるわけないよな」

嶋本先生は先生で迷ってるみたいだ。僕らにこのままエクストリームアイロンを続けさせるか、否か。

「すまん、遠藤」

嶋本先生のその言葉が全てを語っていた。

答えも出せないくらい迷っている嶋本先生は僕らがいつも頼りにしていた嶋本先生とは違っていた。

僕は鞆を持って立ち上がると教室を後にする。

「先生、エクストリームアイロン好きですか？」

「……ああ、大好きだ」

「なら、大丈夫です」

僕は何が大丈夫かわからないまま、そう答えた自分の全てがわからないまま、逃げるように教室を後にした。

「あんな事言って、どうにかできるアイデアなんてあるの？」
「ねえよ、そんなモン」

すっかり日が沈み、暗くなったさくら公園のベンチで僕は吐き捨てるように言った。

隣に座るみかが心配そうに僕の顔を見つめているが、僕には構ってやれるだけの余裕がなかった。

状況は絶望的と言ってもいい。

榎本理事長がああも強硬的な物言いをするのであれば、情に訴えて物事を進める事もできない。かといって、伊藤っちゃんが辞めて部の存続を取るのも、水下や二ノ宮が納得しないし僕も納得できない。

かと言って魔法のように状況を改善できるアイデアなんて浮かんでこない。

僕は冷たい風の中、鈍く暗い空を仰ぐ事しかできなかった。まるで、空からアイデアが降ってくるのをずっと待つ雨乞いのようなのだ。

「真一……もう八時だよ。そろそろ帰ろう？」

みかが心配そうにそう言ってくれる。公園の時計の短針は八時を回り、長針はまもなく二を指し示す。

まだ夏の残暑が残るとは言え、季節は本格的な秋を向かえ、夜になると身を震わせる寒さが降りてくる。

みかの吐く息が白み始め、組んだ指先が赤くかじかんでいる。そのうち、みかがぼつりぼつりと語りだした。

「真一……この際、エクストリームアイロンやめちゃおうよ」

僕は耳を疑った。僕が驚いてみかを振り返るとみかは俯いたまま、組んだ手をもじもじとさせる。

「だって……本気でやってる真一には悪いけど……前まで私の側に居た真一が凄い遠いところに行っちゃった気がする」

みかは体を預けるように僕の肩に頭を乗せると寂しそうに囁いた。

「……これだけ近くてもさ？真一、私を置いてどっか遠くに行っちゃいそうで……どっか遠くで大怪我しそうで怖い」

みかが僕の顔を見上げる。

「知ってる？私、真一がエクストリームアイロンしてるところ、ずっと見てるんだよ？崖で水下君と一緒に落っこちそうになった時も、遙が危なくなった時も……あれがもし真一だと思ったら凄く怖くなった……伊藤っちゃんのご両親が部を無くそうとする気持ち、すごくわかつちゃう」

みかが僕の肩に額を押し付ける。

「ねえ真一……もし、やめてくれるなら、何でも言うこと聞くら、やめてくれる？」

みかの表情は見えないが、その声は震えていた。

僕は今まで周りが僕らをどんな目で見てるか考えた事が無かった。

みかの言うとおり、僕らのやっている事は端から見ればとても危ういものだ。一つ間違えば命を落とす行為であり、その行為の結果がただのアイロンがけ等、馬鹿馬鹿しい行為に他ならない。

もし、僕に息子が居ると仮定してエクストリームアイロンをしていれば僕は間違いなく辞めさせるに違いない。そう考えれば伊藤ちゃん両親が強引にも部の廃止を求める理由もわかる。

みかが僕の着ているコートを握り締めてくる。みかのぬくもりと、肩にかかる吐息がじわじわと僕の心を締め上げる。それは打ちひしがれた僕の心を優しく手折る。

「……そうだな」

呟いた。だけど、僕は負けるわけにはいかなかった。

僕はみかを振り払うように立ち上がると、ベンチの上に立った。そのまま背もたれの上に、バランス良く立った。

「やっぱり無理。エクストリームアイロン辞めらんないよ」

みかは俯き、顔を拭くと、笑顔で僕を見上げた。

「……だよな。やっぱり真一ならそう言うと思った！私じゃちょっとアイロンに勝てなかったか……」

無理におどけた笑顔が、痛い。僕はなるべくみかを見ないように空を見上げる。

「みかがもうちょっと可愛ければ勝てたかもしれないけどな？」

僕もおどけてみせる。

「む、今でも十分可愛いじゃん。失礼な」

膨れるみかの隣に座ると、僕は苦笑する。

「何でだろうなあ。よりによってこんなイカレたスポーツにイカレちゃうなんて自分でもどうかしてるよ」

「大丈夫。真一は十分イカれてるから」

「……自分でもどうしようもないのがわかってる。けどどうしようもないんだ。どうしようもなくやめる事なんてできない」

目を細め、吐き出すように呟く。

僕は再び立ち上がり、公園を歩く。遅れてみかが僕の後ろを歩く。僕はバスケットコートに立っていた。

ひんやりとした空気がバスケットコートを包み、水銀灯の鈍い光がコンクリの上に描かれたコートのラインが浮かぶ。

白い光に浮かび上がるバスケットのゴールは春、僕が登って曲げたまま、傾いたままだった。

僕は苦笑する。

「真一……？」

「僕はこれからエクストリームアイロンを始めたんだよな……みか、ボール」

「え？」

「ボールだよボール。バスケットボール」

僕はきょとんとしているみかにバスケットボールを催促する。みかはサブバックの中からバスケットボールを出すと僕に投げてよこした。

僕はバスケットボールをゴールに向かって放る。案の定、バスケットボールはゴールの板に当たって落ちる。地面を跳ねるバスケットボールはみかの足元に転がる。

みかはそれを拾い上げると僕の方を見る。僕はみかに向かってゴールを示した。

みかは僕より遠い場所からゴールに向けてボールを放る。それは綺麗な放物線を描いてゴールネットに突き刺さり、揺らす。

「ないっしゅー」

僕がおどけてそう言つとみかは困惑した表情で僕を見返してきた。僕は足元に転がるボールを拾い上げると、地面に叩きつけ、タムタムとドリブルを始める。

そして、みかに対して指をくいくいと曲げてみせる。

「来い、みか」

「……つともう」

みかは半ば諦めたようにため息をつく、コートを脱いで僕の方に駆け寄ってくる。僕は半身を引いてみかをけん制する。

みかは必死に僕からボールを奪おうとするが、僕は右に左にと体を振る。前と違い体力だけは作ってきてるからみかも簡単に僕からボールを奪えない。

「真一の癖に生意気な」

「昔のままだと思ふなよ」

だが、程なく僕の僅かな隙をついて、みかが僕のボールを奪う。そして、僕の脇をすりぬけ、ゴールにボールを放る。

揺れるゴールを眺めて、僕は笑う。

「ないっしゅー!」

僕は親指を立てる。みかは小さくガッツポーズして答えた。

「やっぱりバスケじゃみかには勝てないな」

「そりゃ年季が違うからね」

「そりゃそうだ」

僕は苦笑する。

「よ……っと!」

僕は半年前と同じように、ゴールに登る。昔は上るのに苦労したが、今では簡単に登っていける。

「あれから半年、変わったようでも変わってなくて、でもやっぱり変わってる」

ゴール板の上に座り、ゴールリングの上に立つ。

吹く風が心地良い。

みかが呆れながらも微笑を浮かべ小さくため息をついた。

「真一、また叫ぶの?」

「ああ」

空に浮かぶ星が、僕の頭上で燦然と輝き僕の鈍く曇った心に差し込む。僕は力いっぱい叫ぶ。

「ワアアアアアアアアアアッ!」

叫んで笑う。そうだ、単純な事なんだ。僕はあの時からずっと、そうだった。

「僕はね！アイロンでね！生きている事を証明したかった！極限の興奮と清潔なシャツ！誰も感じたことの無い感動で僕が僕である事を証明するんだ！」

僕は思い切り跳躍して飛び降りる。星空に近づき、そして風と一緒にたつて地面に迫る。

地面を捉えた足から頭の芯にかけてびりびりと衝撃が走る。僕は精一杯踏ん張って腹の底から叫んだ。

「ツシャアアアアアアアアアッ！」

痛みも、苦痛も、楽しさも、全部ひっくるめて今ここに生きている僕の証明なんだ。僕はこの感動を両手一杯抱えて行く。

「よし、エクストリームアイロンやるぞおおおおおおおおおおー！」

僕が叫んでいるとみかが後ろで苦笑する。

僕もつられて笑う。

僕らは二人で歩き出した。

公園を出て家路に向かうその途中、みかがぽつりと呟いた。

「……あれから半年かあ……早いね」

「来年は受験だし、遊んでる暇も無いよ。だから、今のうちにやれる事をやらなくっちゃ」

僕は大きく背伸びをする。こんな充実した日はもう、やってこないのだろう。そう思うと少し寂しくも、そして誇らしくもある。みかもクスリと笑う。

「そつか、そうだよね……そういえば真一、来週の文化祭、誰と一緒に見て回るの？」

「あれ？来週文化祭だったっけ？」

僕は文化祭という単語に首を傾げる。みかはまた、呆れたような顔をして僕の肩を小突く。

「本当に真一ってエクストリームアイロンならアイロンで一つの事しか頭にないよねえ。ダメだよそんなんじゃ……ホラ？去年覚えてる？音響車借りてグラウンドで軽音楽部が野外バンドして盛り上がったじゃない。全校生徒で沸いたよねえ」

その情景を思い出してかみかがクスクスと笑う。確かにあの時の喧騒は僕も覚えている。全校生徒が夜のグラウンドに集まり、ライトアップされた音響車の上で熱演する軽音楽部の音楽に負けなくらいの喧騒で騒ぎ立てる。

音楽に騒ぐのではなく、ただ、そこに居る事に騒ぐあの様は今でも印象的に覚えている。

「そつか……文化祭か……」

僕は俯き考える。文化祭、ともすればそれは現状を打破できる唯一ともいえる機会かもしれない……

隣でみかが俯きながら手をもじもじとさせ、口の中でじいじによくと呟く。

「真一……もし、よかつたら……一緒に……」

僕は一つのプランを頭の中で練り上げ、それが明確な形となる前に叫んでいた。

「……よしッ！もうこうなったらやるしかないか！」

「はい？」

「アイロン部を潰さないアイデアがひらめいた。みかのおかげだ」

僕はみかの手を握り、ぶんぶんと振るう。

みかははじめあっけに取られていたが次第に本日何度目になるだろう、呆れた表情を作る。

「……で、真一？文化祭、可哀想な真一と私が一緒に回ってあげようって打診してるんだけど、大丈夫なの？」

「あん？何言ってるんだ。忙しくてそれどころじゃないよ。みかにも手伝って貰うからな？アイロン部マネージャー」

僕が満面の笑顔でそう言うと、みかは顔を怒らせてわめき散らす。

「バカじゃん！」

僕の手を振り解き呆気に取られる僕に構わずまるで駄々っ子のようにわめく。

「バカじゃん！バカじゃん！バカじゃん！」

僕はその様を見ながら笑うと、家に向かって走りだした。

「置いて行くぞ！みか！明日からめっちゃ忙しくなるから今日は

早く寝ておけよ！」

「バツカじゃーん！」

僕は次の日屋上に全員を集めてそのプランを説明した。あれから色々な策を考えたが僕らが最終的に実行できる策はこれくらいなものだった。

「これ……マジでやんの？」

水下が僕が渡したプリントを一読して驚く。

僕は静かに頷くと一同の顔を見渡した。伊藤っちゃんあたりは愕然として声も出ないようだった。

「部長……この計画ってひょっとして……」

「そうだ、北星学園文化祭最終夜ライブをアイロン部でジャックする。そして全校生徒の前に理事長を引きずり出し、そこでアイロン部を存続させる事を確約させる」

僕が厳かにそう告げると皆押し黙った。

「……でも軽音楽部が許しませんよ」

伊藤っちゃんの申し立てもまったくもってその通りだった。だが、僕はそれに対しても何も考えていない訳ではなかった。

「水下、お前軽音楽部に友達居るだろう？」

「ああ、居るけど……」

「この別記計画書Aを軽音楽部に渡しておいて貰えるか？」

「渡すのはいいけど……どうすんだよ？」

「どうせなら、軽音楽部にも一役打ってもらう」

僕は鞆の中から中身の詰まったA4の茶封筒を取り出すとそれを水下に手渡した。

水下はその封筒の中からアイロン部に手渡した計画書とは別の計画内容が書かれた計画書に目を通し、驚く。

「遠藤、コレ……本気でやるのか？」

「ああ。軽音楽部にアイロン部の歌を歌ってもらう」

その場に居たみんなが啞然とした。
だが、僕は次に二ノ宮に別の封筒を渡した。

「遠藤真一ファンクラブ第一号の二ノ宮君」

「はい？」

「ナンバー十二から十六までは演劇部で構成されているそうじゃないか。だったら、この計画書を渡してもらえないかな？そして計画の確約をして欲しい」

二ノ宮が僕から手渡された計画書を見て水下と同じように驚く。

「これは……演劇部にアイロン部の歌でミュージカルをやれと？」

「軽音楽部とは一度、打ち合わせ練習が必要だろうが、その日程も組んである。交渉は難しいが君ならできる。僕はそう信じてる」

僕は二ノ宮の肩をバンバンと叩き、気合を入れてやると、伊藤っちゃんに振り返る。

「伊藤っちゃんは一時期生徒会に在籍していたんだよね？」

「ええ、まあ」

「今でも生徒会に顔は利くのかい？」

「まあ、少しは……」

「なら、今回の計画、先生方に漏洩しないように生徒会内に内通者を置いて見張って貰えるかい？」

「……生徒会内なら目は届いても、有象無象の生徒からの通報は阻止できませんよ？それに、各部だってアイロン部の実情を知ってなお協力してくれるかどうか……」

「多少のチクリは覚悟の上だ。それに、この計画はあくまでアイロン部の活動ではなく他の部による活動であって、アイロン部の活動ではない。各部の独自の活動だ。軽音楽部がアイロン部の歌を歌って人を死なせる訳でもないし、演劇部がミュージカルをしたところで、同じく人は死なない……それに、今回は北星学園における生徒による自由を勝ち取る戦いだ」

僕はまるでどこかの政治家のような熱弁を振るう。

「教師や理事長の一方的な都合で我々生徒が憲法で保障されている精神の自由が制限され、部活動を制限される前例を作ってしまうば今後、事あるたびにこの事例を出し、教師達は我々生徒の活動を制限するだろう。そうなる前に我々は戦わねばならない。僕らアイロン部はたまたま一番最初にその事態に遭遇しただけだ。ならば、一番最初に戦い、そして、勝つまでだ！」

だが、しかし、皆の表情は暗かった。

二ノ宮がぼつりと呟く。

「でも……これだけでうまく行くのでしょうか？」

「多分、どの部活もこの話に乗ってこねえよ。だって乗ったって得しねえじゃん」

「先生達に睨まれるような事になれば、今後の学校生活だって大変ですからね」

僕はそこで不敵に笑う。

そして、先ほどから黙って事の成り行きを見守っていたみかに振り返る。

「みか」

「はい？」

「金井クリーニングはPTAに所属してるし、また、少年補導員や商工会議所にも繋がりがあるんだろう？」

「ま、まあ、あるけど……」

「なら、PTAに対してアイロン部の存続の件について水面下で団結するよう策を打って貰って、少年補導員の会合でアイロン部のポスターを配布し、補導員の方から連絡を入れさせるんだ。で、商工会議所にアイロン部のポスターを持って行って他のクリーニング店に対しポスターの掲示を依頼するんだ。で、電気屋のモニターテレビにこのエクストリームアイロンのデモテープを流して貰い商店街から、北星学園にアイロン部があるという事実を街に認知させる。で、この間の余った部費でアイロン部のイラストがプリントされた商品券を作り、それで他の部に買収工作をしかける」

「ちょ、ちょっと待って真一。うちの親にそんな事させられないよ！」

「なら、仕方ない、親御さんには悪いがこう伝えておいてくれ。アイロン部は今まで無断で使用されたポスターの写真について肖像権の侵害で訴える覚悟がある。」と」

「あんた！私を脅す気！」

「……それほどこっちは必死なんだって事。みか、もう僕が頼れるのは君しかないんだ。頼むよ」

僕は切なそうな表情を作る。みかは慚然とした表情をしたまま口の中でごによごによと何かを呟いていたが、僕はそれを肯定の意思と受け止め、みかに別の計画書を手渡す。

「これに、詳細な計画が書いてあるから。親父さんに渡せばわかるはずだ。わからなければ僕の携帯電話の番号載つけてるから連絡してくれ」

僕は皆に計画書をそれぞれ渡すと、メモ長を取り出し、終わった工程にチェックをつける。

「さてと、みんな下地が終わったならそれぞれ僕の携帯に報告してくれ。で、何か不備な点があったりしたらそれもそのままにしないでガンガン報告してくれ。もし、どうしても納得しない部とかがあれば、僕の方で空手部に掛け合って実力行使の算段を取るから」

僕がそうまくしたてると、二ノ宮と水下が呆けたように呟く。

「遠藤先輩って……こんな人でしたっけ？」

「結構、あざとい性格してたんだなあ」

僕は悪戯をする悪ガキのような笑みを浮かべる。

「ま、高校時代ってのは一度しかないんだから、こんなバカな事できるのも今しかないんだ。やれるうちにやれるだけの事、やっておこつ」

僕はそう残すと、屋上を飛び出した。

まだまだやらなきゃ行けない事は沢山ある。

ぼんやりしている時間なんて僕には無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7740y/>

アイロンより熱く、シャツより爽やかに

2011年11月26日15時49分発行